守りたい者ありますか？

テク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守りたい者ありますか？

【Ｎコード】
Ｎ３０７８Ｙ

【作者名】
テク

【あらすじ】
恭也が幼少時に川神で風間ファミリーと出会うところから始まります。

独自設定が多く、オリジナル展開が多いです。
一応まじこいもとらハも知らなくても読めるように書いているつもりですので、興味を持った方はぜひ読んでみてください。

１２月７日、タイトル変更しました。旧題「恭也ｉｎ川神」

設定集　12月8日　編集

12月8日更新しました。

原作と違う部分やとらハの設定をまとめようかと思いました。
ちなみにこれは話が進むにつれて更新していく予定ですのでネタばれも含みます。
なので先に本編を読んだ方がいいと思います。
細かすぎて恐らく分からないであろうネタがちょこちょこあるのでこちらで確認していってください。

登場したとらハキャラ

不破家

不破恭也
原作の高町恭也。ただし原作と違い御神流が存続しているため原作より強い。ＫＹＯＵＹＡの基準は人それぞれだがこの作品では恐らくだいたいの人がこの恭也をＫＹＯＵＹＡと呼ぶと思われる。
ちなみに作者的にはＫＹＯＵＹＡにしたくなかったけれど、ＭＯＭＯＹＯがいるので仕方なかった。
真面目だがたまに真顔でウソをつく。

不破士郎
原作の高町士郎で恭也の父。原作ではすでに死んでいたのでどれほ

どの強さかは不明。この作品では川神院の師範代レベル。ただし戦闘シーンはほとんどないのであまり意味ない。

不破桃子
士郎の嫁で恭也の母。原作では海鳴市で翠屋という洋菓子店を経営していて有名なパティシエ。
この作品でも川神市で翠屋を経営。

不破なのは
士郎と桃子の間で生まれた子供、特に原作と差異はない。
恭也とは父親の血しか繋がっていないが仲は凄くいい。
京にお義姉ちゃんと呼ぶように教えられている。

不破御影
原作では名前だけ登場し、御神の家が爆弾で全滅したときに死んでいた。この作品では裏世界最強の女傑。かつてこれに川神鉄心、ヒューム・ヘルシングなどをふくめ世界最強クラスの人物として噂されていた。

不破琴絵
原作では結婚式の日に爆弾で死んでいるが、この作品では生きている。恭也の初恋の人。

御神静馬
原作と同じく御神流の当主だが生きている。

不破一臣
不破家当主、以下同文

川神学園

月村忍
原作ではメインヒロインでないのに公式ヒロインになっていた。ドイツに実家があり、クリスとも留学した学校が同じなため知り合い。原作では普段は静かな大和撫子な雰囲気だか気に入った人の前では結構はっちゃけるタイプ。ちなみにクリスに日本の知識を面白おかしく教えている張本人。
日本の中学では京と知り合い親友となる。
その後、川神学園に入学し恭也と同じクラスになる。

赤星勇吾
原作では恭也と5年連続同じクラスの親友で唯一立ち絵が出てくる男キャラ。
爽やかなスポーツ青年な上相手のいいところを見つけるとすぐ褒めるのですごくモテる。
この作品では川神学園の剣道部に所属し、草間一刀流という日本最大の剣道流派で剣を学んできた。
恭也が武者修行時代に出会い、その後川神学園で再開する。

鷹城唯子
原作ではとらハ1のヒロイン、また3では体育教師をしていた。

この作品では川神学園の体育教師で恭也達の担任として登場。
また護身道部の顧問もしており、かなりの実力者。

ＣＳＳ

フィアッセ・クリステラ
光の歌姫と呼ばれる世界的有名歌手。
一度テロリストに命を狙われたところ、護衛をしていた恭也に助けられた。
原作では恭也の幼馴染だがこの作品ではそうではない。
恭也のことは命の恩人として尊敬している。

ＳＥＥＮＡ　名前のみ登場
本名は椎名ゆうひ。
有名な歌手でＣＳＳに所属しフィアッセの親友でもある。
フィアッセの命の恩人の恭也に感謝しており新曲が出来るとまず不破家に送るようになる。
もともと川神出身なためたまに翠屋にも顔を出す。

アイリーン・ノア　名前のみ登場
若き天才として有名なＣＳＳ出身の歌手。
フィアッセ、ゆうひの親友で恭也とも面識がある。

フィオレ・クリステラ
世紀の歌姫として有名な歌手。
現在は若い世代の育成に力を注ぎ、歌手育成学校であるクリステラ

ソングスクール（ＣＳＳ）の校長を務めている。
夫同様福祉関係やボランティアに力を注いでいるため政敵も多く、
よく不破士郎に護衛を頼んでいた。

その他

アルバート・クリステラ　登場回　川神へ行く
イギリスの政治家。士郎の親友で親日派なため日本語も話せる。

香港警防隊の隊長　登場回　金曜集会！！
陣内圭吾のこと。
士郎と勘違いから戦ったこともあり、その実力は士郎をして闇に潜む死神と云わせたほど。

クレイジーボマー、スライサー　名前だけ登場　金曜集会！！
原作ではＯＶＡで登場。
共にフィアッセを狙ったテロリスト。

相川真一郎　登場回　川神学園入学！！
とらハ１の主人公で鷹城唯子、野々村小鳥の幼馴染。
そこらのアイドルよりも可愛い顔をしていて学生時代にはファンクラブもあった。だが男だ！！
料理も上手、だが男だ！！
女よりも女らしい、だが男だ！！

野々村小鳥　登場回　川神学園入学！！
とらハ１のヒロインで永遠のロリ。
井上いわく神が限界を超えて生み出した芸術。

恐らく剣道をやっているであろう女生徒　登場回　とある日常の一幕
藤代のこと。
原作では女子剣道部の部長。新入生歓迎会で赤星と演武を披露した。

松尾さん　名前だけ登場　世界を回ると出会いも増える
翠屋のアシスタントコック。桃子がまだホテルで働いていた時から
一緒で桃子が翠屋に引き込んだ。
いつも桃子に苦労させられ、士郎ですら恐れる殺気を放てるように
なった。

エリス　名前だけ登場　どきどきのデート　後編
マクガーレン・セキュリティサービスの社長娘。
実は恭也と幼い頃に出会っており、恋心を持っていた。
原作では父親が早くに亡くなったため責任者をしていたが、この作
品ではまだ生きているので学生をしながら普通の社員として働いて
いる。

なのはがお泊まりをした友達　登場回　どきどきのデート　後編
アリサ・バニングスのこと。
この作品ではローウェルではなくバニングス。だから生きてます。

槇原愛　登場回　恭也の一日　朝
恭也がランニング中に挨拶する動物病院の先生。
とらハ２のヒロイン。

神咲那美　登場回　太陽は沈まない
とらハ３のヒロインで日本最大の退魔師流派の家の娘。
とはいえ血は繋がっておらず養子として引き取られた。
霊の退治よりも鎮魂を得意としている優しい娘。

以下とらハ設定、とらハネタ

御神流
詳しくは本編で。

神崎一灯流
鹿児島の退魔師一族。

ホテル・グランシール東京
有名なホテル。

ＳＡＥＫＩレコード
大手音楽会社。基本的にＣＳＳが日本で出すＣＤはこの会社から出している。

炎群（えんぐん）
戦国の剣豪物の小説。
とらハ原作で美由紀がオススメしていたもの。

マクガーレン・セキュリティサービス
イギリスの警備会社。

パワードハーツ
原作では忍が強い格闘ゲーム。
ちなみにこのＳＳランクを出したのは忍。

以下オリジナル設定および原作との相違

八神孝
オリキャラ。四十代に見えるが実は五十代後半。元川神院師範代で今は釈迦堂に負けて降格され準師範代。ただし実力は今でも十分師範代級。
性格はいたって温厚だが意外と融通も利き、川神院では鉄心を除き最年長であることからよく相談される。また普段からルーと釈迦堂の間を取り持っているため鉄心からの信頼も厚い。

京
メインヒロインの一人。
原作では大和にベタ惚れだがこの作品では恭也が好き。原作よりも早く恭也が京の存在に気付いたため、加入時期も早まった。京虐めの主犯はトニーで、これも加入時期が早まったために喧嘩となった。

トニー
原作では一回だけ名前が出てきた。
この作品ではなぜか原作以上に出てきた。
本名は富田鈍（とみたけにぶる）、でもトミーじゃなくトニー。

冬馬
この作品では風間ファミリーに影響され改心した。

ユキ
原作では大和に仲間に入れてもらえず、母親の虐待やいじめで心が壊れたところを冬馬に拾われた。
この作品では心が壊れる前に冬馬により保護された。
タイミング的には丁度マシュマロを持って行った時期。

準
子供のときまだロン毛。
ただし作者はハゲが好きなのでちゃんと剃らす予定。
生粋のロリコンでもある。

メッシおよび他の格闘家の皆さん
恭也と戦い気の存在を知り修行中。
かつての数倍の強さを身に着けている。
これから時々出番があるかもしれない。

恭也の・・・（前書き）

この小説には独自設定が多数あります。なのでキャラ崩壊なども出来るだけ抑えるつもりですが多分あります。
未熟な文かつ自己満足なところの多いこの話ですがそれでもいいという方はぜひ見ていってください。

恭也の・・・

現代の日本ではあまり見ることのできないほど大きな日本家屋、その中で二人の剣士が戦っている。
戦っているのは成人男性、そしてもう片方はまだ小学校も卒業していないであろう少年であった。
特徴的なのは、お互いの武器が一般的な刀ではなく小太刀、それも二刀流であることだ。

永全不動八門一派・御神真刀流・小太刀二刀術、通称　御神流。

それが彼らの使う流派だ。
その歴史は古く、その時代の権力者の傍には常に御神の人間が居て、守護していたと伝えられている。
現代では政治家や大企業の社長など護衛など主としており、拳銃などが現れ刀が廃れてしまった現代でなお最高のボディーガードとして知られている。

そして権力者から信頼されている一方、敵もまた多い。
それは敵対する権力者だけでなく、国際的なテロリストや御神流に嫉妬する他の武家なども御神の人間を敵とし襲い掛かってくることは珍しいことではない。

権力者を守るのが御神の人間ならば、それを守るのは御神の分家である不破の役目であった。
不破の人間も同じく御神流を扱うが、決定的に違うものがある。
御神が守るために刀を振るのなら、不破の人間は敵を殲滅するために刀を振る。
日本が平和になり現在では不破も御神と同じようにボディーガード

をしているが、その心は昔も今も変わっていない。
そのため不破の人間は幼い頃から過酷な訓練をし、技術を磨いてきた。
今、道場で小太刀を激しく打ち合って戦っているのは二人とも不破の人間である。

成人男性の名は不破恭也。不破士郎。不破家の長男で当主になるはずだったが、弟である一臣にそれを譲り、自由に生きる男である。また現在の不破の人間の中で最強の剣士でもある。

少年の名は不破恭也。不破士郎の息子であり、不破の次期当主候補である。父である士郎が自由奔放の性格をしていて、それを反面教師として成長してしまったため、年齢に沿わないほど落ち着いた少年である。

傍目からは殺し合いをしているようにしか見えないほど真剣に戦っているが、二人にとってはいつものことなので気にしない。

「どうした恭也、息が切れてるぞ。まだまだ基礎体力が足りてないな。」

そう言いながら士郎は道場の床を一気に踏み込み、恭也に接近して二刀の小太刀で切りかかった。
対する恭也はひるむことなく、士郎の小太刀に合わせるように自分の小太刀をぶつけてガードする。
しかし大人と子供の体格差を埋めることが出来ず、恭也は左手の小太刀を弾かれ手から離れてしまう。
その隙を見逃さず、士郎は即座に恭也の腹に蹴りを放つ。

「くっ！！」

恭也はその蹴りに合わせて後ろに飛ぶが士郎の蹴りは恭也の予想以上に鋭く、吹き飛ばされた。
さらに追撃するために士郎は再び恭也に向かって走る。

その瞬間恭也の左手がぶれ、三つの黒い影が士郎に向かってきた。
士郎は一瞬目を見開き驚いたが、すぐに冷静になり両手の小太刀で影を全て叩き落とす。
そして士郎が恭也の方に目を向けると、いつの間には恭也の左手には先ほど士郎が弾いた筈の小太刀が握られていて、再度驚いた。

恭也と小太刀の間にはかなりの距離があったにも関わらずなぜ、という疑問は士郎にはなかった。
なぜなら、御神流には小太刀だけでなく飛針や銅糸といった暗器の類も取り扱う流派だからだ。
先ほどのは恭也が飛針を投げ牽制し、その隙に銅糸を落した小太刀に巻き付け自分の手の中に戻したのだ。
士郎はこの技術を知っているし、不破の当主候補であったので当然使えるのだから驚く理由は別にある。

「まだ飛針も銅糸も教えてないはずなんだが、誰に習ったんだ？」

士郎が驚いたのは、まだ教えていない技術を恭也が使ったからだった。
しかも暗器の類は扱いが難しく、実践で使うにはかなりの練習が必要なのだ。
それをかなりのレベルで使った恭也にいつの間に、という思いが大きかった。

それに対する恭也の返答は簡単なものだった。

「静馬さんも一臣さんもまだ早いと教えてくれなかったからな。見て覚えたものをこっそり練習したんだ。」

「おいおい・・・」

その言葉に士郎は冷や汗を流した。
いくら見たことがあるとはいえ、先ほどのは独学のレベルをはるかに超えていたからだ。
静馬とは御神の当主であり、御神流の師範でもある。また一臣は不破の当主であり、
士郎と共に御神流の師範代を務めている人物だ。

共に御神流最高の剣士として名を馳せており、特に静馬は御神の天才とまで呼ばれた程の才をもつ。
だが士郎の記憶通りなら静馬ですら恭也の年齢でここまで強くなかったし、成長もしていなかった。
かつてないほどの才能に士郎はわずかに恐怖し、それと同時にこれだけの才能をもった
息子を持てたことを嬉しく思った。

「恭也、構えろ。」

だからこそ士郎は、まだ幼い恭也に奥義を見せることを決意した。

「今からお前に奥義を打ち込む。防ごうとしなくていいからしっかり目を開いて見ておけ。」

その言葉を聞き、恭也の体に緊張が走る。

他の流派にとってどうか知らないが、御神流にとって奥義は多様してはいけないといわれている。
なぜなら向かってくる者は全て敵であり、それを見逃すことで対策を練られては護衛主を危険に晒す可能性があるからだ。

だからこそ奥義を出すときは決めるとき、まさしく一撃必殺でなければいけない。
とはいえ昔と違い現在では他流派との交流もあることから全く見せないというわけでもない。
ただ一撃必殺の心を忘れるようなことだけは絶対にないといえる。
それを自分に向けて放つというのだから恭也が緊張するのも無理はない。

士郎と恭也の間には十メートルほど開いている。
恭也はほんのわずかな動きも見逃さないといった気持ちで士郎を見た。
そんな恭也を確認した士郎は小太刀をを鞘に戻し、腰を深く沈めた。

御神流奥義之一　虎切

士郎が一歩踏み込んだ瞬間、まるで道場全体が揺れたかのような爆発音が響いた。
初動から一気に恭也までの距離をゼロにした士郎は鞘に入れてあった小太刀を抜刀した。
恭也は小太刀を構えていたはずなのに士郎の刃は恭也の小太刀をすり抜け、そのまま恭也の体を打ち抜き道場の壁まで吹き飛ばした。
士郎は恭也の傍まで近づき、声をかけた。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないが、怪我はしていない。父さんが上手く調整してくれたのか？」

「お前が少しでも防ぐ素振りを見せたらそこまで上手くはいかなかったがな。」

「そうか。」

その言葉に恭也は内心へこむ。

超高速抜刀術の中、自分に怪我をさせないようにする技量を見せられ、自分との差を感じたからだ。

とはいえ恭也と士郎の年齢を考えると当然で本来ならば悩むのも馬鹿らしいが、周囲の強すぎる親戚達と自分を比べ、恭也は本気で自分には才能がないのでは、と不安になっていた。

「初めて奥義を受けてみてどうだった？」

士郎からの問いかけに恭也は考えていたことを隅に追いやり、先ほどの奥義について思い出していた。

「まず、最初の踏み込みに徹を足に使って爆発的な瞬発力を出していた。構えていたはずの小太刀がすり抜けたのは貫、そして最後に吹き飛ばされたのは徹だ。ただ本来は恐らく斬を使うのだろう。このことから奥義とは基本である斬、徹、貫を全て合わせたもののことを言うのではないのか？」

「正解だ。御神流の奥義は全て基本の三つからの派生形になる。そういう意味では恭也には奥義を使う資格がある。だがまだ体の出来ていないお前には負担の大きいから絶対に真似するな。今回見せたのも、お前が誰かの奥義を見て勝手に練習して体を壊してはいけな

いと思ったからだ。」

一を教えれば十を知る。
恭也はまさにそれだった。
先に注意をしておかなければ、本来ならあり得ないが、恭也の技に体が追いつかなく可能性があった。
すでに恭也は斬も徹も、信じられないことだが貫すら扱える。

技量もすでに並みの剣士を上回り、御神流の中でも確実に勝てるのは師範代候補以上の者だけであった。
これほどの才能を潰すわけにはいかない。
だからこそ念を押しておく。

「いつかちゃんと教えてやる。もう一度言うが絶対に一人で練習するなよ。」

「わかった。俺も基本が大事なことは理解しているし大丈夫だ。目先の技に憧れるほど子供じゃない。」

「十分子供だろうが。お前は一体誰に似たんだろうなぁ・・・」

「父さんじゃないことは間違いないな。いや、父さんを反面教師にして育ったんだからある意味父さんに似ているのか?」

親の背を見て育っていることを喜ぶべきか、反面教師にされていることに嘆くべきか悩む士郎だった。

「・・・まあいいか。よし、今日の鍛錬はこれまで!!」

「ありがとうございました!!」

お互い武器を片付け、他にも鍛錬していた者達と道場の掃除を始める。
たとえ師範代でも関係なく、神聖な道場を使った後は平等に掃除をするのが士郎だ。

「そうだ、言い忘れていたが恭也。」

「なんだ?」

「来週から一年間、武者修行の旅に出るからな。準備しとけよ。」

武者修行という言葉に、心が動かされた。
幼くとも剣士である以上、様々な者と戦いたい願望が恭也にもある。
だがしかし、恭也はまだ小学生である。
学校は二日前から夏休みに突入していたが、もちろん一年間も休みなわけがない。
つまり常識的にありえない。
そして父を反面教師として学んできた恭也としてはこの提案を受けるわけにはいけなかった。
たとえ武者修行としても・・・たとえ武者修行だとしてもだ。

「学校はどうする?今はまだ義務教育だぞ。」

「休学届を出してきたから大丈夫だ!!」

大丈夫なわけがない。
今頃恭也のクラスの担任（２６）は泣いているのではないだろうか。

「父さん、ちょっとここで正座しようか・・・」

「きょ、恭也？」

恭也は武者修行という心躍る提案に一瞬でも期待し、そしてそれが叶わないであろうことを理解した瞬間、士郎に八つ当たりをすることを決めた。

そして八つ当たりをしていくうちにどんどんテンションが上がっていき、今までの鬱憤を晴らすかのように関係ないことまで説教し始めた。

曰く、なぜ長崎にいるのにいきなり北海道に行きたいなどと言うのか。

曰く、なぜ金がないのにギャンブルをして、しかも負けるのか。

曰く、なぜ俺には母さんがいないのか。

曰く、なぜ気がついた時にはイギリスやドイツといった外国にいるときがあるのか、しかも密入国で。

間に重い話も含まれているのは気のせいである。

なぜか逆らえないオーラをまとっている恭也に恐怖しながら、士郎は周囲に助けを求めるが誰も眼すら合わせない。

神は死んだ！！そう思った士郎に助けが入る。

「恭也君、士郎さんも反省してるしそれくらいにしてあげたら？」

恭也の後ろから声が聞こえた。

その言葉を聞き、振り返る。

年齢としてはまだ二十歳前後であり、黒髪を腰まで伸ばしてなぜが儚い印象を持たせるが、十分美人と言える女性であった。

「・・・琴絵さん」

「琴絵ちゃん、助けてくれ!!」

女性の名は御神琴絵という。
生まれたときから体が弱く御神流こそ習っていないが、心に一本の芯を持っており、御神流の誰からも認められている女性だ。
そして、恭也が最も逆らうことが出来ない人間だ。

「い、いくら琴絵さんの言葉でも・・・父さんにはもっと言ってやらないと。」

「でもほら見て。士郎さんも十分反省してるみたいよ?」

士郎は声こそ出さないが、残像が残るほど激しく首を縦に振っている。

「で、でも・・・」

「ね、恭也君。」

「は、はい・・・父さん、もういいよ。」

「よっしゃー!!琴絵ちゃん、ありがとう!!」

「そのかわり、父さんが勝手に休学届を出したことは御影さんに伝えとくからな!!」

「げっ!!それは反則だろ!!」

「知るか!!」

御影とは士郎の母で不破の元当主である。
この世で士郎が唯一苦手としている人物でもある。

「恭也君は偉いね。なでなで。」

恭也は恥ずかしいのか顔を赤くしてそっぽを向くが、おとなしく撫でられている。
このように普段は大人びている恭也が琴絵の前では年相応の態度を取っているのには理由がある。
母の愛情を知らずに育った恭也にとって琴絵は母であり姉であり、そして初恋の人でもある。
そして、実は恭也はいつか自分が立派な御神の剣士になったら琴絵に告白しようと決めていたりもする。

「ああ、そういえば琴絵ちゃんおめでとう。」

士郎が思い出したかのように声をかける。
それに対して琴絵もありがとうございます、と返した。
何のことかわからない恭也は士郎の方を見る。

「恭也は知らなかったか、実は琴絵ちゃんと一臣が婚約することになったんだ。」

「えっ!?婚・・・約?」

恭也が動揺しているのにも気付かず士郎は我が身のことのように嬉しそうに語る。

「一臣は昔から琴絵ちゃんのことが好きだったからな。御神と不破

は昔からの風習で政略結婚が多かったが、ちゃんと妹だけでなく弟も恋愛結婚ができてよかった。昔から琴絵ちゃんは妹みたいなものだったけど、これで名実ともに妹なわけだ。これからよろしくな。」

「ええ、よろしくお願いします。といっても元々親戚同士ですし関係が変わるものでもないですね。」

その後も士郎と琴絵は会話していたが、恭也の頭の中には入ってこなかった。

いつの間にか道場から自分の部屋に戻っていたことに気がついた恭也は、ようやく一人になったことで冷静になった。といっても自分が失恋したということを再確認しただけだが。

「大好きな人が幸せになる、これほど嬉しいことはないではないか。」

そう呟いてみるが、それで心が満たされることはなかった。

それでも祝福はしよう。あんなに幸せそうな琴絵は今まで見たことがなかったのだから。

そう思い、恭也は布団に入り目を閉じる。

そうすると今までの琴絵との思い出ばかり頭に浮かぶ。

そして恭也の目から涙が零れ始めた。

翌日、朝の鍛錬に恭也は来なかった。

これは恭也が鍛錬を始めてから初めてのことだった。
士郎は恭也が琴絵に抱いている感情は母に対するようなものだと思っていた。
だからこそどうせすぐに知ることになるだろうと軽い気持ちで婚約話をしたのだったのだが・・・

「まさかここまでだったとは・・・」

朝ごはんの時間なっても姿を現わさなかったため、恭也の部屋まで呼びにきた。
ノックをして呼んでみるも返事ひとつ返ってこない。
それどころか部屋の中から人の気配がしないことから、焦った士郎は勝手に入ることにした。
鍵がかかっていたが、士郎の特技の中にはピッキングがあるので問題にならなかった。
部屋に入ると布団はきちんと畳まれており、やはり恭也はいなかった。

「一体どこに行ったんだ?」

何か手掛かりになるものはないか士郎は探し始めた。
恭也の部屋には無駄なものがほとんどなく、それはすぐ見つかった。

「手紙・・・何々・・・・」

『自分には技術よりもなによりも心が未熟だとわかりました。しばらく武者修行の旅に出ます。探さないでください。』

「武者修行の旅って昨日あれだけ怒られた俺の立場は!!ていうか結局これって失恋したから家出しただけだろ!!」

『PS．御影さんへ
父さんが俺を勝手に一年間休学させて武者修行の旅に出そうとしていたので叱っといてください。』

「お前結構余裕あるだろ！！」

こうして恭也は御神の家から消えた。

おまけ

「とりあえずこの手紙は燃やそう。」

「なんて書いてあるんだい？」

「ああ、御影ババアに俺が恭也を勝手に休学させたこと叱っとけ・・・って御影ババア！！」

「ほう・・・それで覚悟は出来てるんだろうね！！」

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

「ちゃんと恭也を見つけて来るまで帰ってこなくていいからね！！」

そういって御影はぼろ雑巾のようになった士郎を引き摺り、家の外に捨てた。

恭也の・・・（後書き）

書いてみて初めて分かる難しさですね。他の作家さんたちを尊敬します。

この設定はやはり無茶が多いため批判を受けやすいのではないかと思っている作者です。ですので批判とかはきちんと受け止めようと思っています。ですがやっぱりできればいい感想とかもらえると嬉しいです。ちなみに御神流は独自設定が特に多いです。

それでは未熟な文をここまで読んでいただきありがとうございます。

川神へ行く（前書き）

すでにお気に入り登録してくれている方がいるようで作者は嬉しいです。おおまかな話の流れはあるものの見切り発車の部分も多く色々見苦しい部分もあると思いますがこれからも見捨てずに見てくれると嬉しいです。

川神へ行く

恭也にとって旅とは初めてのことではなかった。

物心がついたときには士郎に連れられて旅に出ていたし、不破の家に戻った後も何度か旅に出ていた。

士郎はいつも気まぐれで目的地を決めずに進み、しかもお金もないので野宿になることも多かったため恭也の旅のスキルはどんどん上がっていった。

今回のように恭也一人で旅に出るのは初めてだが、士郎に振り回されない分いつもよりもむしろ楽なんじゃないかとすら思っていた。

実際、恭也は家を出てすぐに目的地やそこに行くまでの経路をきちんと調べたため、四日で目的地まで到着した。

これがもし士郎と一緒の旅であったら寄り道ばかりで一向に目的地まで着かなかっただろう。

ちなみに恭也は親戚が多いことから毎年かなりの額のお年玉をもらっており、また修行ばかりで特にお金のかかる趣味もなく使わないので一般的な子供に比べてかなりお金を持っている。

修行の旅ということで、移動の手段も徒歩なのでお金に余裕があり餓える心配も今のところない。

目的地の名前は川神市。

関東の南にある政令指定都市で人口第９位。

市の北端には多馬川が流れ東京都との境となっており、東部には東京湾が広がっている。

江戸時代から栄えていた歴史のある街で武家も多く、馬も多かったことから川に多馬の名がついた。

古くからの閑静な住宅地が多いがここ数十年で川神の駅周辺は東京との近さから一気に近代化が進み、若者の街と呼ばれるようになった。

もちろん恭也がこの街を訪れたのは観光のためではない。

武術の総本山として有名であり、世界最強の武人である川神鉄心が総代を務める川神院を訪れることがこの旅における恭也の目的だった。

本当は剣聖とまで言われた黛十一段も訪ねたかったが流石に石川県は遠く今回は諦めた。

「しかし着いたはいいが、ずいぶん遅くなってしまったな。」

すでに日は暮れ、周りの家の電気も消えてしまっている。

こんな時間に訪れても相手に迷惑だろうと考える。

仕方ないと思い、恭也はいつものように野宿出来る場所を探して歩き始めた。

ちなみにこの野宿出来る場所というのは公園などではなく、警察に見つかって家に連絡されると困るため出来るだけ人目につかない場所のことをいう。

朝日が差し込み恭也が目を覚ます。

昨夜恭也が野宿する場所として選んだのは、河川敷の近くにある原

っぱだった。
奥の方は土管があり、外からは見えないようになっていたことが決め手となった。
夏ということもあり虫が寄ってこないように害虫対策もしっかりしていたので草むらの中でも虫に刺されることはなかった。
野宿の用意を片付け、朝の鍛錬を終えた恭也は当初の目的通り川神院に向かおうとするが、誰かが近づいてくる気配がしたため警戒する。

「おいお前は誰だ!!ここは俺たちの秘密基地だぞぉ!!」

近づいてきたのは頭にバンダナを着けた少年だった。
恭也は警察ではなく、自分と同じくらいの年齢だったため警戒を解いた。

「すまない。ここが誰かの場所だなんて知らなかったんだ。」

「うそつけ!!この辺のやつでここが俺達の場所であることを知らない奴なんていないんだぞ!!さては最近またこの場所を狙い始めたトニーか桜田一家、もしくは田中鈴木佐藤連合のスパイだな!!」

「トニーも桜田一家もなんとか連合も知らない。もちろん他のところのスパイなんかでもないし本当に知らなかったんだ。」

「・・・確かにこの辺りで見たことないけど・・・でも俺は騙されないぜ!!スパイじゃないなら証拠を見せてみろよ!!」

「証拠といわれても・・・こんなものしかないが・・・」

そう言いながら恭也は先ほど片付けた寝袋などを再び取り出し少年に見せる。

「おぉ!?これってもしかして冒険の道具か!?」

恭也が取り出した道具を見た少年は目をきらきらさせながら恭也に迫る。

「冒険・・・まあ間違っていないがどちらかと言えば旅の道具だな。」

「旅か!!くぅ～男のロマンだぜ!!」

「これで信じてもらえたか?」

「ああ、もちろん!!疑って悪かったな!!」

「いやこちらも知らなかったとはいえ勝手に場所借りてしまったんだ。謝るのはむしろ俺の方だ。」

「知らなかったんだから仕方ないさ!!それよりお前いいやつだな!!俺の名前は風間翔一!!風のように自由に生きる男だ!!」

そう言って少年・・・風間翔一は笑顔で手を差し出した。

「不破恭也だ。」

恭也もその手の意味を勘違いすることもなく、軽く笑みを浮かべながらしっかり握り返した。

お互い自己紹介を済ませた後、年齢も近いこともあり二人は話し始

めた。

「それにしても恭也って俺と同じくらいなのに一人旅ってすげぇな!!なあなあ、何で旅してんだ!?」

「今年で11歳になる。旅の理由か・・・己の心を鍛えなおすためだな。」

(失恋して家に居づらかったというのが本音だが、流石にそれを言うのは情けない)

「かっけぇー!!ちなみにこの街に来た理由は!?」

「この街には川神院という武術の総本山があるだろう。それに他にも武家が多いと聞くし修行するにはちょうどいいと思ったからだ。」

「あぁ～、モモ先輩の家か。んっ?てことはなにか武術をやってるのか?」

「実家で剣術を少しやっている。モモ先輩というともしかして知り合いに川神院の関係者がいるのか?」

「ああ!!モモ先輩は川神百代って言って次期川神院の後継者らしいぜ。ちなみにメチャメチャ強くて怖い!!あ、間違っても俺がそんなこと言ったなんて本人の目の前で言うなよ!!殺されちまう!!」

その言葉を聞いて恭也はにやりと笑う。

「ああ、任せておけ。」

「だあ～!!お前言うつもりだろ!!マジで勘弁してくれ!!」

「冗談だ。」

「絶対冗談じゃなかった・・・こうなったらなに言われるか心配だし俺も恭也に着いていくからな!!それに初めて川神に来たんなら案内もいるんじゃねえの?」

「それは助かるが・・・いいのか?」

「いいっていいって。俺達もう友達だろ!!」

「友・・・達・・・!!」

「ん?なんだその反応?」

「いや・・・今まで剣の修行ばかりで友達と呼べるやつが一人もいなかったから・・・少し驚いた・・・」

「一人もって嘘だろ!!学校は!?」

「朝早くから修行をしてるから学校ではほとんど寝ている。終われば また修行だから周りが遊びに行くのはよく見るが俺はすぐに家に帰る。」

「そりゃ友達も出来ないな・・・まあでもそんなの関係ねぇや!!それじゃあ俺が恭也の友達第一号だな!!」

「・・・・・・・・・・」

「どうした？」

「友達なんて初めてだから・・・どういう反応すればいいかわからん・・・」

「そんなもん決まってらぁ！！笑えばいいんだよ！！」

「・・・これでいいか？」

恭也は滅多に見せない年相応の笑顔で風間に応えた。

「おう！！それじゃあさっそく川神院に行くか！！」

「ああ、頼む。」

「よ～し！！俺についてこい！！」

そう言うと風間はものすごい速さで走り出した。

川神院

関東三山の一つ厄除けの寺院として名高く市の名前になるほど。

『己を高め気力で厄をも祓う』という考え方で武道の鍛錬場所としても有名である。

「着いたぜ！！ここが川神院だ！！」

「ここが・・・確かに中から強い気をいくつか感じるな。」

しかし言葉とは裏腹に、恭也は内心がっかりしていた。
中から感じる気は御神流の門下と比べ小さく、昔士郎と共に回った一般的な武家とそう変わらないものだったからだ。

「そんなんわかるのか？そういやモモ先輩も気配とか探れるって言ってたな。」

「しかしいきなり部外者の俺が入っていいものなのだろうか？」

「いいんじゃね。モモ先輩も挑戦者は大歓迎って言ってたし。てことで・・・たのもー！！」

風間が大声を出すと、門の中から四十代ぐらいの男が出てきた。
気配を抑えているためどれほどの強さか恭也にはわからなかったが、鍛練を重ねていることは一目でわかった。

「おや、風間君じゃないか。百代様なら遊んで来ると言って出て行ってしまったよ。」

「ああ、いいのいいの。今日はモモ先輩じゃなくてこっちがメインだから。」

「ふむ・・・君は？」

「初めまして、不破恭也と申します。己の心が未熟であることを感じ、武術界において最強とまで謳われた川神鉄心殿のお話を聞いてみたい思い訪れました。」

「これはご丁寧に・・・私は八神孝です。不破というとあの不破かな？」

「おそらく、その不破です。」

「ということは不破士郎という者をご存じかな？」

「父ですが・・・もしや父はまた何かやらかしたのでしょうか！！」

「いやいや、昔彼も訪れたことがあったから知っているだけだよ。」

「しかし川神院にはかなりの武術家が訪れるとのこと。その中で父のことを覚えているなど何かしたとしか思えません。」

「息子さんは彼のことを全く信用していないんだね・・・彼は当時川神院に赤ん坊を背負って道場破りに来てね、自分が勝てばご飯と宿をくれと言ってきたから印象に残ったんだ。そういえば丁度十年くらい前だし君がその時の赤ん坊みたいだね。」

「その節は父が迷惑をかけて申し訳ありません。」

「迷惑だなんて。彼は非常に楽しい性格をしているしすぐに院の者達とも仲良くなったんだ。」

「ということは父が勝ったのですか？」

「当時の師範代の一人と戦って最後は引き分けだったんだ。世界中から様々な者が川神院には訪れるが、彼より強い挑戦者は未だに訪れていないなぁ。まあ、お互い強さを認め合ったみたいで意気投合

してしばらく川神院に滞在していたんだよ。」

性格は全く信用していないが士郎の高い実力をよく知っている恭也は、父と互角に戦ったという話を聞き川神院の評価が高くなった。

「なんだぁ、恭也は川神院に来たことあったのか？」

「話を聞く限り赤ん坊の時に来たことがあったらしい。」

「そういえば風間君、百代様は君達と遊ぶ予定だったみたいだけどいいのかな？」

「あ～！！そういや今日はみんなでサッカーするんだった！！モモ先輩もいないみたいだし悪いけど俺はもう行くわ！！」

「ああ、ここまで案内してくれてありがとう。」

「いいってことよ！！あっ、しばらくは川神にいるつもりなんだろ！！なら用事が済んだらさっきの原っぱに来いよ！！俺の仲間達を紹介するから！！」

「ああ、必ず行かせてもらう。」

「んじゃまた後でな～！！うぉぉぉぉ、強風暴風台風突風旋風烈風疾風怒涛！！！！！風をとらえられるものなどこの世に存在しない！！！」

風間はそう叫ぶと走りだし、一瞬で見えなくなった。

そんな風間を八神は穏やかな顔で見送る。

「相変わらず元気な子だ。あんな子達と一緒にいる間は百代様も大丈夫だろうな・・・」

「ところで、突然の訪問となってしまったのですが・・・川神鉄心殿にはお会い出来るのでしょうか？」

「恐らく大丈夫だと思うよ。総代も学校が夏休みの間はほとんど川神院にいるようだし。さ、おいで。」

「それでは失礼します。」

恭也は八神に連れられて川神院の中へと入って行った。

八神に案内された部屋でしばらく待つように言われた恭也は周囲の気配を探るため集中した。

門の中に入った瞬間、外で感じた以上に気配が強くなったからだ。

恭也は最初驚いたが気は使い方次第で様々なことができることを知っていたため、門を境に結界が張られていたのだろうと推測した。

その気の強さは御神流と比較しても遜色なく、中には自分の見てきた武士の中でも最強であった士郎や静馬クラスの者もいた。

ちなみに気の使い方は流派によって異なるが、身体能力の向上や武

器に気を通して強化などが多く、恭也もこのような使い方をしている。
恭也はまだ使えないが御神流では脳のリミッターを自力で外すことができ、その際に負担を極限まで下げることなどに使っている。

「！！」

そうして気配探知に集中していた恭也のすぐ後ろで突如、人間とは思えないほど膨大な気を感じた。
恭也は咄嗟に身を翻すと同時に頭の中で逃走を考える。
普段の恭也であれば敵でないことくらい分かり逃走など考えないが、集中して気配探知していたにも関わらず背後をとられ、更に初めて感じる圧倒的強者の気配に冷静さが欠けてしまっていた。
背中に汗を掻きながら、どんな人物か確認する。

「ふぉふぉふぉ、若いのにいい反応じゃ。」

そこにいたのはすでに気を抑えた老人だった。
しかし見た目で侮ることなど今の恭也にはとても出来るものではなかった。
先ほど一瞬出した気配はとても同じ人間とは思えないほどのもので、しかも今はそれを感じさせない。
それはあれほど莫大な気を精密にコントロールしている証拠なのだからだ。
これほどのことが出来る人物は恐らく世界中探しても二人といないだろうとのことから、恭也はこの人物が誰か予想できた。

「あなたが川神鉄心殿ですか？」

「うむ、いかにも。そういうお主は不破のところの倅で間違いないかの？」

「はい、不破恭也と申します。この度は突然の訪問にも関わらず会って頂きありがとうございます。」

「うむ、礼儀正しくて実によろしい。・・・百代に見習わせたいのぉ。ところで八神から話は聞いておるが、ワシの話を聞きたいとな？」

「はい。・・・実は先日、自分の心が未熟であることを再確認する出来事がありました。そして武神と謳われたあなたならこの迷いを断ち切ることが出来るのではないかと思い、今回は訪ねさせて頂きました。」

「お主の年齢を考えれば未熟であることなど当り前じゃが・・・話してみなさい。若者の悩みを聞くのも年寄りの義務じゃからな。」

恭也は川神院に訪れる経緯を全て話した。

「なるほどのぉ・・・話はわかった。」

（随分と大人びた子どもかと思ったが・・・年相応の面もあるのぉ）

「まず最初に言っておこう。それはお主の心は未熟であるというわけではない。」

「しかし、涙を流すなど・・・」

「喝！！！」

「！！」

鉄心が叫んだ瞬間、日本で震度３の地震が起きた。

のちにこの話を聞いた気象予報士は「またＫＡＷＡＫＡＭＩか。」と呟いたそうだ。

「話を聞きなさい。男には涙を流していいときが３つある。家族や仲間が死んだとき、夢を叶えたとき、そして・・・・惚れた女に振られたときじゃ！！！！！」

「・・・・・・・・・」

「悔しかったじゃろう・・・悲しかったじゃろう・・・じゃが人間とはそうやって悲しみや悔しさをバネに成長していくんじゃ。そして今、お主の心はまさに成長しておる。わしとて生まれたときから武神であったわけじゃない。人生の中で何度も泣いた・・・そしてその度に友に助けられて今のわしがあるのじゃ。お主にとって今一番必要なのは心の修行ではなく、お主の心を理解してくれる友であろうな。」

「友・・・・・」

友と聞いて恭也が思い出すのは先ほど出会った少年、風間であった。

「うむ。お主にも友と呼べる者がいるようじゃな。ならばわしのような老いぼれに話を聞くよりその者に相談してみるがよい。きっと力になってくれるに違いない。」

そういうと鉄心は立ち上がり、出口に向かって行った。

「行きなさい！！そして強くなるがいい！！」

太陽に照らされた鉄心は、恭也の目から見ても眩しかった。

おまけ

士郎は恭也を探すついでに、イギリス上院議員のであり親友でもあるアルバートのボディーガードのためホテル・グランシール東京に訪れていた。

「なんだこのシュークリームは！！！美味い、美味すぎる！！店員、今すぐこのシュークリームを作った人を呼んでくれ！！」

そういうと、厨房の中から一人の女性が現れた。

「私がチーフパティシエの高町桃子です。」

「結婚してください！！」

「よさんかみっともない！！」

士郎はアルバートに頭を叩かれ連れて行かれた。

川神へ行く（後書き）

今回初めてまじこいキャラが登場しました。上手くキャラの特徴を掴めているといいのですが・・・難しいですね。
あと今回出てきた八神はオリジナルの脇キャラです。そんなに重要なキャラではないですが恭也に対する説明ポジションってことで何回かでます。ちなみに鉄心さんは若い頃から女関係でよく泣かされています。なのでこの話題に関してはかなり優しかったりします。
それではここまで読んでいただきありがとうございます。

風間ファミリー集結！！（前書き）

今回は風間ファミリーが出てきます。原作では大和君はこの頃はまだニヒルな感じですが作者の力量では日常会話でそれは無理だったので普通に話します。まあいつでもニヒルだったわけではなかったみたいなので本編では見えないところできっとニヒルになってくれるでしょう。

風間ファミリー集結!!

恭也は来たときと同じように八神に案内されて川神院の入口まで戻ってきた。

「本日はありがとうございました。」

「どういたしまして。総代も君みたいな将来有望な子を知ることが出来てよかったと喜んでいたよ。」

「自分などまだまだです。ですがお世辞でもそう言ってもらえると嬉しいです。」

お世辞ではないんだが・・・そう呟いたのが恭也の耳には届かなかった。

「これからどうするんだい?」

「とりあえず約束もあるので風間のところに行こうと思います。」

「そうか・・・恐らくそこには百代様もいるから仲良くしてほしい。まあ恭也君なら心配なさそうだけどね。」

「百代というと鉄心殿のお孫ですね。」

「そうだよ。あ、もしかしたら百代様に戦い挑まれるかもしれないが嫌だった無視して構わないから。」

「はあ・・・」

「最近力を持て余しているのかよく勝手に喧嘩とかするんだよ。しかも規格外に強いから総代や師範代クラスがいないと中々止まらないし困ったもんだ。」

「そんな人物と風間は遊んでいても大丈夫なんですか？」

「どうやら彼らと遊んでいる間は平気みたいでね。全く百代様ときたら・・・」

どうやら八神も百代に苦労しているようでどんどん愚痴のようなものが出てくる。

さすがにこのままでは不味いと思った恭也は咄嗟に別れの挨拶を済ます。

「ではこれで失礼します。」

「ああ、恭也君ならいつでも大歓迎だからまた来てくれ。なんなら君の父君がしたように道場破りとして来てもらっても構わないから。」

「御冗談を・・・・」

最後にもう一度深くお辞儀をし、恭也は風間が居るであろう原っぱに向かって歩きだした。

川神院では恭也がいなくなってから四人の人物が話し合っていた。

「行ったみたいじゃな。しかし驚いたわい。」

「はい、まさか百代様と同じ年齢であれほどの者がいるとは思いませんでした。」

「ワタシも驚いたネ。それでも気の総量や才能は百代の方が上とみたヨ。」

「そうかも知れねぇが、現時点では不破の小僧の方が単純な実力は上だな。ありゃ鍛錬の量が違うわ。」

上から総代の川神鉄心。準師範代の八神孝、師範代のルー・イー、釈迦堂刑部。
いずれも世界トップクラスの武士達である。

「確かに・・・不破は幼い時から過酷な鍛錬を課すというが、あれは努力だけでは辿り着けぬ領域に片足を踏み込んでおる。」

「だけど百代様と違い、かなり成熟された精神でした。あれなら心が闇に落ちることもないでしょう。」

「そうだとイイネ。それにしても彼の存在はモモヨに良くも悪くも多大な影響を与えそうだヨ。」

「あ～確かに。今まで同年代で自分より強いやつ見たことないもんなぁ、百代のやつ。」

「これで少しは百代も真面目になるか大人しくなればいいんじゃが・

・・」

鉄心、ルー、八神は同時に溜息を吐いた。
唯一溜息を吐かなかった釈迦堂は、真面目であったり大人しい百代を想像してそれはない、と一人で笑っていた。

恭也は川神院を出ると風間との約束を守るために原っぱに向かっていた。
このとき恭也は内心かなり緊張していた。
なぜなら今まで友達と呼べる存在がいなかったため、どう対応を取ったらいいのかわからないからだ。
また鉄心の言葉で今まで以上に友というものを意識してしまっているため、自分なんかの友達になってくれるか不安でもあるからだ。
ちなみに風間と初対面で話せたのは父である士郎に似ている雰囲気があり、会話の主導権を握っていてくれたからだ。
そうしていろいろ考えている間に、目的の原っぱまで到着していた。

「さて、ここで風間は遊んでいると言っていたが・・・」

そう呟きながら辺りを見渡すと、少し離れた所に6人ほどの男女グループを見つけた。
どうやら言っていた通りサッカーをしているようだ。
恭也が近づいていくと風間が気付いたようでこちらに走ってきた。
他の者も気付いたようだがこちらには来ず様子を見ている。

「よう、意外と早かったな。それで結果はどうだった!?」

「ああ、目的を達成することは出来なかったがいいところだった。
それにヒントは貰うことはできた。」

「そっか!!ならよかったな!!」

そういって風間は自分のことのように喜んだ。

「ああ、これも風間のおかげだ。」

「???・・・まあよくわからんがいいか!!それよりこっち来いよ!!俺の仲間を紹介するぜ!!」

風間は恭也の手を掴み、先ほどまで遊んでいたグループのところまで走った。

「さあ、まずは自己紹介だ!!とりあえず恭也、お前からな!!」

「不破恭也だ。」

恭也は名前だけ言って周りの反応を待った。
すると風間が呆れた様な顔をした。

「おいおい・・・それだけじゃ駄目だって!!もっとこう趣味とかなんで川神に来たかとか色々あるだろ。」

「む、すまない。今まで自己紹介をする機会もなかったから気付かなかった。」

「おう、これから慣れて行けよ!!」

「ああ、善処しよう。改めてもう一度いいだろうか？」

恭也が周りを見渡すと全員が頷いた。

「名前は不破恭也、年齢は１１歳だが風間のようにに敬語はなしで頼む。趣味は鍛錬と盆栽。川神には己の未熟を感じ、武者修行として武術の総本山である川神院で川神鉄心殿に話を聞くために来た。」

これでいいのだろうかと恭也が再び風間の反応を見ると満足したような顔をしていた。

恭也はほっとしてさらに周りの反応を見る。

「武士だね。」

「どっちかって言うと侍じゃね？」

「お姉さまと同じ年ね・・・強いのかしら？」

「くくく・・・ワン子はまだ修行を始めたばかりだからわからんだろうが、すごく強いぞ。」

「みんな気にするとこ違うから！！１１歳で武者修行っていつの時代だよ！！」

頭の良さそうな少年から順に、年齢の割に体格のいい少年、ポニーテールが特徴の犬を連想させる少女、セミロングの髪でかなりの実力を持つであろう少女、そして唯一恭也の自己紹介に自分の地味さをなんとか誤魔化そうと必死につっこんできた少年。

「僕だけ描写おかしくない！？」

「誰に言ってんだモロ。それじゃあ今度はこっちの自己紹介だな。まずは俺、風間ファミリーのリーダーやってる風間翔一だ！！」

「それは知ってるぞ。」

「いーんだよ。こういうのは形式が大事なんだから。ちなみに恭也も今日から風間ファミリーだから俺のことはキャップと呼ぶように！！そんじゃ、ほい次は大和な！！」

キャップが言うと体格は普通だがどこか油断できない雰囲気を持った少年が前に出た。

「直江大和だ。この風間ファミリーじゃ軍師の役割だな。いきなりキャップが新しい仲間を連れてくるっていうからどんな奴か気になってたけど、ずいぶん古風な感じでびっくりしたよ。まあよろしく。」

「ああ。」

普段の大和なら新参者は警戒するが、キャップが入れると決めたため素直であった。

「次は俺様だな。名前は島津ガクト！！見よ、この鍛え上げた筋肉を！！」

そういってタンクトップを脱ぎだした。

「ぎゃー！！変態がいるわ！！」

「なに初対面の人の前で服を脱いでるのさ!!馬鹿なの!?死ぬの!?」

「ガクトは馬鹿だろ。頭まで筋肉だし。」

「ファミリーの筋肉担当だしな!!」

「だからモテないんだよな。」

「今日も幼馴染達は優しくないぜ・・・」

がっくりと膝をついて半泣きになるガクト。

「ふむ・・・かなり鍛え上げているな。」

「って君もなに冷静に評価しているのさ!!」

「おお~わかるか心の友よ!!」

「あ~あ、馬鹿が復活したぞ。」

「しかも心の友に認定されてるし。」

「まあ、ガクトの紹介はこれぐらいでいいだろ。次、ワン子!!」

「は~い。アタシはねぇ、川神一子!!みんなからはワン子って呼ばれているからそう呼んでね。趣味は鍛錬!!好きな言葉はユーオウマイシン!!えへへ、よろしくね。」

「川神?川神院には一人娘が居ると聞いていたが・・・」

「ワン子は川神院の養子なんだ。」

大和はこの街の人間でない恭也が知らないであろうと思い説明した。

「なるほど、すまない。」

「この街の人ならみんな知ってることだし気にしないで。それに川神院の人たちは本当にいい人ばかりで今すごく幸せだしね。」

「ちなみにワン子はペット担当な。それ、取ってこい！！」

そういって大和は手に持っていたゴムボールを投げた。

「！！！」

ワン子はすぐに駆け出しゴムボールをキャッチして戻ってきた。

「ちゃんと取ってきたわよ！！えらい？えらい？」

「え～と、ペットがきちんと言うことを聞いた時は褒めるべし。よし、えらいぞワン子。」

大和は片手に「正しいペットの躾け方」と書かれた本を持ちながらワン子の頭をなでた。

「えへへ～・・・」

「とまあこんな感じだ。」

「本人が納得しているならいいが・・・ペット担当はいいのか？」

「まあそれが普通の人の反応だよね。」

「こいつはモロな。次、モモ先・・・」

「ちょっと！！僕の扱い軽過ぎだから！！」

「じょーだんだよ。んじゃモロ！！」

「師岡卓也。趣味は漫画とゲームとパソコン。つっこみ担当であだ名はむっつりモロ。」

「モモ先輩もなに勝手に僕の声真似しながら紹介してるのさ！！それに僕むっつりじゃないし！！僕むっつりじゃないし！！」

「二回も言うなんて必死だなぁ～モロロよ。」

「なるほど、だいたい把握した。」

「お、心の友もモロの性格がむっつりだと理解したみたいだぜ。」

「絶対誤解してるよ！！」

「いや・・・最後まで諦めずにつっこみ続けることは尊敬に値するな。」

「ありがと！！だけどそれ言われても嬉しくないからね！！・・・いややっぱちょっとうれしいかも。」

「どっちだよぉ～。そんじゃ今度こそモモ先輩な。」

後ろでモロがまだ誤解解けてないとかなんとか叫んでいるがみんな無視した。

「川神百代だ。好きな言葉は誠！！言葉での自己紹介はこれくらいでいいだろう。」

そういうと百代は恭也の方へ近づいてくる。
先ほどからずいぶんと殺気立っていることと、八神から話を聞いた後であったため、恭也は自然と構えてしまう。

そしてその行動は正解だった。
百代は恭也まであと数歩というところまで近づくと、一気に踏み込み拳を突き出してきた。
その拳を恭也は掌で止める。
しかし百代は止められたことも気にせず反対の手で手刀を繰り出す。
明らかに気の籠められた一撃に恭也は受け止めずに一歩後ろに下がり回避する。

その後も百代は拳や蹴りを連続で繰り出す。
その一撃一撃が並みの武道家のそれを軽く上回る威力を持つものばかりであったが、恭也は全て回避するか避け切れないもの気を籠めてガードした。
そして気を籠めた状態でも痺れるほど百代の一撃は重いものであることから気の総量では負けていると判断し、恭也は出来る限る受け流すようにし始めた。

しかしそうすると今度は百代から今まで以上に気が溢れ、力を溜め始めた。

今度の一撃は受け流せないと感じ、恭也は迎え撃つことにした。
百代の拳が恭也に向かってくるのに合わせ、恭也も拳にぶつけた。
本来なら恭也の方が気の総量が少なく吹き飛ばされるが、徹を籠め百代の腕の内部に衝撃を逃がすことで耐えきった。
周りのメンバーは唖然としている。

「ははは、やっぱり止められたか。」

「一体どういうつもりですか？」

「同い年だろ、敬語なんていらないぞ。どういうつもりか・・・か。お前も武士ならわかるだろ。言葉よりも拳で語り合った方がよく相手のことが分かる。」

「そうかもしれないが・・・」

「それにお前みたいな強いやつが入ってくるんだ。もしファミリーに危害を加える奴だったら困るだろう。私はファミリーのみんなを守る役目があるしな。とは言ってもお前は問題なさそうだ。」

「それは・・・認められたということでいいのか？」

「ああ、もちろんだ！！私はお前を歓迎するぞ！！」

そう言って手を差し出し恭也がその手を掴む。
その瞬間お互いの体が一瞬動いた！！が、すぐに何事もなかったかのように二人は手を離した。

「やっぱりやるな～。せめて一回くらい地面に手を着けさせてやろうと思ったのに。」

「殺気が漏れまくりだ。もっと気を落ち着けないと不意打ちなんて出来ないぞ。」

「むうぅ。気の細かいコントロールは苦手なんだ。」

周りは二人の会話がわかっていないようだった。

「今なにしたか分かるかワン子？」

「わかんないわ。なにしたのお姉さま？」

「ああ、握手のフリして投げ飛ばそうとしたんだが上手く重心を動かされて失敗した。」

「うわ～、お姉さまの投げを止めるなんてすご～い。」

ワン子は目をきらきらさせて恭也を見た。

「少し重心をずらせば投げ技は無効にできる。鍛錬すればすぐ出来るようになるさ。」

「ほんとう！！アタシも出来る様になる！？」

「ああ。」

「私の投げ技は気を使ってるから本当はそんな簡単なものじゃないんだがなぁ・・・」

百代は小さく呟いた。

「それよりも姉さんの攻撃を完全に捌いてたことにびっくりだ。」

「というか俺様でもほとんど見えなかったぜ・・・」

「これはまたキャップもすごい人見つけて来たねぇ。」

「ほんと凄いわ!!アタシもいつかあんな風になれるのかしら?」

「よ〜し、それじゃあ全員の自己紹介も終わったことだしサッカーの続きしようぜ!!」

「お〜!!」

キャップの言葉に全員が声を揃える。

「あっ、ちょっと待って!!七人で奇数だしサッカーだと人数が合わないよ?」

「むっ!!確かにモロの言うとおりだ!!じゃあ今日はせっかく新しく仲間になったんだし恭也の質問タイムとするか!!」

「お、いいな。それじゃあ俺様からだ!!今まで振られた経験は!?」

「ガクト〜、自分が毎日振られてるからってそれはないと思うわよ。」

「そもそも告白とかのイメージがないんだが。」

「というかあってもガクトと違って恭也はかなり顔が整ってるし振られないだろ～。」

「モモ先輩ひどいっす！！」

「ちぇ～、いきなりそんな質問かよ～。もっと楽しい質問にしようぜ。」

キャップは自分が興味がない話題でみんなが楽しんでいるからすねている。
そして恭也はというと・・・

「・・・・・・・・・・・・」

落ち込んでいた。

「ちょっ、どうしたの！？もしかして本当に振られた経験あるの！？」

「ほぉ～、意外だなぁ。女に興味とかなさそうなのに。モロみたいに実はむっつりなのか？」

「僕はむっつりじゃないから！！」」

「やはりお前は心の友のようだ！！さあ、俺様に話してごらん。この胸で受け止めてあげようじゃないか。」

「ガクトきもいわ。」

「ぐはぁ！！いいんだ・・・俺様にはここに心の友がいるからな。」

「でもあんまり掘り返すのもかわいそうじゃない？」

落ち込んでいた恭也だが、これは逆にチャンスだと思い直した。
鉄心も言っていたとおり、せっかく出来た仲間に相談してみようと思ったからだ。

「ワン子ありがとう。でも俺なら大丈夫だ。鉄心殿にも友達に相談してみろと言われたばかりだし・・・みんな聞いてくれないか。」

「もちろんだ！！仲間の悩みならなんでも来い！！」

「この件はキャップじゃどうにもならなそうだけどね。」

「といってもモロロ、ここにいる男ども全員当てになりそうにないぞ。」

「モモ先輩・・・言ってくれるじゃねえか・・・」

そうして円になって恭也はこれまでの経緯を全て話した。
ちなみに話の途中で大爆笑だったガクトは百代から制裁を食らった。

「まああれだ。新しい恋に生きるか、剣に生きるかのどちらかしかないな。」

「琴絵さんも幸せならいいじゃない。」

「俺は恋とかよくわかんねぇ・・・けど男なら過去に拘ってちゃ駄目だぜ！！常に見据えるのは未来だ！！」

「失恋したけど恭也は前を向いてるのは間違いない。だってちゃんと笑顔でおめでとうって言えたならもう大丈夫だ。」

「百代、ワン子、キャップ、大和・・・すまない、だいぶ心が軽くなった。川神に来てよかった。」

「もう恭也はファミリーの仲間なんだからどんどん相談しろよ!!それじゃあどんどんいくか!!でももう恋愛話とか勘弁してくれよぉ。」

キャップの言葉にどんどん恭也に対する質問が飛ぶ。
それに対応する恭也は楽しそうであった。

おまけ

アルバートの護衛をしていた士郎はテロリストの襲撃にあったが、これを全て撃退。
しかしホテルに仕掛けられた爆弾からその場にいた高町桃子を庇い入院することになった。
至近距離から爆弾を受けたため、気でガードする間もなく吹き飛ばされた士郎は全治一カ月となる。

「ごめんなさい、私のせいで・・・」

「気にしないでください。これが私の仕事なので。」

桃子は自分の責任だと思い、毎日のように士郎が入院する病院に通った。
士郎からすれば自分の鍛錬が足りなかったことが原因だと考えているため、なんとか桃子には笑顔を取り戻してほしいと思っている。
そんなお互いに相手のことを気遣う内に、士郎と桃子は惹かれあっていった。

「桃子さん・・・」

「士郎さん・・・」

ついに病院でいちゃつき始めた二人に、独身の看護婦や医者は心の中で早く帰れと願っていた。
ちなみに士郎に関しては本来の目的である恭也を探すことを完全に忘れていた。

風間ファミリー集結！！（後書き）

おまけは舞台裏みたいなものです。本編ではほとんど出てこないとらハのキャラとかを出来るだけ出していきたいと思います。それにしてもモロはいいキャラですね。

そういえばお気に入りがいつの間にか二桁になっていました。こんな未熟な文を読んでくれていることが嬉しくて感激です。

これからも頑張るのでぜひ読んでいってください。

もう一つの出会い（前書き）

日刊ランキングに乗りました！！
こうして応援してくれる人がいるのはうれしいですね。
しかしストックが切れてしまいました。これからは毎日は無理でも出来るだけ早く投稿できるようにしたいと思います。
それでは本編へどうぞ。

もう一つの出会い

日も暮れ始め、カラスの鳴き声があたりに響いた。

「あ、お姉さま!!そろそろ帰らないと修練の時間に間に合わないわ!!」

「もうそんな時間かぁ。遅れたらジジイに半殺しされるしそろそろ帰るとするか。」

「楽しい時間ってなんでこんなに早く過ぎるんだろうね。」

「本当だよな～。授業中とかはすげぇ長く感じるのに不思議だぜ。」

「それじゃあ今日はこれで解散かな。」

「おう!!それじゃあ明日はまた１０時にここ集合だ!!恭也も遅れるなよ!!」

「ああ。」

元々恭也はこの原っぱで野宿をするため遅れることはないがちゃんと返事はしておく。

百代は恭也を川神院に下宿させるつもりだったが、それは恭也が断った。

一人で旅をすることは初めてということもあり、出来るだけ自分の力で生きたいと思ったからだ。

不破家の掟に免許皆伝したら世界を回ることになるため、その練習も兼ねていた。

百代も修行のためなら仕方がないと諦めた。
ちなみに体の洗浄は近くの銭湯で済ましている。

恭也以外が解散したとたん、今まで騒がしかった原っぱが急に寂しいものになった。
それでも恭也は今までにないほど楽しい時間を過ごせたと思い満足していた。

「友達とはいいものだな。」

そして鍛練をするために意識を切り替える。
その時、恭也は一つの気配を捕える。
それは日常の状態の恭也では気付かないほど自然に気配を消していた。
この原っぱには自分たち以外はいなかったため、あきらかに恭也達を意識して気配を消していることに恭也は警戒心をもった。

「これは・・・キャップが言っていたようにトニーとやらのスパイか？」

たかが子供の争いだと思い、油断することはない。
なぜならその子供の争いに百代のような規格外も参加しているからだ。
ならば他の勢力にも同じようなレベルの者がいてもおかしくないだろうと恭也は考えていた。
恭也は警戒しながら気配の方に近づいた。
そして一気に距離を詰め、標的を逃がさないようにした。

「何者だ！！」

「ひぅっ！！」

そこにいたのは栄養も足りていないかのようにガリガリで暗い雰囲気を持った短髪の少女だった。
恭也は少女を見た瞬間、自分の勘違いだった思った。
なぜなら少女は気配こそ見事に消していたが、とても戦える雰囲気がなかったからだ。
確かに重心は安定し、ただ立っているだけでも隙は少ないが、それは恭也や百代と違い戦闘を意識した立ち振る舞いではなく、自然と身に付いたものが取れないだけといった感じであった。
だがそうなるとなぜ気配を消していたのかが恭也にはわからなかった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あ、あの・・・・その・・・・」

お互いに沈黙を保っていたが、少女の方が我慢できなくなったのか声をかける。
一生懸命に、自分の勇気を振り絞るような声で何かを話そうとする少女に恭也はすでに警戒心はなくなっていた。
そして恐らく年下であろうと思われる少女に優しく言う。

「大声をあげてしまい済まなかった。焦らなくていいから言いたいことを言うといい。」

「う～・・・」

話すことが苦手なのか中々会話のきっかけを掴めず、恭也はどうしたものかと考えていた。

そして風間ならどうするかと思い、とにかくまずは自己紹介からだと行動を起こした。

「俺の名は不破恭也。君の名前は？」

「！！」

「名前を教えてはくれないだろうか。」

このとき恭也は知らないがこの少女、椎名京は学校で虐められていた。

理由は、京の母親が男がいないと生きていけないと浮気を繰り返すからだった。

浮気がばれなければ問題もなかったが、この母親は何回も何回もそれを繰り返した。

そしてついに同級生の父親にも手を出し、それがばれてその子供の両親が離婚してしまったのだ。

その同級生の名前はトニー。

学校では風間達の次に影響力のあるチーム「トニー・トニー・チョップ」のリーダーだ。

もちろん京は悪くない・・・がしかし子供の思考は単純であった。

自分の両親が離婚したのはこいつの親のせいだ！！

トニーは怒りのまま学校中に聞こえるかというくらい大声で叫んだ。

トニーの影響力は大きく、京の母親が淫売であると学校中に知れ渡ってしまった。

こうして京は学校中から淫売の娘としていじめられることになる。

そのため自分に声がかけられる時は常にいじめの対象とされたときだけだった。

「椎名・・・・京」

「そうか・・・いい名前だ。」

「っ！！・・・う～。」

このように優しい声で語りかけてもらったのはいつ以来だろうと京は考える。

学校に行けば椎名菌と言われバイ菌扱いされる。

家に帰れば母親からは産まなければよかったと言われる。

父親からは冷たい目で見られ、ただ椎名流弓術を絶やさないためだけの存在として扱われる。

たまにだが優しくしてくれる父親はまだいい。

しかし、母親と学校はもう駄目であった。

京に出来るのは相手が飽きるまで徹底的に無視することだけであった。

だけど本当は友達が欲しかった。

一人は嫌だった。

だから京は遊んでいる風間ファミリーを見つけたとき、隠れてこっそり見ていた。

見つからないように気配も消した。

弓兵は見つかったらおしまいだからと教えられた気配遮断は虐めから逃げることにもよく使っていたため、かなりの練度となっていた。

風間ファミリーの中にも自分を虐める人はいた。

でもそれは仕方がないことだと、頭がいい京はわかっていた。

なぜなら自分を虐めないと逆に虐めの対象となるからだ。

風間ファミリーの面々はほとんどが虐めに加担していないだけだった。
でもそれは仕方がないことだと、頭がいい京はわかっていた。
なぜなら自分を守ると逆に虐めの対象となるからだ。

でもこの付近の住民でない少年なら自分の友達になってくれるのではないか、京はそう考えた。
そうして話しかけようと思ったが、なかなか緊張から声に出せなかった。
だが恭也が優しく話しかけてくれたおかげで京の緊張も取れた。

「不破君はここで何してるの？みんな帰っちゃったよ。」

「ああ、俺はここで修行の一環として野宿するつもりだ。」

「修行って・・・それじゃあ家は？」

「かなり遠いな・・・〇〇〇県なんだ。」

「そんなに遠くから来たんだ・・・凄いね。私もそれくらい遠くに行く覚悟があればいいのかなぁ。」

そう言って京は空を見上げる。
それから恭也と京は様々なことを話した。
互いに武術をやることから話は広がっていき、本の話などもした。
京は芥川や太宰など、恭也は主に戦国や幕末などの本をよく読んでおり、ジャンルは違うが話題が途切れることはなかった
お互いに多くを語る性格ではなかったが、恭也としても落ち着いた雰囲気は居心地がよかった。
だからこそ恭也は京の態度に違和感を感じ、聞いてみた。

「椎名はなにか悩みでもあるのか？出会ったばかりだがあるなら聞こう。」

それを聞いて京は、自分の事を話すか迷う。
この話を聞いた恭也も自分を淫売の子として見るのではないかと考えたからだ。
だがそれも一瞬、久しぶりに人と話していつもより気分が高揚していた京は全てを恭也に話すことを決意した。

「じつは・・・」

話を聞き終わった恭也は静かに目を閉じた。

「そうか・・・」

話を聞く限り相当根の深い問題のようだ。
恭也は自分に出来ることはなんだろうかと考える。
ふと恭也が京の方を見ると、ひどく怯えた様子で恭也を見ていた。
その目はうっすらと涙で濡れていた。

（話を聞くだけでもかなり違うと思ったが・・・これはなにか声をかけないとダメだな。）

デリケートな問題であるからこそ、考えてしまう。
が、結局恭也は自分には気の利いた言葉などでないと思い、開き直

って思うまま言うことにした。

「自分の父親は自由奔放な人なんだ。」

「えっ？」

突然の話題転換に京は思わずキョトンとしてしまった。

「しかも気まぐれでな。幼い頃の話なんだが九州にいるときに札幌ラーメンを食べたいと北海道まで行連れて行かれた。」

「それは・・・凄い・・・のかな？」

「ドイツで護衛の依頼が入った時はもっとひどい。今の時代お金がないと言って貨物船に乗り込んで密入国させられた。実家に電話すればいいのに母親が怖いと言って連絡しなかったんだ。せめて依頼人に言って準備金くらいもらえばよかったのに・・・」

かつてのことを思い出し恭也から暗いオーラが溢れて来た。

「あうぅ・・・」

それを見た京は先ほどとは違う意味の脅えた目で恭也を見ていた。

「他にも・・・と、話が脱線してしまったか。まあなんだ、自分はよく親戚から父親に似ていないと言われる。母親は見たことがないからわからないが破天荒な人だったらしい。そして俺は周りから落ち着いている子と言われるし自覚もしているつもりだ。つまり、親は親で子は子だということだ。」

「あっ・・・」

このとき京は恭也が言いたいことをだいたい理解した。
そしてそれが自分の望んだ言葉であるということも・・・
京の目から自然と涙が溜まる。

「俺はその母親を知らない。が、椎名のことは今日初めて話したが知っている。俺にとっては椎名はかわいい女の子の友達、それが全てだ。」

恭也の言葉に、京は先ほどまで我慢していた涙が溢れる始める。
涙と鼻水で顔をくちゃくちゃにしながら声を紡ぐ。

「わ、わたしは・・・汚いよ・・・」

「いったいどこが?」

「椎名菌だって・・・みんなにばっちぃって・・・」

その言葉に恭也は京に近づいていく。
そして正面から抱きしめた。

「なにも汚くないさ。」

「なに考えているのか・・・わからないって・・・言われるよぉ・・・」

「今日一日でこれだけ語り合った。話し合えば理解できるものだ。」

「おがあさんから・・・生まれでごなげれば・・・よがっだって・・

・言われたぁ・・・」

「俺は今日椎名に会えてよかった。生まれてきてくれて、ありがとう。」

「ふ・・・わ・・・君・・・う・・・うぁ・・・あ・・・あぁぁぁぁぁぁぁ・・・」

今まで我慢していたものが全て吐き出してしまうほど、大声で京は泣いた。
それに対して恭也は背中をさすり、何も言わずにただ抱きしめ続けた。
京の体は小さく、恭也はこの体にどれだけの悲しみを背負っているのかと思う。

全てを吐き出し、落ち着いたころ合いを見計らって恭也は京から離れた。

「あっ・・・」

「どうした?」

「う〜・・・なんでもない。」

「そうか。」

恭也は疑問に思うが、なんでもないと言っている分には大丈夫だろうと考えた。
京からすれば久しく感じていなかった人の温もりをもっと感じていたかった。
しかし先ほどまでの自分を思い出し、恥ずかしさもあった。
そして京は先ほどの恭也の言葉を思い出した。

「不破君はさっき私のこと、友達だって・・・」

「ああ、椎名は友達だ。」

「本当に私が友達でいいの?」

「ああ。」

「うぅ～・・・うれしいよぉ・・・初めて友達が出来た。」

「実は俺も今日初めて友が出来たんだ。おそろいだな。」

恭也がそういうと、出会って初めて京が笑顔になった。
それを見て恭也はもう大丈夫だと確信した。
しかしこれが根本的な解決にならないことはわかっていた。
なぜなら恭也は通っている学校も違えば住んでいる場所も違うのだ。
そのとき、今日出来た仲間たちの顔が浮かんできた。

「そうだ、明日キャップ・・・風間達を紹介しよう。」

話を聞く限りキャップ達は学校ではかなり目立つらしい。
それに彼らは仲間を大切に思っていることから、学校でも京を守ってくれるだろうとの考えたからだ。

「それは、まだちょっと待ってほしい・・・」

名案だと思ったが、それは京から否定された。

「私の虐めは学年中で行われているから・・・彼らを巻き込みたくない。」

それに、と京は小さな声で続ける。

「彼らの中にも・・・いるから。」

何が、と聞く必要はなかった。

虐めに加担している人がいるという意味だろう。

その話を聞くと少し怒りが込み上げてくる。

「だれだ?」

「怒らないで・・・これは仕方ないことだから・・・」

そう言って京は恭也に事情を話す。

確かに立場的に仕方ないものであることもある。

「納得は出来ないが・・・」

「私のことで怒ってくれたのに・・・ごめんね。」

「構わない。しかしそれではどうする。」

「多分不破君が私を紹介したら責められる。それは絶対に嫌。だか

ら私が自分で言う。仲間に入れてほしいって、虐められるのは嫌だって言う。」

「そうか・・・椎名がそう決めたのならそれがいいのだろう。」

「だけど・・・まだ怖い。だから覚悟を決めるまでこうして二人で会ってほしいの・・・だめかな？」

「わかった。俺がこっちにいられるのは夏休みの間だけだが、出来るだけ力になろう。」

「う～・・・ありがとう。不破君は優しいよぉ・・・」

そのように会話をしていると完全に日も暮れ、女の子が一人で帰るには遅い時間となった。

「送ろう。」

「一応鍛錬はしてるから大丈夫。それにもしお母さんに見つかるとすごく嫌な気分になるし。でもここでの出来事が嬉しすぎて帰るのが鬱・・・」

「なら次にここに来ることを考えるといい。きっと楽しくなる。」

「うん！！それじゃあ・・・また明日！！」

「ああ、また明日。」

そして京と別れた恭也は今日の一日を思い返す。

今まで友といえる存在がいなかったことを気にしたことはなかった

が、それがどれほど損なことかをここに来て知ることが出来た。
そのことを教えてくれた仲間たちとの出会いに感謝し、大切にしていこうと決意した。

「もし仲間達を傷つける存在がいたら容赦はしない。」

その覚悟を胸に、夜の鍛錬を開始した。

おまけ

ドイツ・リューベック

「なんだと、士郎が重症だと!?その報告に間違いはないのか!?」

「はっ!!間違いないようです。詳細はこちらに・・・」

「なんと、一般人の女性を守って負傷か・・・ふっ、奴らしい。さすがは日本が誇るサムライだな。」

「父さま、なにかあったのですか?」

「おお、今日も荒野に咲く一輪の花のように綺麗だなクリス。なに、私の命の恩人が大怪我したと聞いて驚いたのだ。」

「それは一大事ではないですか!?」

「うむ、だが奴はサムライ。たとえ重火器に晒されようが爆弾で体を吹き飛ばされようが、自らハラキリをしない限りは死なぬ。」

「おお、忍の言うとおりサムライとはすごいのですね。」

「うむ、どうやら今回の負傷もか弱き女性を守った結果らしい。流石だ・・・」

「すばらしいです・・・あぁ、私も日本に行ってみたい。」

「今は私が忙しいから無理だが、いつか行けるようすると約束しよう。」

「はい！！楽しみにしておきます。」

「ところで忍とは女友達かね？」

「はい！！日本からの留学生ですが親戚がドイツにいるらしくドイツ語も流暢に話せます。なのでサムライやＳＵＭＯＵのＫＩなど日本の文化について聞くと詳しく教えてくれる良き友達です。」

「そうか、いい友達をもったな。」

士郎と桃子がいちゃいちゃしている間にドイツではこのような会話があったとか。

もう一つの出会い（後書き）

今回は京と恭也の出会いです。京の虐めは一部独自設定があります。
そしてなぜかやたら名前が出てくるトニー・・・風間ファミリーの
名前よりも出てくるトニー・・・お前は何者なんだ。
このままでは本編にトニーが出てきてしまう。どうしよう・・・

50年に一度（前書き）

今回は原作にだいぶ沿った形になります。原作でも一番外せない部分の一つだと思いますしね。
それではどうぞ見ていってください。

50年に一度

恭也が風間ファミリーや京に出会ってから約二週間が経った。
初めは友達の距離感に戸惑っていた恭也だが、今ではファミリーの一員として違和感もなくなっていた。
この日もいつもどおり全員集合で原っぱに集まっていた。

「ところで前から気になっていたんだが、この草は他と比べてずいぶん大きいんだな。」

「昔から大きかったわよ。あれ？・・・前は3メートルくらいだったのに・・・」

「この草もう5メートル越してるよ！？」

「実は妙な生き物じゃね。ある日ワン子の姿が消えた・・・するとこの植物はワン子の身長分背が伸びていた。」

「怖いでしょうが！！」

「ある日、ガクトの姿が消えた。するとこの植物が花をつけたとき、そこに死んだガクトの顔が！！」

「キャー、気持ち悪いわ！！」

「ぬぬ、だが物理的に殴れるなら化け物でも平気だ。」

「あれ、姉さんお化け苦手？」

「ふん、うるさいな・・・ちょっとだけだ。」

「まあ確かに殴れないモンね、ああいう類は。」

「まだミサイルを撃ち込まれた方がマシだ。」

「いや～、それはどうなのさ?」

「鹿児島に行ったときにとある高名な退魔師の一族に世話になったことがある。霊力さえあれば悪霊などを退けられるそうだ。」

「なんだと!?恭也、それはなんという一族だ!?」

「間違いなく行くつもりだな姉さん・・・」

「この人なら幽霊でも倒しちゃいそうだよね。」

「神咲一灯流という。だが一族秘伝らしく教えを請うことはできなかった。」

「くっ!!しかし幽霊を倒す方法があるなら私はいつか自力で・・・」

「こらガクト!!学校の先生からちゃんと宿題させるようにって電話来ちゃったじゃ・・・」

「あ、ガクトのお母さん。丁度いいや、この花のこと聞こうぜ。」

事情説明中・・・

「この草はあれだよ、竜舌蘭じゃないのかい。」

「リュウゼツ・・・ラン？」

「そうさ、こんなレアな植物がこんな空き地にねぇ・・・」

「ほう。これがセンチュリープラントだったのか。」

（→この頃の大和はニヒルに毒されている。）

「なんだそのマンガの敵キャラのような名前は。」

「気候にもよるが・・・数十年に1度しか咲かない花だ。」

「あんた本当に小学生かい大和ちゃん？」

「フフ。高校生だったら貴方を口説いていた。」

その後、鉄心の方がこの花に詳しいらしく百代が呼び出した。

「ボケはじめのブルセラじじい！！！！！！！！！」

「モモ！！おまえいい度胸しとるのぅ！！」

「一瞬で来ちゃったよ。この一族は全くもう・・・」

鉄心の話ではこの花は確かに竜舌蘭らしく、しかも５０年前にも咲いていたと言う。

そしてこの花がが咲くのはおそらく明後日だという。

それだけ言うと鉄心はまた一瞬で姿を消し、そして戻ってきた。

「そうじゃ忘れていた。不破よ、お主は今日川神院に来なさい。」

「なぜですか？」

「明日は大型の台風が上陸するのじゃよ。さすがにそんなときまで野宿などさせられんわい。」

「そうだったんですか。お心遣い感謝します。」

「なんだ恭也、うちに来るのか？じゃあせっかくだし試合しようじゃないか。お前の本当の強さをみたいぞ。いいだろじじい！！」

「お姉さまと恭也が戦うの？アタシも見たい！！」

「不破がいいなら構わんよ。むしろよく今まで我慢したのぉ・・・」

「恭也は仲間だからな。」

「お主も成長しとるということかの、ふぉっふぉっふぉ。」

そうして今度こそ鉄心は姿を消した。

「明後日か！！楽しみだぜ！！」

「せっかくだしみんなで写真撮ろうよ。」

「クク、皆子供だね。まあ悪くはないな。」

恭也達が竜舌蘭について話しているところを、原っぱから少し離れたところで京が見ていた。

京は恭也と出会ってから何度も原っぱに近づき、そして離れることを繰り返していた。
そのことに気付いたキャップは京の方に近づいて行った。

「おいお前、前も見てたよな。誰かに用でもあるのか？」

「あ・・・う・・・わ、わたしも・・・仲間に・・・」

今までの京なら即座に逃げ出していたが、これまで恭也からいろいろ支えてもらったのだ。
遠くにいる恭也を見て、そろそろ自分の決意を出さなければと思いいつも以上に頑張ろうとした。
しかし急に走ったキャップを追いかけてきた大和を見て、京はテンパってしまった。

「どうしたキャップ。入口まで急に走って。」

「っ！！」

「あ、おい！！なんだ行っちまった・・・」

「なんだあれ？」

「わっかんね。俺に話があるみてー。」

「うわ、まさか椎名に好かれてんじゃね？」

「ばっ、ふざけんな！！ちげーよ！！」

「冗談だよ。椎名菌だもんな。」

「いや、そんなんじゃなくて女とか嫌だろ。」

「フ、子供だなキャップは。」

「またやってしまった。」

原っぱから逃げ出した京は後悔していた。
前に恭也と出会ったとき自分で頑張ると決意表明したものの、成果は出ていない。
このままでは恭也にも呆れられてしまうのではないかと怖くなってくる。

京は初めて出来た友達のことを思う。
出会ってから毎日、恭也が風間ファミリーと遊んだ後に会っている。
最初はお互い苗字で呼んでいたが、いつの間にか名前で呼び合うようになった友達。
あまり口数の多い方ではないが、いつも自分と一緒にいてくれ、そして励ましてくれる優しい人。
あの川神百代ですら本気で気配を消した自分に気付かなかったのに、それに気づいてくれた。
それに一緒にいるとどんなに心が荒んでいても落ち着く。
恭也はたとえ逃げ出しても何も言わず、ただただ自分を待っていてくれる。
だからこそ・・・

「今度こそ頑張ろう。」

竜舌蘭が咲こうとする前夜、鉄心が言ったように川神に大型台風が上陸した。
台風からこの花を守るために、キャップは全員を招集した。

「花がきちんと咲けるように保護するぞ!!」

「全く、この台風の中むちゃくちゃだ。」

「仕方ないだろ!!俺は他でもない、空き地で咲いたあの花が見たいんだ!!」

「ワタシも!!」

「わかってるさ俺だって!!でも危険すぎる!!」

「私達が全員守ってやるから安心しろ、くくく。」

「ああ、お前たちには傷一つ付けはさせん。」

「なんと心強い。ところでご機嫌だね姉さん・・・」

「ああ、世界は広いことを再確認したからな。」

「そういえば恭也と試合したんだっけ?で、どっちが勝ったの?」

「私の負けだ。」
「自分の負けだ。」

恭也と百代は同時に言った。

「どっちも負けって？」

「なぁに、いずれ語る時が来るさ。それより今は・・・」

「ああ、花の保護が最優先だ。」

「それにしても恭也って台風が来るから川神院に避難したのに意味なかったね。」

「鉄心殿の御好意を無駄にしてしまったな。」

ワン子やモロは飛ばされないように百代とロープで結ばれていた。
突風で住宅建設中の現場から木材などが飛んでくる。
それを百代は拳で弾き飛ばす。
恭也もまた他のみんなに当たらないように大きいものは小太刀で切り、小さいものは弾いていた。
恭也と百代が障害物から守りつつ、竜舌蘭がある空き地に到着した。
すると、そこには先客がいた。
その姿に恭也が驚く。

「京か！！」

「お前、椎名か！！」

キャップも京の存在に気づいたように声を上げる。

京は土管の影で縮こまっていた。

「なんでこんな時に出歩いてやがる。」

「みんな・・・この花・・・さ、咲くの・・・楽しみだって・・・」

「聞いていたのか・・・」

「お前には関係ないだろ。危ないからけーれ!!」

「というか、今までよく無事だったね。」

「で、でも・・・」

「いいよ手伝え!!人は多い方がいい!!」

「それに今一人で帰すのは危険だ。例え守る人数が増えようと俺達のやることは変わらん。」

「そういうことだ。」

恭也達は竜舌蘭が吹き飛ばされないようにビニールなどを覆い、ロープで固定するなどをした。
大人並みの腕力を持つガクトや運動神経に優れたキャップ、何より百代と恭也の存在は大きく、作業はすんなり終わらせることが出来た。
その後、恭也と百代の二手に別れて解散した。
恭也はキャップとモロと京。
百代は大和とガクトとワン子。
最初で全員で帰ろうとしたが、二手に分かれた方が早く全員帰れる

ことから別れて行動した。
恭也達は最初に京の家に行き、一番近いモロの家に行った。
京は別れるときに何か言いたそうな顔をしたが、結局何も言わず家に入っていった。
ただ、その瞳には決意が宿っていた。
そして二人になったところでキャップが声をかけた。

「恭也、お前椎名と知り合いなのか？」

「どうしてそう思う？」

「お前が椎名を見つけたときに、京って言っただろ。まあ他の奴には聞こえていなかったみたいだけど。」

「・・・京は友達だ。」

隠しても仕方ないと思い、恭也は正直に全てを話した。

「そっか・・・」

「何も言わないのか？京は虐められているんだろ・・・」

「なにも言わないさ。てか虐めとかだせーって思うし。じゃあ毎日あいつが原っぱで見ていたのは俺達と遊びたかったからか。」

「他の奴らにはまだ言わないでくれ。本人が自分で言わなければ意味がないんだ。」

「俺もそう思う。しかしあれだな、俺は親が好きだけど色んな家庭があるんだな。」

「そうだな。もし京が仲間に入れてほしいと言ったら受け入れてくれないか。」

「おれはいいぜ!!ただ俺だけの意見で入れるわけにはいかない。ちゃんと全員が納得きゃ駄目だけどな。っと家に着いたか。恭也、今日は親父達いないしこっちに泊って行けよ!!モモ先輩の家には電話しとく。」

「すまない。」

「いいってことよ。それに椎名の話をもう少し聞かせてくれ!!友達の友達ってことは椎名も俺の友達だからな!!」

次の日、花は見事に黄色く咲いていた。
ガクトに肩車をしてもらっているワン子ははしゃいでいる。

「おいおい、あんまり暴れるなよ!!って、う、うわ、うわあ!!」

「あわわ、きゃー!!」

「危ない!!」

あまりにワン子が激しくはしゃぐため、ガクトが体勢を崩しこけてしまう。
しかし頭を打ちかけたガクトには恭也が、投げ出されたワン子には

百代がとっさに動いて助けた。

「まったく、はしゃぐのはわかるが気をつけないと危ないだろぉ。」

「あうう、ごめんなさいお姉さま。」

「問題ないか？」

「ああ。恭也、助かったぜ。」

そうして台風などのアクシデントがあったものの、キャップ達の頑張りのおかげか無傷の竜舌蘭がそこにあった。

「正直５０年も待たせるわりにすごく綺麗ってわけじゃないな。」

「あ、俺もそれは思った。」

「しかし感慨深いものはある。」

「手触りとかは普通なのにねぇ。」

「あんまり触ると手がかぶれるかもよー。」

「うわわ、マジで！？」

「ってコラ、俺様に擦り付けるんじゃねえ！！」

「俺達の守った花だ！！放っておいても勝手に咲いたとかこの際なしで！！」

「図々しいけど・・・そっちの方が楽しいしね。」

「ったく、あんた達相変わらず仲良いねぇ。ほら写真撮るんだろ、ぱしゃりといくよ!!」

「よーし、お前ら集合!!写真だ写真!!」

キャップの号令で全員が集まる。
恭也はこの瞬間に京がいないことを少し寂しく思った。
しかし写真を撮る瞬間、いつもの気配を感じた。
気配の方を見るとそこには京がいた。
恭也がキャップの方を見ると、キャップも気付いたようで声をかける。

「おーい、お前もこっち来いよぉ!!」

「っ!!」

「大和、お前を怖がっている節がある。お前が連れてこい。」

「マジで?」

「マジで。」

「・・・・まあ、この花に関しては頑張ってくれたしな。」

そう言って大和は京に近づいていく。
京は怯えているが、いつもの様に逃げ出したりはしなかった。

「花、見事に咲いているだろ。記念写真撮ろうぜ・・・俺達と。」

「え・・・えと・・・」

「嫌じゃないなら来いよ。」

そう言って大和はキャップ達のところに歩いて行く。

京もその後ろに着いてきた。

「お、その子は新顔かい？それじゃあいくよ、ハイチーズ。」

パシャ！！

おまけ

御神流本家

「いつになったら恭也は見つかるんだろうねぇ・・・」

「ババア！！今帰ったぜ！！」

「噂をすれば・・・まあ心配させた分きっちり説教をし・・・な・・・け・・れ・・ば・・・・・？」

「初めまして。」

「士郎・・・私の目がおかしくなったのかねぇ・・・恭也が女にな

ったように見えるよ。」

「ぼけてんのか？どこをどう見れば恭也に見えるんだよ。」

「私、この度お宅の士郎さんと結婚を前提としたお付き合いをさせてもらってます、高町桃子と言います。よろしくお願いします。」

「随分礼儀の正しい良い子だねぇ。ところで士郎・・・？」

「なんだ？」

「誰が嫁さん連れて来いって言ったか！！恭也を探して来いって言っただろうが！！お前の耳は飾りかなんかなのかい！？」

「ギャー！！！！！！！」

桃子はのんきにこれも一つの家族愛なんだなと思っていた。

５０年に一度（後書き）

恭也と百代が戦った話はいつか外伝でやりたいなと思います。
書いたら止まらなくて長過ぎたので二つに分けました。
なので次の話は明日にでもｕｐしたいと思います。
ちなみに次で幼年期はおしまいです。やっと学園に突入ということで作者もテンションが上がってきました。
ではここまで読んで頂きありがとうございました。

旅立ちのとき（前書き）

これからの展開に悩む作者です。
この話できりもいいし一回プロットをちゃんと作るべきなのでしょうか・・・

旅立ちのとき

写真を撮った後はみんなで花の話をし始めた。

「次に咲くのも５０年後なのかなぁ・・・」

「その時は６０歳だね。」

「爺じゃん！！」

「私は修行で若いままだろうがな。」

「姉さんの場合本当にそうなりそうで怖いね。」

恭也は京の方を見ていた。
何かを言いたそうにして、それでも言えない様子がよく分かる。
その様子にキャップも気付いた。

「椎名、お前なにか言いたいことがあるんじゃないか？」

「っ！！」

キャップの言葉にその場の全員が京に顔を向ける。
京は全員が自分に注目していることに気付き、いつも以上に緊張する。
ふと京が恭也の方を見ると、目が合う。
そして声には出さないが口だけで頑張れと言った。
それを見た京は決心した。

「わ、私も・・・仲間に・・・入れてほしい・・・・・」

「仲間にしてほしいのか？」

キャップが聞くと、京は小さく首を縦に振った。

「いつも・・・遠くから見てた・・・すごく楽しそうだなって・・・もう虐められるのも・・・一人でいるのも嫌・・・」

涙を流しながら、一生懸命声を出して言うそれを確認したキャップは周りを見渡す。

「今聞いた通りだ。椎名は仲間になりたいってよ！！みんなの意見を聞きたい。」

突然の出来事に他のメンバーは困惑している。その中で一人、恭也が声をあげた。

「賛成だ。」

「ちょっと待った。俺様は反対だ。恭也、お前は学校が違うから知らないだろうがこいつは椎名菌って・・・」

「それ以上言うな。話は全部聞いている。」

「聞いているって・・・お前まさか！？」

「それも含めて賛成だと言っている。」

「ちょっと待てよ。じゃあ何か！！お前は学校が違うからいいかも

しれないが、ワン子とかが虐められたらどうするんだ!?」

「ガクト落ち着け。他のメンバーの意見を聞いてからでもいいだろ。ちなみに、俺も反対だ。軍師として他のメンバーを危険に晒すわけにはいかない。」

「大和とガクトは反対か。他は?」

「私は賛成だ。」

「姉さん!!」

「モモ先輩は一個上だからそんなに簡単に言えるんだ!!」

「おいおい、そりゃ私も椎名の噂は聞いてるが関係ないだろ。なんたって私たちが集まれば出来ないことなんてないんだから。女の子一人虐めから助けることくらい簡単だろう?」

「これで二対二だな。ワン子とモロはどうだ?」

「ワタシは・・・賛成!!だってかわいそうじゃない。それに、仲良く出来るなら仲良くしたいよぉ・・・」

「僕も・・・僕も賛成!!」

「モロ、お前まで!!」

「ワン子、モロ・・・いいのか?椎名を入れて一番虐めを受けやすいのはお前たち二人なんだぞ。」

大和は常に風間ファミリーのメンバーを心配している。
京を仲間に入れた場合、体格のいいガクトや人気者のキャップ、頭がよく人間関係の距離間に敏感な大和に比べ、もともと虐められやすい雰囲気を持つモロや親のいないワン子はいつ標的にされてもおかしくない。
だからこそ大和は京を入れるのを反対していたのだ。
ガクトの反対理由の一番は同じ理由である。

「ワタシなら大丈夫。だってみんながいるもの!!一人じゃ無理だけどみんなと一緒なら何でも出来るわ!!仲良く出来るなら仲良くしたい!!」

「それに僕も他人事じゃないから・・・もしガクト達と一緒じゃなきゃ僕も虐められてたと思うし。それにこんなに小さな体で勇気を出して仲間にしてほしいって言ったんだ!!なんとかしてあげたいよ!!」

「お前たちがそう言うならいい。ならさっきの反対はなしだ!!俺も賛成する。」

「大和・・・お前まで・・・」

「悪いなガクト・・・」

「頼む・・・ガクト。」

「くっ、恭也!!こいつ連れて来たのお前なんだろ!?説明しろ!!」

「京は・・・俺の友達なんだ・・・」

「だったらお前が守れよ!!俺達を巻き込むなよ!!こいつの虐めは学校中で行われているんだぞ!!」

「すまない・・・」

「ちっくしょう!!歯ぁ喰いしばれや!!」

「っ!!」

ガクトは全力で恭也に殴りかかった。
そのスピードは恭也からすれば遅く、避けるのは簡単であった。
だがしかし、恭也はガクトからの一撃を気で守ることすらせずに受けた。

「恭也!!」

あまりの光景に京は声を上げ飛び出す。
しかしその肩に手を乗せ止める者がいた。

「やめとけ・・・これは大切なことなんだ。」

「恭・・・也・・・」

「ガクト・・・頼む・・・」

恭也は口を切ったらしく血が出ているが、そんなものは気にせずに言う。
本来恭也にこのようなことを言う資格はない。
なぜならこれで被害を受けるのはガクト達で、恭也にはなんの影響

もないからだ。
だがそれでも、京が小さな体で頑張ってきた事を知る恭也は諦めるわけには行かなかった。
自分が紹介すると責められるからと言って、一人で頑張ることを決意した。
その思いを無駄にはしたくなかった。

不意に恭也は手を地面に着け頭を下げる。

「お、おい恭也!?なにしてんだよ!?仲間にそんなことしてほしくねぇ!!やめろよ!!」

「ガクト・・・頼む・・・」

それは土下座だった。
普段から落ち着いた雰囲気の恭也が、今は頭を地面に擦りつけている。
その光景に他のメンバーも唖然としている。

「恭・・・也・・・」

「見事だ・・・よく見ておけよ。これはお前のためにやっているんだぞ。」

武士が土下座をする。
これがどれほどの意味をもつか知っている京は泣き、そして百代は称賛する。

「わかった!!わかったから頭を上げろよ!!俺も賛成するから!!」

「本当か・・・」

「ああ・・・てかそこまでされて反対なんてしたら男じゃねえよ。ちゃんと仲間として認める。それに・・・昨日のこいつを見て確かに仲間として認めてもいいって思ったし・・・」

最後の方は小さくなったが、恭也の耳には確かに届いた。

「ありがとう。」

恭也はほっとした。
ガクトはなんだかんだファミリーの中で一番面倒見がいい。
一度仲間として認めたら誰よりも助けになるだろうと思ったからだ。
先ほどのパンチも仲間の思いに対する籠っており、普段の修行で受ける一撃の何倍も効いた。

ガクトが賛成したため、場の雰囲気が軽くなった。
それを見計らったかのようにキャップが声を上げる。

「ちなみに俺は賛成だ!!これで決まりだな!!椎名、お前は今から風間ファミリーの一員だ!!これからは毎日俺達と遊ぶぞ!!」

「よかったな椎名。っておお!!」

「恭也!!怪我・・・怪我してる・・・」

京が百代の手を振り切り恭也に駆け寄る。
そして口に付いてる血を持っていたハンカチで拭う。
恭也は京の頭をそっと撫でる。

「頑張ったな京。これでもう一人じゃない。」

「ありが・・・とう。ここまで・・・頑張れたのは・・・恭也の・・・おかげだよぉ。」

「そういえば、約束を破ってしまったな。結局責められてしまった。すまない。」

「そんなのもういいよぉ!!本当に・・・本当にありがとう!!」

そうして京は恭也に抱きつく。
その光景を見ていた他のメンバーは・・・

「青春だなぁ・・・」

「よかったわぁ。」

「俺様も認めるよ。ったく嫌な役回りだったぜ。」

「お前がみんなのためにあそこまで食い下がったのは全員わかってるよ。サンキューな!!よーし、これからもっと楽しくなるぜ!!」

「ああ。っと違う違う・・・くく、所詮愛など幻想にすぎないのに。」

「あ、久々に名言来た。今の名言集に入れなきゃね。」

「それじゃあ椎名!!みんなに自己紹介だ!!」

「ほら、京・・・」

「うん・・・私は京・・・椎名、京!!」

その後

京の家庭環境の話などもされたが・・・

「親関係ねえじゃん、気に済んなよ。」

キャップが言う一言で解決。

一番の問題となったガクトは

「もう京は仲間になったんだ。ならこれ以上の虐めは絶対に許さねぇ!!」

と誰よりも京のことを心配していた。

大和は虐めらないためには相手に理解してもらおうと努力する必要があると考え、京にコミュニケーションの取り方などを教えていた。虐めを減らす努力をしようと初めて思った京には難易度の高いものばかりだったが、弱音は吐かなかった。

ワン子は初めての同じ年の仲間が出来てはしゃいでいた。

京にとってこうして話しかけてもらえることは戸惑うことが多かっ

たが、明るいワン子のおかげで嫌なことを思い出すことが少なくなった。

相変わらず虐めてくる者は百代によって粛清された。
それにより直接虐めに走るものは一気に減ることになる。

モロはいろいろな漫画やゲームを貸した。
クラスのメンバーとコミュニーケションをとるための準備となった。

京はそれでも母親などに言葉の暴力を受けることで気持ちが沈むことが多かったが、恭也が抱きしめることで安心させていた。

そして・・・

8月31日

夏休みが終わり、明日には学校が始まる日がやってきた。
そしてそれは恭也が川神から去る日でもあった。

「寂しくなるね・・・」

「モロ・・・ゲームや漫画をしたのは初めてだったが面白かった。」

そう言って恭也はモロと握手する。

「きょうやぁ・・・いっちゃやだよぉ・・・」

「泣くなワン子。学校がある間は難しいが長期休みになったらまた戻ってくる。」

「ぜったい・・・ぜったいだからね・・・」

ワン子の頭を撫でながら必ず戻ってくると約束する。

「心の友よ。次に会った時はもっと鍛えておくぜ!!」

「ガクト・・・次。」

「おい!!」

「冗談だ。お前には感謝している。京や他の仲間たちを頼んだぞ。」

「ガクトだけじゃ無理だから・・・俺も手伝ってやるよ。」

「大和・・・知力９５とは言うだけあった。他のみんなから知識の面で支えてやってくれ。」

「恭也や姉さんは武力５３万はありそうだけどな。」

そしてガクトと大和に拳をぶつけ合う。
背後から殺気を感じた恭也は一歩横にずれる。
すると元々いた位置に拳があった。

「さすがだなぁ・・・まだ私との決着はついていないんだ。次に会った時、私はもっと強くなるぞ。」

「ああ、百代はいい刺激になった。次に会うときは俺ももっと強くなっている。」

「楽しみだ。」

お互い好敵手を見つけたと言わんばかりの笑顔であった。

「恭也のおかげで私は変われる。今度・・・会った時は・・・」

「泣くな・・・ほら。」

恭也はそう言って京を抱きしめる。

「う～・・・もっと・・・」

しばらく抱きしめた後、京を離した。

「今度会った時は美人になって・・・それで・・・その・・・内緒・・・」

「会った時に教えてくれるのか？」

「うん。そうする。」

「楽しみにしておこう。」

そして恭也はキャップと向き合う。

「キャップ・・・お前が俺を友と呼んでくれたことが始まりだった・・・」

「ああ、お前をファミリーに誘って良かったとあの日の俺を褒めてやりたいくらいだ！！」

「俺の初めての友よ・・・本当にありがとう。お前たちは一生の宝ものだ。」

「こっちこそ、楽しかったぜ！！お前が帰ってくる席はちゃんと残しておくからな！！」

「ああ、短い間だったが川神は俺の第二の故郷だ。必ず戻ってくると約束しよう。」

「ならこれは別れじゃねぇ！！旅立ちだ！！お前らももう泣くな！！友の旅立ちは笑って見送るのが礼儀だ！！」

キャップがそう言うと他の面々も泣くのを止め、横一列に並ぶ。
そして全員が笑顔になる。
それを見た恭也は足を一歩踏み出し、歩き出す。
それを見てまた声を上げる者がいたが恭也は振り返らない。
そしてそのまま姿が見えなくなるまで歩いてから振り返った。
その目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

おまけ

「行ったか・・・」

「なんか落ち着いててみんなのお父さんって感じだったよね。」

「うん、それなんとなくわかるわ。」

「今ふと思い出したんだが・・・」

「なんだどうしたモモ先輩?」

「恭也ってここまで来るのに4日使ったって言ってなかったか?このままだと学校間に合わないぞ?」

「あ・・・・・」

全員の声がハモリ、一陣の風が吹いた。

旅立ちのとき（後書き）

これで子供時代は終了です。
次の話からは時代が一気に飛びます。
それとこれからたまに外伝とかも書いていきたいですね。まだ内容は未定ばかりですけど・・・
それではここまで読んでいただきありがとうございます。

外伝１　恭也ＶＳ百代（前書き）

外伝です。タイトルの通り、本編で語られなかった恭也と百代の試合です。
それにしても戦闘描写は難しい・・・今回は地の文が多くなっているのでかなり読みにくいかもしれません。申し訳ないです。

外伝1　恭也VS百代

川神院

日本だけでなく、世界中から武術の総本山と謳われた寺院である。
その実力は名声に負けず、世界最高峰の武人が集まっている。

川神鉄心、釈迦堂刑部、ルー・イー、そしてこの3名から将来は川神鉄心を超えること間違いなしと言われる幼き武神・川神百代。
また一般の僧兵でも並みの武家では歯が立たないほどの強さを持つ。

川神院に挑戦することは武の頂に挑むことと知れ

このような言葉があるように世界中から己の武に自信のある者が挑戦者として川神院に訪れる。
その者達の結末は世界最高の壁を知り、己を磨きなおす者、自信を無くす者、弟子になろうとする者など様々だ。
そしてこの高き壁にまた一人挑むものがいた。

不破恭也

時の支配者の影には常に御神流があったと言われるほどの流派を使う者だ。
さらに不破とは御神流の中でも守る者のために修羅となり敵を殲滅させる一族の名である。
そして純粋な戦闘能力だけで見れば、不破は本家である御神の家すら上回っている。
そのため裏の世界に住む者で不破とは恐怖の対象であった。

かつて表の世界で最強の武人であった川神鉄心でさえ、不破御影の

ことを裏世界最高の武人と評価した。
これにより当時の最強と言えば二人のどちらかだと言われていた。
とはいえこの二人が直接戦うことは、現代までなかった。
不破御影は敵対しなければその剣をほとんど外部に見せることはなかった。
それに対し、川神鉄心は武術は己の心を磨くものとし、決して悪行に使うことはなかったからだ。

そして現代・・・
当時最強だった二人の孫が互いに武を競い合うことになったことは必然だったのかもしれない。

「結界の準備はよいか？」

「はい、川神院師範代候補４名による結界、準備出来ました。」

川神院では正式な立ち合いの場合、ほとんど見学が許されていない。
なぜなら己の武を見せることはすなわち弱みを見せることになるからだ。
だがしかし、今回の場合は川神院にいる僧兵のほぼ全員が見学に来ていた。
川神院にいる僧兵は元々一人の武人である。
この中に不破の名前を知らないものはいなかった。
それは裏世界最強という称号もあるが、それ以上にここでは不破士郎の存在が大きかった。
川神鉄心を除けば自分たちの中で最強であった師範代と互角に渡り合った存在は、ここにいる僧兵達に大きな衝撃を与えた。

そのためその息子がすでに準師範代クラスである百代と戦うと聞き、武人としてぜひ見学をとの声が多かった。
最初は渋った鉄心であったが、恭也は鉄心に恩義を感じていたのでこれを了承。
そもそも恭也からすれば、父である士郎がすでに見せたであろう技以上は扱えないのだから、自分の剣を見られても構わないと考えていた。

「よろしい。それでは・・・西方、川神百代!!」

「ああ!!」

「東方・・・不破恭也!!」

「はい。」

「いざ尋常に・・・はじめいっ!!!!」

「いくぞ!!」

その言葉と同時に百代は一気に間合いを詰めた。
百代は恭也の武器は小太刀二刀流であることは話しを聞いて知っていた。
自分よりわずかでも間合いが長い武器が相手なので、距離を置いて様子を見るより自分の間合いに持ち込み一気に決めることを選んだ。
恭也はこれに対し、迎撃の構えを取った。
一瞬飛針を投げることも考えたが、暗器はここぞというときに使わなければ意味がないから中止した。

百代の武器は生まれながら持った莫大な気と圧倒的な戦闘センスで

ある。
それに対し恭也は気の量は百代ほどではないが、素の身体能力と血の滲むような鍛練による技術、そして相手を観察する能力に長けていた。
元々御神流は守りの剣であるから、相手を倒すことより冷静に敵を確認し対象を守ることを前提としてきた。
そのため相手のわずかな動作さえ見逃すことのないことがこの能力の強みである。
そして不破はこれにさらに殲滅力を加えているが、だからと言って守りをおろそかにするような真似はしない。

「はっ!!」

突き出された百代の拳に対して恭也は、気で強化した小太刀で受け流す。
気の総量で負けている恭也は正面から打ち合えば小太刀が耐えることが出来ないからだ。
恭也は隙をみて反撃をするつもりであったが、百代の攻撃速度は素手ゆえに早く、なかなか反撃をすることが出来ない。

「どうした!!まだ一撃も反撃してないぞ!!」

「・・・・・・・・・」

それでも恭也は焦ることはなかった。
確かに恭也は一度も反撃できていないが、同じように百代もまた一撃も入れることが出来ていない。
そのことには攻めている側の百代も理解していた。
そして、もし気の量が同じならば押されるのは自分の方だということも。

しかし百代もまた、それを理解しつつ冷静だった。
なぜなら戦いとは総合力が高い方が勝つのだとわかっていたから。
ならばたとえ生まれつき気の量が多いといっても、それも一つの強さだ。
そして恭也もそれを理解していたからこそ不公平だと思うことはなかった。
武士にとって戦いとは常に準備不足である。
だからこそ今あるものをどう使うかが大事なのだ。
戦う前から勝敗が決まっている状態にするのは、昔から武士の仕事ではなく軍師の仕事である。

戦いはしばらく百代が攻め恭也が守るという状態で拮抗していた。
そして周りの僧兵達は考える。
自分があの立場ならあれほどの攻撃を捌ききれるか。
戦っているのは自分だとでもいうように汗を流しながら集中して戦いを見続けた。

そしてついに拮抗が崩れた。
恭也が僅かに隙を見せたのだ。
当然その隙を見逃す百代ではなく、恭也に一撃を加える。
その一撃を受けた恭也は数メートル後退させられた。
追撃を加えようとする百代だが、先の一撃に違和感を持っていた。
そしてそれは間違っていなかった。

「やっと距離が開いた。今度はこちらの番だ。」

「なに!?」

確実に一撃を加えたはずなのに、ダメージを全く受けていない恭也

が反撃してきた。
とっさに攻撃を止め、百代は恭也の一撃を気を纏った腕で防御した。
次々と繰り出される恭也の攻撃に百代は見事に対応していた。
しかし百代の動きは先ほどまでに比べて精彩に欠けていた。
気の総量で勝っている自分の一撃を喰らって無傷のはずがないのだから戸惑うのも当然だ。
これには周りで見ていた僧兵達も驚く。

「こりゃ驚いたぁ・・・」

「あの年齢でアレほど精密な気のコントロールが出来るナンテ・・・」

驚いたのは師範代である二人も同じであった。
しかしこの二人の場合、恭也が何をしたのかを理解したからこその驚きであった。

「ふむ・・・わざと隙を見せ攻撃を誘導し、そこに全ての気で防御か。たしかに気の総量で負けておっても体全体に気を纏っている百代よりも一点集中ならばその部分で上回れるからのぉ。」

「総代は驚かないのですね。」

「なんの、ワシも驚いたぞ。どちらかと言えばその度胸の方にじゃがの。」

「たしかに・・・あれで百代のやつが違うところを攻撃してたら終わってたな。」

「恐らく最初の攻防で隙を見せたら必ずそこに攻撃してくることを見切ったのでしょう。あの隙もかなり自然なものでした。」

「しかしおもしれぇなぁアイツ・・・俺もやりたくなってきた。」

「コラー！！そんな禍々しい気を出さナイ！！二人が集中出来ないデショ！！」

「相変わらず優等生だな、ルー。こんなことで乱れる二人かよ・・・まあ俺もこの二人の試合はおもしれぇから大人しくしとくけどよ。」

「わかっておったが相当の鍛錬を積んでおるわい。将来的には必要最小限の気で防御も出来そうじゃな。」

「そうなるとかなり厄介なカウンタータイプの剣士になるな。しかも自分から責めれるってのも余計に厄介だ。常に先手を取られることになる。」

釈迦堂の言う通り、恭也の攻撃に百代は攻めあぐねていた。
普通の剣士は一刀であるため、攻撃の後には隙が出来るが、恭也の場合二刀流であることを最大限活用し百代の反撃を防いでいた。
一度距離を取ろうと大きく下がったが、スピードは恭也の方が早いらしくすぐに距離を詰められた。
恭也が気のコントロールに長けているため、迂闊に隙を見せれば防御の上からダメージを受けかねないことには気付いていた。
というよりすでに何発か防御を抜かれてダメージを受けている。

なぜなら恭也は数発に一度、徹を入れているからだ。
百代はこれを恭也と初めて出会った時に味わったものと同じ感覚で

あることをすぐに理解し、直感のみで徹を避けることにした。
そのため反撃に移りにくいのだ。
傍から見ているものには、なぜ百代が防御できる攻撃を避けているのか理解できなかっただろう。
見ている分には普通の攻撃と判別付かないためである。
だが・・・

「見切った!!」

百代は恭也のわずかな挙動でそれを判別しきった。
初めは直感だけだったが、百代の戦闘センスはずば抜けていたため、戦闘の最中でも成長していったのだ。
百代は完全に徹とそれ以外の攻撃を見切り、恭也の小太刀を掴もうとした。
しかし・・・

「甘い!!」

「攻撃がすり抜けた!?ぐっ!!」

この試合で両者含めて初めて攻撃が入った。
百代の目を仕種から徹を見切られたことを察した恭也は、御神流の基本技である貫を使ったからだ。
貫とはフェイントの一種で相手の防御や見切りをこちらが見切り、攻撃を通す業である。
百代からすれば攻撃がすり抜けた様に見えただろう。
恭也がここまで貫を使わなかったのは、最初の出会いで百代よりも自力で下回っていることを自覚していたからだ。
優れた技は多用しがちになるが、それで見切られては元も子もない。
そのため最大限効果を発揮できる状態までもっていくまで使わなか

ったのだ。

徹まで含んだ一撃を体中に気を纏っているとはいえ受けた百代は思わず苦痛に顔をゆがめる。
当然、恭也はこれ以上ないほどの好機を見逃さず一気に攻める。
百代は今までと違い防御に余裕がなくなる。
完全に優位に立った恭也だが、傍から見ているほど余裕がなかった。

それは今まで多くの武家で手合せをしてきたが、これほど早く徹を見切られたことがなかったからだ。
恐らく貫も多用すれば見切られ、そうなれば必然的に自力で劣る恭也が押し切られるからだ。
だからこそ、このチャンスで一気に決着を付けるため今まで以上に苛烈な攻撃を仕掛けた。

恭也に余裕がないことに百代も気付いていた。
そしてお互いがもうすぐ決着が付くことを予想できた。
そのことに百代は寂しさを覚えていた。
だがそれ以上に、楽しい、終わりたくないという感情が強くなっていた。

百代は同年代で戦える者を知らず、このまま強くなってしまうといつか戦える者がいなくなるのではないかと思っていた。
そしてそれは武道家にとって恐怖でしかない。
今はまだいい、周りに自分より強いものがいるから。
だがそれはいつまでだ?
いつまでも強さを保っていられる者はいない。
あの川神鉄心ですら全盛期に比べれば衰えているのだ。
自分より強い者は、自分は強くなると同時に弱くなっていくのだ。
なら自分はどうすればいい?

今そんな悩みを吹き飛ばす存在がいるのだ。
初めて会った時から強いとわかっていた。
どれほど強いかわからないが強いと確実に言えた。
だから試すように攻撃を加えた。
そして最後の一撃を受けてようやく見つけたと思った。
生涯、自分の好敵手と言える存在を・・・
だから・・・

恭也は初めて百代を見たときに衝撃を受けた。
それは圧倒的な武の才能を感じたからだ。
自分の武は彼女には通じないのではないか、一瞬そう思ってしまった。
そう思ってしまったことを後悔した。
それは今まで自分を鍛えてくれた御神流の人間や父を否定することになる。
それが同じ年齢だったから余計に・・・
だから・・・

「「負けたくない!!」」

極限まで研ぎ澄まされた集中力により、恭也は今までと違う、モノクロの世界に入り込んだ。
そして、今まで以上に自分の体がよく分かるようになった。

百代はこれで決めると意志を持ち、持てる力、持てる技術、持てる気を振り絞った。
百代が放ったのは持てる全ての気を右拳に込めたストレート

川神流奥義“無双正拳突き”

恭也はそれに対抗するために全ての技術をぶつける。
普段なら出来ないがこのモノクロの世界なら行けると感じた恭也は、
足に徹を使い、腕に徹を使い、そしてこの二刀に徹を使った!!
恭也はこのとき知らなかったがこれは

御神流奥義“雷徹”

互いに一気に距離を詰め、拳と小太刀がぶつかり合った瞬間激しい
火花が散った。
その衝撃に結界が耐えきれず吹き飛んだ。
そして・・・

「そこまで!!」

鉄心による終了の合図がなされた。
お互いがぶつかり合い、その場に残ったのは・・・

「くっ!!私の・・・負けか。」

恭也の方であった。
百代は結界がなくなりそのまま道場の壁まで吹き飛んでいた。
もはや百代は気も全て使い切り立つことで精一杯であった。
しかし・・・

「いや・・・俺の・・・負けだ。」

パキン

恭也の言葉とともに小太刀は二刀とも刀身が折れた。
また恭也自身かなり体に無茶をしたため、全身が痛く動ける状態ではなかった。

「この勝負、引き分けじゃ！！」

鉄心の合図と共に、周りから歓声が上がった。

「すごい戦いだった！！」
「これは将来が楽しみだ！！」
「川神院も百代様がいるなら安泰だ！！」
「我々も負けてはいられない！！」
「次は私と勝負をしてくれ！！」

次々と飛び交う讃辞の言葉に恭也は戸惑う。
恭也だけではなく百代も戸惑っていた。
なぜなら百代はあまり僧兵達から好かれていなかったからだ。
あまりに愛され過ぎた才能に他の者が嫉妬してしまうのは仕方がないことだろう。
何十年も必至で修行してきた者が、十やそこらの小娘に追い抜かれていい思いをする者などいない。
また百代自身も強さこそ全てと自分よりも強い者にしか興味がなく、そっけない態度を取っていたことも原因の一つだった。
それが今回の試合で一気に変わった。
絶対に負けたくないという思いは周りに伝わり、そこに一人の武人を見たのだ。
だからこそ僧兵も百代を一人の武人として尊敬し始めた。

この状況に百代も恭也もどうすればいいかわからないと思っていると、鉄心が近づいてきた。

「喝!!!!!こやつらも今の試合で疲れておるじゃろうにそんなに群がるでないわ!!」

鉄心の一喝で周りの僧兵も瞬時に冷静になり、離れていく。

「お主達、良い試合じゃったぞ。」

「ありがとうございます。」

「それより引き分けとはどういうことだ!?」

「それは自分も思いました。」

「ふぉ?」

鉄心としては両者動ける状態ではなかったのだから引き分けで間違いなかった。
なのに二人揃って納得していないとは思わなかったのだ。

「あれはどう考えても私の負けだ。」
「あれはどう考えても自分の負けです。」

「「なに?」」

「お主らは二人そろって何を言っとるんじゃ・・・」

「私は最後全ての気を使いきって吹き飛ばされたんだぞ。私の負けに決まっているじゃないか。」

「自分は全ての気を使いきり、そして己の魂とも言える刀をおられたのです。間違いなく自分の負けでしょう。」

「恭也・・・！！」

「百代・・・！！」

恭也と百代はお互いの言葉に反応し、にらみ合う。
このまま第2ラウンドを始める勢いだ。

「やめんかお主ら！！まったく、何に納得していないと思えば・・・」

「これは大事なことだぞ！！」

「そうです！！」

「なら判定を取り消す！！お主ら二人とも動けなくなったんじゃから二人とも負けじゃ！！」

「「むぅ・・・」」

「二人とも自分と同じ年で実力も拮抗しておる。互いに自分に勝った者がいることを自覚し、これからも鍛錬に励むがいい！！」

「確かに・・・恭也、私の負けだ！！」

「だが俺の負けでもある。」

そう言うと二人揃ってにやりと笑う。

「それでは納得したなら二人とも早く医務室に行くがよい。誰か連れて行ってやってくれ。」

「では私が。」

そうやって一人の僧兵に連れられて、恭也と百代は連れて行かれた。

おまけ

試合が終わり、道場に残った者は四人、鉄心、釈迦堂、ルー、八神だ。

「モモにもついに好敵手（ライバル）が出来たのぉ、ふぉっふぉっふぉ。」

「餓鬼とは思えん試合内容だったぜ・・・まったく末恐ろしいなぁ、おい。」

「あんなに楽しそうな顔のモモヨは久しぶりに見たネ・・・友と切磋琢磨することはいいことだネ。」

「さすが士郎の子供だけありましたね。」

「そう言えば、十年前に不破士郎と戦ったのはお主じゃったな。」

「ええ、その時の結果も引き分けでしたが・・・実際は私の完敗です。私が持てる全てを出したのに対して彼は奥義の一つも使いませんでしたし。」

「で、その後に俺にも負けて師範代からも降格したしな。」

「コラー！！そんなこと言っちゃ駄目ダヨ！！」

「お主もその時は満身創痍じゃったろうに・・・」

「わかってるよ、ちょっとからかっただけだ。」

「いいんですよ。事実ですから。」

「それにしても、これからの若い世代が楽しみになってきたのぉ。」

「言ってくれるぜ。それを相手するのは引退した爺じゃなくて俺たちだっての。」

「怖いのかい釈迦堂？」

「まさか！！むしろ嬉しくてたまんねぇよ！！」

「我々ももっと鍛錬を積まないとネ！！」

「うむ、全員今の地位に満足せず切磋琢磨するがいい！！」

外伝１　恭也ＶＳ百代（後書き）

ちなみにワン子はこの試合をまだ早いと見せてもらえず拗ねています。
最近評価が上がってきたみたいで嬉しいです。
よかったらこれからも恭也・ｉｎ川神を応援してください。

外伝2　仲間は家族　前編（前書き）

今回は前編です。

外伝2　仲間は家族　前編

これは京が風間ファミリーに入ってから一週間が過ぎたころの話。
二十人くらいの少年グループが公園で円になって話し合いをしていた。

「おい、前言ってたようにあの淫売の娘が風間のグループに入ったってのは本当か？」

「そうみたいだよトニー君。あいつらと仲良く遊んでるの見たもん。」

「ちっ！！夏休みだと思って油断したぜ。どうやら虐めが足りなかったようだな・・・」

「どうするのトニー君？」

「丁度いい。前に風間達に負けてあの原っぱを正式に譲るはめになったが・・・これで攻める口実が出来た。」

そういいながらトニーはにやりと笑う。
しかしトニーの態度と違い、周りの少年たちはぶるぶる震えている。

「無理だよぉ・・・あっちには川神百代がいるんだよ・・・」

「俺前に見たぜ！！猫虐めてた高校生がぶっ飛ばされてた！！」

「僕なんておばあちゃんに絡んでたヤクザが土下座させてるシーン見た！！」

この辺りに住んでいる者ならば川神百代の名前を知らない者はいない。
そのため例え小学校で権力を持っていようと、圧倒的な力の前では無意味であった。

「確かに正面から戦えば勝てないだろう、だが頭を使えば何とかなるかもしれないぜ。」

「本当!?」

「ああ、これから俺達の頭脳となるやつを紹介する。葵!!こっちに来い。」

「やれやれ、母親同士が仲の良いのもいいことばかりではありませんね・・・」

「そういうなよ若。まあ確かにわざわざ喧嘩のために隣町まで来させられるのは勘弁だが・・・」

公園の入り口から現れたのは少し肌の黒いメガネを掛けた美形の少年と、ロン毛の少年だった。
美形の少年は葵冬馬、ロン毛の少年は井上準という。
葵紋病院という川神最大の病院の院長と副院長の息子だ。

「こいつは葵冬馬といって隣の学校のやつだが、全国模試で1位も取るくらい頭がいいから俺の傘下に加えた・・・」

「アナタの子分になった覚えはありませんが。」

「おいテメェ、若を子分扱いとか舐めてんのか!!ああ!!」

「わ、わりぃ・・・助っ人として呼んだんだ。」

トニーは井上の雰囲気に押され言い直す。

「それでワタシは何をしたらいいのですか?」

「おう、それはな・・・」

トニーは冬馬に現状について話した。

「なるほど・・・その川神百代をなんとかしたらいいのですね。」

「ああ、そういうことだ。」

「おいおい、流石に若でも無理だろ。聞いた話じゃガキの俺達でどうにかできるようなやつじゃねえぞ。」

「そうでもありませんよ準。」

「何!?なにか思いついたのか!!」

「ええ、と言っても必勝ではありませんが・・・川神百代対策だけなら問題ありません。まあ、その後はアナタたち次第ですが・・・」

その言葉に周りの少年たちから、おお・・・という感嘆の声がこぼれた。

絶対的覇者である川神百代を抑えることが出来ると聞き、気持ちも上がってきた。

「それでいい、どうするんだ?」

「そうですね・・・まず・・・・」

風間ファミリーは今日もいつもの空き地で遊んでいた。

「いくぜ!!ここで俺様がシュートを決めてカズダンスを踊る!!」

「ふ、足もとがガラ空きだ。」

「大和!!俺様のチャージ中にボールを奪うな!!」

「やまとー、こっちこっち!!」

「ほいワン子。」

「甘いなぁ、カットだ。ほらモロロ、いけ!!」

「モモ先輩もね。」

「なにぃ!?京か!!」

「シュート!!」

「俺が居る限りゴールはさせないぜ！！」

「止められちゃった。」

「いっけぇー！！」

「ナイスパス。でもぼくじゃシュートしても決まらないし誰か・・・ガクト。」

「任せろ！！オリャー！！」

「ガクトは目線でシュート先がわかりやすいな。ここだ！！」

「そんなんで止めれるのは恭也かモモ先輩くらいだぜ。」

「慣れればガクトでもすぐ出来るようになるさ。」

京が入ったことにより人数も8人となり、遊びの幅も広がった。
そのため今回は4対4で別れてサッカーをしていた。
恭也も百代も気さえ抑えればいい勝負ができた。
そのように遊んでいると予期せぬ闖入者が現れた。

「おい、お前ら！！」

「なんだぁ・・・ってあいつトニーじゃねえか！！」

「何の用だ？以前の喧嘩でここには手を出さない条約が結ばれたはずだが・・・」

「後ろにもぞろぞろと、これはあれだな・・・喧嘩する気満々じゃ

ないか！！」

「そうなると俺様の出番だな！！」

「わわ、まだ僕たち避難してないよ！！」

「いいわ、修行の成果を見せてやるんだから！！」

「あれがトニーか・・・京、大丈夫か？」

「恭也・・・ん、今はみんなもいるし大丈夫。」

トニーは原っぱの入口からキャップに近づいてきた。

「何の用だ？」

「風間、そこの淫売の娘を仲間にしたそうだな。」

「おいテメェ、それが京のことを言ってるんならぶっ飛ばすぞ！！」

「黙れ島津！！今はお前たちのリーダーと話してんだよ！！」

「ガクト。」

「チッ！！」

そうしてキャップはトニーと向き合う。

「それで、仮にそれが京のことを言っているんならそれがどうした。
こいつはもう俺達の仲間だぜ。二度と淫売の娘とか言うな。」

「お前・・・こいつの親が何したのか知ってるのか・・・」

「俺たち全員知ってるぜ。だけどそんなの関係ねぇなぁ。親は親、子供は子供だろ!!」

「ふざけんな!!俺からすればそんなの通用しねぇんだよ!!許せるか!!」

「俺からすれば京虐めの主犯であるお前の方がよっぽど許せないぜ!!」

「ふん!!前からお前らは気に食わなかったんだ!!こいつを仲間だなんて言うなら丁度いい、お前らを完膚なきまでにぶっ飛ばしてやるよ。」

「それは宣戦布告ってことでいいんだな・・・」

「もちろん!!時と場所は今日、ここでだ!!」

「いいぜ、かかってこいよ!!」

「まあ、ちょっと待ってくださいよ・・・」

「なんだぁお前は?」

「ワタシは葵冬馬、今日はトニー君が喧嘩をすると聞いて審判として着いてきましいた。以後よろしく。」

「ああ!!」

「それではルールを決めたいと思います。さすがに子供の喧嘩、やり過ぎてはいけないのでね。」

「キャップ、ちょっと待った。」

「どうした大和？」

大和は風間の肩に手を乗せて引きとめた。
そして相手に聞こえないように小声で話しかけた。

「今の流れは不味い。審判として来たと言うがアイツはどう考えてもあっち側だ。しかも恐らく準備もしてきたに違いない。じゃなきゃいきなりルールの提示なんて出来るわけないしな。」

「そうは言うがよぉ・・・ガクトやワン子なんて京を馬鹿にされて切れてるぜ。モモ先輩もうずうずしてるし・・・恭也なんて無表情で・・・怖ぇ。」

「確かに・・・これで別の日にしようって言っても無駄になりそうだな。なら俺と代わってくれ。」

「ああ、任せたぜ軍師！！」

「相談は終わりましたか？」

「ああ、ここからは俺が交渉の場に立つ。それじゃあルールを聞かせてもらおうか。」

「おやおや・・・アナタは？」

「直江大和だ。このファミリーで軍師の役割を担っている。」

（これは・・・一筋縄ではいかなさそうですねぇ）

（若、楽しそうだな・・・）

「そうですか、それではルールを説明します。どうやらお互いに一度争わなければ気が済まないようなので。」

「ああ、これで賭け事やスポーツで勝負なんてお互い納得できるわけないからな。」

「それはモチロン。勝負は1対1の総当たり戦です。」

「1対1・・・だと？」

「ええ、なにか不満ですか？」

「当たり前だ。こっちには女子がいるんだぞ。こちらは全員参加の戦争か勝ち抜き戦を所望する。」

「女子・・・ねぇ。それなら余計に戦争は駄目ですね。でも勝ち抜き戦は認められない。」

「なぜだ。」

「そこにいる川神百代は大人でも勝てないのでしょう。そんなのが出てきての勝ち抜き戦なんてもはや子供の喧嘩といえないでしょう？」

「くっ！！」

「もしそれに彼女を使って全滅させても周りからは虎の威を借る狐と言われるだけですよ。それはアナタ方から見てもあまりよろしくないのでは？」

「・・・わかった・・・総当たり戦でいい。」

「ありがとうございます。さて、それではそちらは８人みたいですしお互いの大将は２ポイントと言うことにしましょうか。それでポイントの多い方が勝ち、どうですか？」

トニーはガクト並みに体格が良く、空手もやっていることは有名だ。キャップは喧嘩もそこそこ強いが、トニーに勝てるかと言われれば難しい。

「その提案は認めない、そっちが用意した審判だけじゃ納得できないからな。俺も審判の一人として参加することを提案する。」

そのため大和はキャップＶＳトニーのことではなく審判のことから切り込み、ポイント調整を行った。
その言葉に冬馬は考える。
そして風間ファミリーの面々を見て、確実な脅威は川神百代と島津岳人の二人だろうと判断した。
もともと川神百代を抑えれば自分の役目は果たしたのだしこれくらい受けてもいいかと考えた。

「ではその提案を受け入れましょう。では７本勝負の４本先取ということでいいですね？」

「ああ。」

「聞きましたね皆さん!!それでは互いのチームは準備をしてください。ちなみに大和君は審判なのでこちらです。」

「わかった。みんな聞いた通りだ。あとは頼む。」

本当は指示を出したかったが冬馬に先手を取られ連れて行かれる。

「ああ、任せておけ!!公平なジャッジ頼むぜ!!」

「任せておけ!!まあこと戦いの審判なら姉さんがいる限り不正なんて出来ないだろうけどな。」

「もちろん不正なんてしませんよ。あとが怖いですからね。」

「それじゃあ両チームが準備出来るのを待つか。」

外伝２　仲間は家族　前編（後書き）

恭也がいるために原作より早く風間ファミリーに京が入りました。
今回はその影響で冬馬が出てきた・・・ということにしてください。
この展開はちょっと無理があるかもって自分でも思ったりしてます。
ちなみにハゲはまだハゲではありません。

外伝3　仲間は家族　後編（前書き）

後編です。
なぜ自分は原作でも名前が一回出ただけのトニー君をこんなに推しているのでしょうか？だれか教えてください・・・

外伝3　仲間は家族　後編

両チーム準備が出来たことを確認した大和と冬馬は、審判として中心に立った。

「それでは準備はいいですね。」

「最終確認だ。この戦いでは金的、目潰しは当然禁止。相手が参ったと言った瞬間に終了。それ以上攻撃するようなことがあれば姉さんが乱入するからな。」

「また、私たちの目から見てもう駄目だと思えば終了です。たとえ喧嘩といってもやり過ぎはいけません。いいですね。」

「ああ!!」

「わかっている!!」

「では一回戦に戦う人は前へ。」

「はい!!よーし修行の成果を見せるわよ!!」

風間ファミリーから出てきたのはワン子だった。

「女の子が相手かよ・・・流石に気が進まないぜ。」

一方トニー側からはがっちりとした少年であった。

少年は近くの剣道道場に通っており、この年齢では強い方であった。

「それでは・・・はじめ!!」

「やあ!!」

合図とともに飛び出すワン子に百代は呆れた声を出す。

「ワン子・・・そうじゃないだろ」

とはいえワン子は修行を始めたばかりであり、基礎訓練しかやってこなかった。

当然、何年も剣道をやってきた少年には敵わず・・・

「ぎゃ!!キュー・・・」

「それまで!!勝者吉川!!」

「ちょっと結果を出すのが早くないですか?」

「ワン子にあれ以上は無理だ。」

「そうですか・・・まあアナタのチームが負けたのですから私から言えることは何もないのですが。」

「ワン子、大丈夫か!?」

「ううぅ、何も出来ずに負けちゃった・・・」

「まだ基礎ばかりで何も教えてもらってないんだから当たり前だ。」

「まあ、相手は精鋭を集めてきたみたいだしね。仕方ないよ。」

「モロ、わかってるな。」

「うん・・・情けないけど仕方ないよね。行ってくるよ。」

「二回戦、前へ！！」

「なんだぁ、俺の相手はこのモヤシか。」

「それでは、はじめ！！」

「まいった。」

モロは開始と同時に言い放った。
その宣言に相手は拍子抜けした顔になるが、すぐに納得して帰って行った。

「まあ、あれは仕方ないですね。しかしこれで2敗、いいんですか？」

「あの二人は仕方ない。ここからが本番だ。」

「へぇ・・・それは楽しみです。」

「それじゃあ三回戦・・・・」

三回戦、四回戦はそれぞれ百代と京が出てきてこれを撃破。
当然のごとく百代の相手はすぐに参ったと言った。
京の対戦相手は京のことを散々バカにしながら近づいてきたが、一瞬で地面に叩きつけられ気絶した。

どうやら京の強さを知らず、ガリガリの見た目だけで判断したようだ。

正直、大和はこの勝負にすでに負けはないと思っていた。
なぜなら最初の交渉の段階で大将を2ポイントにしなかった時点で勝ちは決まっていたのだ。
大和の計算ではトニーにキャップは勝てない。
しかし、京、ガクト、百代、恭也がいるのだから4ポイントは確定したも同然だった。
ならば大将戦まで持ち込むことなく勝つことが出来ると踏んだのだ。

しかし・・・

「ガクト!?」

波乱が起きたのは五回戦だった。
ガクトの相手はモロ並みにひょろっとした少年だった。
当然、ガクトは弱い者虐めが嫌だったので降伏を促した。
しかし首を縦に振らなかったので、仕方なく無造作に近づき気絶させようとした。
そんなガクトに百代や恭也から声がかかったが、見た目から自分が負ける筈がないと油断した。
そして・・・

「あれはもう無理だ。完全に関節が決まっている。」

「ああ、なかなか見事な関節技だ。おそらくかなり高名な柔術家に教えを受けているのだろう。」

「ガクトー、もういいギブアップしろ!!」

恭也の言う通り、世界でも有名な柔術家、渋川の家の一人息子だった。
完全に関節を決められたガクトは苦しそうな顔をする。

「周りの言うとおりギブアップするんだ。これは力でどうにかなるものじゃない。これ以上すると骨が折れるよ。」

「だまれ!!誰が・・・ギブアップなんて・・・するかよ!!」

「本当に腕が折れるぞ!!大の大人でも苦しい筈なのになんでそこまで・・・」

「仲間を・・・馬鹿にしたやつを・・・絶対に許せるかぁ!!クソォ、外れねぇ!!」

「ガクトー!!もういいよ!!私のことはいいから・・・だからギブアップして!!」

「いいわけあるか!!俺は今までお前を虐めてた側なんだ・・・ならせめてここで勝って、こいつらにお前の存在を認めさせてやる!!」

「そんなのいいの!!仲間のみんなが認めてくれるならいいから!!これ以上は本当に折れちゃう!!」

「彼女の言う通りだ!!もう諦めろ!!」

「ぐっ!!がっ!!へっ、誰が諦めるかよ!!うおおおぉぉぉ!!!!」

ガクトが叫んだ瞬間、渋川の関節技が外れる。
だが・・・

「勝者、渋川君。」

「なんだと!!おいテメェ、ふざけんなよ!!」

「ガクト、今の判定は間違っていない。お前の負けだ。」

「大和まで・・・俺様はまだ戦える!!」

「あれ以上やっていたら間違いなくお前の腕が折れていた。渋川はそれを察知して腕を離したんだ。」

「そのとおりです。もともと私がここにいるのはやり過ぎないようにするため・・・ならば今の判定に間違いはありませんよ。」

「くっ!!だが・・・」

「やめておけガクト。」

「そうだな。」

「キャップ・・・恭也・・・」

「お前の思い、しかと受け取った。」

「ああ、後は俺達に任せておけ!!」

「くっ、すまねぇ・・・」

「ガクト、こっちに来い。私が手当てをしてやる。」

「モモ先輩・・・」

「ガクト・・・私のせいでごめんね・・・ありがとう・・・」

「京・・・」

「後は二人に任せよう。」

「そうよ!!この二人なら大丈夫よ!!」

「モロ・・・ワン子・・・」

「誰もお前のことを責めたりしない。ちゃんと傷を治すんだ。」

「それともお前は俺達が信用出来ないか!?」

「わりぃ・・・後は任せたわ・・・」

「「ああ!!」」

ガクトは後ろに下がり、そして代わりに恭也が前に出た。
そして対戦相手も出てきたが、相手は笑っていた。

「さっきのやつ超だせぇ、あんなガタイしてるくせにさぁ。だいたいあんな淫売を仲間とか言う時点で頭おかしいんじゃね?ああそうか、お前らみんなあいつとヤッてるのか。そんで感染しちゃったん

だ、あっはっは！！」

「・・・黙れ、仲間を侮辱する者は許さん。そこまで言ったのであれば覚悟はいいな。」

「あ、何やんの？俺言っとくけど超つえーよ。ボクシングで全国大会も出てるしな！！」

「そんなもの関係ない。」

「それでは・・・はじめ！！」

「行くぜ・・・おりゃーぎゃあぁぁぁぁ！！！！」

恭也の相手は華麗なステップを刻んだかと思えば先制パンチを放った、がその瞬間には吹き飛ばされた。
傍目から見れば何をされたのかわからない。
なのに相手は悲鳴を上げ、尻餅をついた。
怪我の様子もないため審判も止めることはなかった。

「さて覚悟はいいな。」

「なんだよお前、俺の体に何したんだよ！？」

「人体のツボを押した・・・もうお前は動けない。そしてこのツボを押すと・・・」

「なんだ！？痛い・・・痛いよぉ！！！！！」

「激痛が走る。」

「たす・・・助けて!!」

「心配するな。後遺症などは残らん。それに審判・・・彼は怪我ひとつしていないのだから当然止める権利などないぞ。」

「まあ・・・そうですね。それに後遺症も残らないのなら・・・」

「そんな!!そ、そうだ!!まいっ・・・」

「参ったなどと言うなよ。もし言えば二度とその激痛は治らんと思え。」

「な、ならどうすれば!?」

「先ほど仲間を侮辱した言葉を取り消し、謝罪しろ。何も悪くない京に、仲間のためにあれだけ体を張れるガクトに心から謝るんだ。」

「わかっ、わかったから!!ごめん!!すみません!!僕が悪かったです!!二度と馬鹿になんかしません!!だから許してください!!」

「どうする?」

恭也の問いに京は素直に謝罪を受け入れ、ガクトはにやりと笑うと

「俺様は仲間を馬鹿にされて許せないなぁ・・・」

「だそうだ。というわけで痛みを倍にするツボを押そう。」

「そんな！！ち、近づくなぁ！！」

「・・・・・・・・・・」

「そこまで、彼は気絶してしまったのであなたの勝ちです。っとこれは不味いですね。」

恭也の相手は失禁していた。

「これでこいつの弱みを握ったな。もう二度と京には近づかないだろう。ところで恭也、相手のツボを押して治さなくていいのか？」

「これは数分もしたら痛みも消える。ちなみに痛みを倍にするツボなんて存在しない。」

「さすが・・・」

大和は恭也だけは絶対に怒らせないようにしようと決意した。
恭也は仲間たちのところに戻った。

「恭也・・・」

「すまない・・・怖がらせたか？」

「ううん、私たちの為に怒ってくれたのがよくわかったから大丈夫。」

「そうか・・・とにかくこれで3対3になったな。」

「キャップ、俺様のせいでしんどい思いさせちまうな・・・」

「ガクトのせいだけじゃないって・・・僕なんて戦うことすらしなかった・・・」

「アタシも負けちゃったし・・・」

「何言ってんだ!!むしろこんな見せ場まで作られて最高にテンションが上がってきたところだぜ!!」

「キャップ、確かに相手はお前より強い・・・だが、お前はみんなのヒーローなんだろ。」

「おうよ!!モモ先輩、仲間がこんなに頑張ってくれたんだ!!なら、俺がやらなきゃ誰がやるんだってんだ!!」

「ごめんね・・・わたしのせいで・・・」

「京のせいじゃないさ。遅かれ早かれあいつらとは決着をつけなきゃいけなかったんだ。なにより仲間のためになら俺達はなんだってやってやるぜ!!」

「キャップ・・・勝てるな。」

「恭也、仲間のために怒った姿は最高にイカしてたぜ!!さてっと、んじゃいっちょ行ってくるわ!!」

そう言ってキャップは前に出た。
相手のトニーもまた前に出てきた。
その時ふいにトニーが冬馬に声をかけた。

「葵・・・」

「・・・なんですか？」

「こんなことに巻きこんで悪かったな・・・」

その言葉に冬馬は呆気に取られた顔をした。
まさか彼からそんな言葉を聞けるとは思わなかったからだ。
そして自然に笑顔がこぼれた。

「いえいえ、案外楽しかったですよ。頑張ってください。」

「ああ。」

トニーと冬馬が話している間、大和もキャップと話していた。

「キャップ・・・すまない。」

「なに謝ってんだ？」

「本来はこの戦いまでに決着をつけるつもりだったんだ。戦う前に勝つ、それが俺の役目だったのに・・・」

「なんだそれ、なら問題ねぇじゃん。」

「は？」

「俺が勝つ!!それでお前の策は成功だ!!」

「っ!!ああ、頼んだ!!」

そして二人はにらみ合う。

「結局こうなったか。」

「ああ、俺とお前で決着だ。そして、負けても恨みっこなしだぜ!!」

「分かっている。俺が勝てばこの原っぱは俺達のものだ。」

「これで最後だぜ!!んで俺達が勝てば京の虐めを止めさせろ!!お前なら出来るんだろ。」

「ふん、お前が俺に勝てると思えんがいいだろう。完全には無理だが出来る限りはしてやる。」

「約束だぜ!!」

「約束は破らん!!そんなことをすれば武士の名折れだ!!」

「それでは・・・両者準備出来ましたね?」

「「ああ!!」」

「それでは・・・はじめ！！」

「「うおおおおおおおおおおぉぉぉぉ！！！！！！！」」

お互い雄叫びを上げながら拳を握り相手に振りかぶる。
そして一歩も引かぬという思いを掲げぶつかり合う。

「ぐあっ！！」

そして両者の拳が入り、吹き飛ばされたのはキャップの方であった。

その様子を見ていた冬馬は当たり前だと思う。
二人を見ると体格でトニーの方が上であり、さらにトニーは空手を幼い頃からやっているのだ。
いかに運動神経がいいであろう風間でも、トニーと真正面から戦えばこうなることはわかっていた。
だからこそ、直江大和の策にも乗ったのだ。
まさか椎名京や不破恭也があれほどの強者だとは思わなかったが、それは渋川が島津岳人に勝つという予想外の展開で逆転できた。
だからこそ、偶然とはいえ自分は相手の軍師と名乗る少年に勝ったと思った。
だというのに・・・

「なあ、葵冬馬。」

「なんですか、直江大和君？」

「賭けをしないか？」

「賭け？」

「俺にとってこの展開は予想外だ。つまり俺は軍師としてお前に負けたことになる。だからこそ負けたままではいられない。」

その言葉を聞いて思わず笑みを浮かべてしまった。
所詮偶然で勝てただけなのに、それで満足してしまった自分がいたことに気付いたからだ。
だからこそ、今度こそ完全に勝ちたいと思った。

「ふふ、負けず嫌いなんですね。でも・・・そういうのは嫌いじゃありません。なにより実はこの展開は私にとっても予想外だったので丁度いい。本当はここまで来る前に決着していた筈だったんですよ。」

「俺もだ。気が合うな。」

そういうと二人はにやりと笑う。

「それで、どのような賭けをするんですか?」

「簡単だ。キャップとトニー、どっちが勝つか賭ける。」

「いいでしょう・・・と言いたいですがそれでは賭けになりませんよ?」

「なぜだ?」

「どちらも同じ方に賭けるでしょう?ちなみに私が賭けるとしたら当然トニー君ですが・・・」

「なら問題ない。俺はキャップに賭ける。」

「なんですって？」

「これで賭けは成立だ。」

「ちょっと待ってください！！・・・本気ですか？」

「当たり前だ。」

「一体なぜ？どう考えても勝つのは体格もよく、武道をやってきたトニー君でしょう。」

そして冬馬がふと様子を見ると、すでに満身創痍の風間がいた。相手のトニーもかなりダメージを受けているが、それは風間に比べるとまだマシであった。

「まあ普通はそうだな。だけどさ、俺達のキャップはここぞというときに負けたことはないんだ！！」

「馬鹿な・・・あの様子を見なさい。すでに決着が着こうとしている。」

「それでも俺は最後までキャップを信じるぜ。」

「そんな・・・そんな無条件な信頼・・・ありえるわけがない。どんなに綺麗に見える人間でも・・・人間とは汚いものなのに・・・あの父でさえ・・・」

「人を信じるのは難しい・・・だけどさ、きっと仲間を信じるのは

そんなに難しいことじゃないぜ・・・」

「そんな・・・そんなこと・・・」

「まあいい、賭けは成立した。後は審判として二人を見ておこうぜ。」

そして大和はキャップを見る。
その目には絶対の信頼を籠めて・・・

トニーは思う、なぜここまで戦えるのかと。
すでに風間は満身創痍だ。
伊達や酔狂で空手をやってきたわけではないからわかる。
普通なら倒れていても何もおかしくないのだ。
なのに倒れない。
そういえば、先ほど島津も最後まで諦めなかったこと思いだした。
近づいてきた風間を再び殴り、そして立ち上がった風間を見て叫ぶ。

「なぜだ!?なぜお前たちは諦めないんだ!?あんな淫売の娘のために!!」

「・・・なぜだって?そんなの・・・決まってるだろうが!!」

そう言って風間は再度走ってくる。
そのスピードはどこにそんな力があるのかと思うほど速く、今度は自分が吹き飛ばされた。

「ぐわ！！」

「仲間だから、家族だからだよ！！それに淫売の娘って親のことは京には関係ねぇだろが！！親は親で子供は子供！！苦しんでる家族がいたら命を賭けて助ける！！間違ったことをした家族がいたら殴ってでも正してやる！！それが本当の家族だ！！」

そのまま風間が近づいてくるので体勢を整えようと立ち上がる。
その瞬間、自分の足がふらつくことを自覚した。
これはまずい！！

「それにここで俺が負けるとよ、色々なもんが駄目になるんだよ！！仲間の信頼！！仲間の名誉！！仲間の誇り！！」

「ぐっ！！」

今度は腹に風間の拳が入り、空気が外にこぼれた。

「だったら・・・だったら負けられねぇだろうが！！」

そして風間の飛び蹴りが自分に向かってくる。
それがスローモーションで見えるが体は動いてくれない。

「ああ・・・俺の負けか・・・」

「そして・・・俺の勝ちだ！！」

風間の飛び蹴りがトニーの体に突き刺さり吹き飛ばされ、動かなくなる。
それを見た冬馬は空を仰ぎ、自分の負けを悟る。

そして・・・

「勝者・・・キャップ！！」

審判である大和の勝利宣言が原っぱに響いた。

「今まですまなかった。」

「ううん・・・元々悪いのは私の母親だから・・・」

トニーは頭を下げ京に謝った。

これにより、一気に京を虐めようとするものは減ることになる。

またこの勝負以降、風間ファミリーとトニーに確執はなくなり、たまに一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。

そのままトニーは自分の子分たちを引き連れて帰って行った。

そしてその場に残ったのは・・・

「葵冬馬、賭けは俺の勝ちだな。」

「ええ、私の負けです。でも、負けたのにずいぶんとすっきりした気分なんです。」

「お前が何を背負っていたのかは知らないけど・・・」

「何も言わないでください。間違ったことをしたら殴ってでも正すのが本当の家族ですか・・・本当に、そのとおりですね。」

「若・・・」

「行きましょう、準。私にも出来ることがありました。」

「ああ・・・どこまでも着いていくぜ。なんたって俺は本当の家族だからな!!」

「ありがとう・・・それでは大和君、またいつか会いましょう。ただし、今度は負けませんから。」

「ああ、楽しみにしている。」

そして冬馬達も原っぱから去っていった。

おまけ

「すげぇやつらだったな。」

「ええ、本当にうらやましい。私も彼らの様になれるでしょうか?」

「さあな・・・でも俺達が前に思ってたような立派な人間にでもな

ればなれるんじゃねえかな。」

「そういえばそんなことを言っていましたね、私たち。ふふふ、やりがいがありますね。」

「ところで、さっきから後ろをついてくるこの子はなんなんだろうなぁ・・・」

「おやおや、気付きませんでした。こんにちはお嬢さん、私達に何かようですか？」

「あ・・・その・・・ましゅまろ・・・」

「マシュマロ？」

「マシュマロですか・・・そういえば食べたことありませんでしたね。もしかしてくれるのですか？」

「う・・・うん・・・」

「ありがとうございます。美味しいですね。」

「それで・・・その・・・」

「そう言えば準、私は友達が少ないんですよ。どこかに私の友達になってくれる子はいないでしょうか？」

「そうだよなぁ・・・若はマシュマロが好きだから出来ればマシュマロ好きなやつがいいもんなぁ。」

「っ!!ぼく!!ぼくまだマシュマロ持ってるよ!!友達になってくれるならあげる!!」

「おお、本当ですか?それならぜひ友達になってください。」

「うん、いいよ!!じゃあはいマシュマロ・・・あっ!!どうしようあと一つしかない・・・」

「あ~、なら俺はいいから若にあげてくれ。」

「でもぉ・・・・」

「それでは・・・はい、これで3つになりました。これを3人で食べましょう。」

冬馬はひとつのマシュマロを3等分して二人に渡した。

「ところでお嬢さん、お名前はなんというのですか?」

「あっ!!ぼくは・・・ぼくのなまえは!!」

この後、葵紋病院は内部からの告発により壮大なスキャンダルとともに閉鎖した。

外伝3　仲間は家族　後編（後書き）

というわけでリュウゼツランフラグが折れてしまいました。
最初は結構好きだから折るつもりはなかったのですが・・・どうしてこうなったのでしょうか?そしてさらに、この話は最初ネタで書こうと思ったのに、こんなシリアスになってしまった。自分にはネタ話が書けないのでしょうか・・・?

とにかくこれで外伝はひとまず終了です。もしこんな話しがあったら面白いなどというアイデアがあれば時間がある時にでも取り入れたいので募集したいと思います。
ではここまで読んでいただきありがとうございました。

川神学園入学前（前書き）

これを書いてて時々思うのですけど・・・もしかしてまじこいをやっている人ととらハをやっている人って年代が違うのですかね？
作者はかなり遅れてとらハをやったから両方知っているのですが・・・恭也が出る３で１１年前、１に至っては１３年前の作品ですし。
ちなみに作者もリリなのを全部見てからやりました。

川神学園入学前

２００７年　４月
川神学園

「以上で入学式を終える！！各クラス担任の指示に従い速やかに行動するように！！」

鉄心の一言により体育館から生徒が担任に連れられて外に出ていく。
そして生徒がいなくなってもそこに残り続ける者がいた。

「こりゃモモ！！もうお主のクラスは戻ったぞ、早く戻らんかい！！」

「そんなことはどうでもいい・・・なぜ恭也はここにいない！？入試のときは確かにいただろう！！」

「なんじゃ・・・何も聞いておらんのか？」

そういうと鉄心は顔を伏せる。
その顔は何か重要なことを告げるものであった。

「何がだ！？」

「あやつ・・・試験に・・・落ちたんじゃよ・・・」

「なん・・・だと・・・ワタシでも受かったのに・・・それは本当か！？」

「嘘じゃ。」

「・・・・・コロスゾジジイ!!」

「ちょっ!?じじいのお茶目なジョークにそこまで本気になるでない!!」

「・・・で、実際は?1秒以内に答えないと・・・」

「ギリギリ受かったが家庭の事情で1年間休学したんじゃよ。」

「休学?それに家庭の事情だと・・・?」

「ほれ、あやつのところはちょっと特殊だからのぉ。というわけで不破は来年から1年生スタートじゃ。」

「なにぃ!?キャップ達に確認取ってくる!!」

「行かせるか!!お主はまずHR行ってこい!!川神流、蠍打ち!!」

「くっ!!流石だ・・・だがこれでどうだ!!川神流、無双正拳突き!!」

「甘いわ!!」

「コラー!!二人ともこんな場所で暴れちゃ駄目デショ!!それとモモヨ、どうせ風間達も中学校で授業中なんだから今行っても意味ないヨ!!」

この光景を初めて見た生徒は、川神百代にだけは決闘を申し込まないことを心から決めた。
そして同時にその凛々しさと美しさからファンクラブが出来た。
その男女比率は４対６で女子の方が多かったという。

川神市の一角に多摩川のすぐ近くに１つの廃ビルがある。
割と近代的なビルだが業者が入った瞬間にバブルが弾け景気は低迷、業者は倒産、あっという間に廃ビルになった。
そこに目を付けたのが埋め立てられた原っぱの代わりに新しい秘密基地を探していた風間ファミリーだった。
ビルの所有者は福岡にいるお金持ちだが、長く放置されていてもはや興味がない。
だが管理は必要なので廃ビル管理でごくマレにある“近所の人に管理させるシステム”
不審者がいないか点検、たまにビルの掃除をするなどをするかわりに秘密基地として利用させてもらっていた。
このビルの五階が現在の風間ファミリーの秘密基地として使われている。

「よし、全員そろったな！！それじゃあ金曜集会始めるぜ。」

金曜集会とは親の離婚がきっかけで静岡に引っ越してしまった京の為に、毎週金曜日は全員で集まろうという企画だ。
京の父親も京に申し訳ないという思いがあり、これを認めている。
この期間は京も川神院に下宿しており、そこで一緒に修行を受けている。
ちなみに恭也は流石に遠いためこれには参加していないが、長期休

みの半分は毎年川神院で修行をすることを条件に川神まで行かせてもらっている。

「それにしても、入学式が金曜日でよかったね。これで京も参加出来る。」

「うん。それでキャップ、今日の議題は？」

「ちょっと待って、まだ恭也がいないわよ？今年から川神学園に入学してるはずじゃないの？」

「あ～ワン子、私も今日聞いたんだが・・・受験して受かったらしいが家庭の事情で1年休学するらしい・・・」

「は？」

「そのことについては俺から説明するぜ！！」

そうしてみんなキャップの話に耳を傾けた。
受験を終えた恭也は、その後すぐに御神流の免許皆伝の儀を受けこれに合格した。
そして免許皆伝した者はその後、御神流の掟により1年の修行の旅に出なければいけない。
これは己の修行のためと同時に護衛の顧客を得る旅でもあるらしい。

御神流は守るべき者かどうかを自らの目で見て判断する。
一昔前までは日本国内だけだったらしいが、最近の日本に守るべき者が少ないらしく今では世界中の要人の護衛をしているらしい。
そのため恭也も先日から日本中を旅し、そしてその後は世界に飛び出すようだ。

「なんだよぉ、いいないいな。私も休学して世界中を旅したいぞ！！」

「というかキャップだけに言ってたんだ。」

「ああそれ昨日電話があってさ、忙しいみたいだし俺からみんなに言っておくって言ったんだよ。」

「なんだかんだでキャップが一番連絡取り合ってるもんね。」

「だから今年は川神に来れないらしい。みんなにすまないと伝えてくれってさ。」

「そっか、今年一年は恭也に会えないんだ・・・寂しいなぁ・・・」

「京・・・でも来年俺達と一緒の学年になるんだよな。」

「お、確かにそういうことだな。そりゃあ楽しみだぜ！！」

「それに僕たちも今年は受験だしそこまで遊べないんだからこの時期の方がまだマシだよ。」

「ということは・・・」

全員が一斉に百代の方に向いた。

「よし決めた。私も旅に出るから1年休学するぞ！！私だけ仲間外れなんて嫌だ！！」

「ええ～お姉さま行っちゃうの！？そんなのやだよ～！！」

「というかあのじいさんが絶対に許してくれないだろ。」

そんなこんなでいつもの金曜集会の雰囲気になった。

ちなみに百代は当然旅など認めてもらえずしばらく機嫌が悪く、たまに来る対戦相手は悲惨な目にあった。

恭也は最初の２ヶ月で日本を回り、その後はイギリス、ドイツ、アメリカなど世界を回っていた。

日本ではあまり思ったより成果が得れなかった。

理由としては日本には3代名家というものがあるが、それらはすでに代々専属のボディーガードが付いており、たとえ不破の名前だとしても外来の者を護衛に付ける気はなかったからだ。

また政治家などは恭也から見てあまり守りたいと思うような者が少なかった。

とはいえ、それでもとある大物政治家や音楽界の大御所であるＳＡＥＫＩレコード、九鬼財閥から機会があれば是非との声もあり、全く駄目であったわけではない。

逆に海外では十分満足のいく成果を得ることが出来た。

最初に恭也はイギリスに行くことを選んだ。

士郎から連絡を受けたアルバートからぜひとの声があったからだ。

なんでも自分は士郎がいるから大丈夫だが、妻や娘の護衛をしてほしいとの話だった。

最初は政治家の弱みになるから護衛をしてほしいとの事だと思った

が、そうではなかった。

アルバートの妻の名前はティオレ・クリステラ、「世紀の歌姫」とまで言われる世界的に有名なソプラノ歌手であった。
彼女はクリステラ・ソングスクールという私塾を開いており、今はどちらかといえば若い世代の教育に力を注いでいるそうで、そこの卒業生はいずれも世界有数の歌手となることでも有名である。
また自身の境遇からアルバートとともに福祉関係やボランティアに力を入れており、それが原因で敵対する者がいるようだ。

この二人の娘の名前はフィアッセ・クリステラ。
こちらもまた若いながら世界的に有名な歌手らしく、その容姿と声から「光の歌姫」と呼ばれている。
今のところ親の二人と違い彼女自身に狙われる理由などはないが、娘というだけで危険でもあるそうだ。
また現在17歳で年齢も近いことから、アルバートからすれば将来的な護衛と言うよりは友達の息子を紹介するという気持ちが強かった。
その他にもアルバートのおかげで他の政治家ともコネが出来たのは大きかった

ドイツでは軍の中将の護衛を請け負うことが出来た。
彼もまた士郎のことを知っており、恭也は自身の父のすごさを再認識した。
前から娘の護衛を信頼できる者に任せたがったが、その者は中将の護衛でもあった。
恭也が自分の護衛をしている間はその者を娘に付けることができるというのが理由であった。
恭也としても普段の鍛錬と違い、軍の者との訓練は自身の成長につ

ながった。

またここで中将の娘にも出会った。
彼女は前から友達に聞いていた侍に会うことが出来て感動していた。
いろいろ間違った知識が多かったが、恭也は面白いので特に訂正せずにいた。
というかさらにウソで塗り固めておいた。
元々恭也は意地悪な性格をしていたのだ。
ちなみにこの知識を与えた者は日本の中学に帰ってしまったらしい。

その後はアメリカに向かった。
ここではなんと大統領が自ら自身の護衛として雇ってくれた。
これには理由があり、この大統領はかつての戦争でＫＡＷＡＫＡＭＩとＦＵＷＡの存在を知っており、現代のＦＵＷＡがどの程度か見たかったのだ。
そして恭也からＭＯＭＯＹＯの話を聞き、自分が大統領をしている間は日本相手に戦争をするのは止めておこうと決意した。

もちろん大統領から護衛の任務を得られたのは大きく、他の政治家も恭也の名前を覚えた。
他にもアメリカで大人気の格闘家にして大企業を経営しているカラカル兄弟とも面識が出来た。
彼が放つ一言には恭也も考えさせられるものがあった。

それ以降はどちらかと言えば護衛のためではなく修行のために世界を回った。
世界的に有名な格闘家と戦おうと思ったからだ。
世界一の奇拳といわれるコブラ真拳を使うメム２３世。

神の目を持つと言われるリカルド。
絶対氷壁フィヨルド兄弟。
石油王ミスマ。
世界最大の巨人セルゲイ。
そして太陽の子メッシ。

しかし確かに彼らは強かったが、御神の剣士や川神院の人間に比べると一回り劣っていた。
逆に無名ではあったが、香港警防隊の隊長や梁山泊の者達は非常に強く、世界にはまだ見ぬ強者が大勢いるものだと感心したほどであった。

そして1年が経ち、恭也は再び日本に戻ってきた。

「父さん、母さん、なのは、今帰った。」

恭也がいう母とは高町桃子のことで、今では不破桃子を名乗っている。
そしてなのはとは士郎と桃子の子供で恭也の妹だ。

「お兄ちゃん!!」

なのはは恭也を見つけた瞬間飛び付いた。
恭也もそれを受け入れ、抱きしめてやる。

「すまない、さみしい思いをさせたか?」

「ううん。他にもお姉ちゃんやお兄ちゃんがたくさんいるから平気。」

御神の本家には親戚がたくさんいる。
今のところ一番末っ子のなのはは可愛がられていた。
とはいえ血の繋がった兄と離れていたのはやはり寂しかったのかなかなか離れない。

「恭也、お帰りなさい。」

「ただいま、母さん。」

「おう、お帰り。」

「父さん・・・」

「とりあえずそんな玄関にいないで上がってこいよ。」

「ああ。」

そして恭也はなのはを抱き上げたまま居間に向かった。

「さて、せっかく帰って来たんだしお前の話を聞きたいところだが・・・桃子から報告がある。」

「なに?」

そう言われ、恭也は桃子の方を見る。
その顔は非常ににこにこしており、悪い知らせというわけではなさ

そうだった。

「え～実はこの度ついに念願のお店を開くことになりました～！！」

「わ～！！」

なのはと士郎が手をぱちぱちと拍手する。

「ほう、それはめでたいな。」

「ちなみに名前は翠屋で～す。そして気になる場所はなんと・・・川神市で～す！！」

「わ～！！」

「川神市だと・・・」

「恭也が川神市の学校に通うことが決まってるし、それにこれ以上なのはに寂しい思いさせたくないしね。」

「別に一生学校に行くわけではないのにそれだけの理由で・・・？」

「まさか、違うわよ。もともとあそこはこれからどんどん成長していく街ってことはわかっているんだから。ちゃ～んと経営のことを考えた結果、川神市にお店を出すことを決めたんです。ね～。」

「ね～。」

桃子と士郎となのは三人で顔を合わせて笑顔になる。

「そうか・・・それならば何も言うまい。おめでとう・・・そしてありがとう。」

「ちなみに俺も剣士は引退だ!!」

「何だと!?」

「これからは喫茶店のマスターとしてコーヒーを入れていかなければいけないからな!!もうお前も俺を超えたし思い残すことはない。その小太刀、八景を受け継がせたのはそれだけの覚悟があったからだしな。」

「御影さんは納得してるのか?」

「最初は殺されかけたけどな・・・まあ一臣に当主の座を渡した時点でこうなることを分かっていたみたいで最後は許してくれたよ。」

「そうか・・・ならば俺からは何も言うまい。下手なコーヒーで母さんの邪魔して店を潰すなよ。」

「おまっ!!なんてこと言いやがる!!これでも手先は器用なんだぞ!!」

「なのはは将来お母さんのお店を継ぐの!!」

「そうか、なら今から頑張らないとな。」

「うん!!」

「それで、いつから何だ?」

「手続きもあるし3月末、つまり来週くらいには引っ越す予定よ。」

「そうか・・・俺も新しい家というのは楽しみだ。」

「さすがにここほど大きくはないがな。」

「当たり前だ。こんなに大きな家がそう簡単にあってたまるか。」

「でも道場はあったよ。」

「まあお前の腕を鈍らせるわけにはいかんからな。」

「ほう、それはうれしいな。」

「それじゃあ返ってきたばかりで疲れてるでしょ。お風呂沸いてるから入ってきなさい。」

「ああ、その後は向こうのみんなに電話でもしよう。」

おまけ

京は親の離婚で静岡の中学校に通うことになっていた。

（みんながいないと・・・やっぱり退屈だな・・・）

しかし、前の学校と違い事情を知っている者などおらず平和ではあった。
とはいえ、だからといってクラスの人気者になったりするわけではなかったが。
転校してきてすぐはたくさんのクラスメートが京に群がってきたが、基本的に対人能力の高くない京はそれらに対応しきれなかった。
そのため無言でいたため、クラスメートの関心もすぐになくなった。
その容姿から幾度か告白もされたが、すべて好きな人がいるからと断ってきた。

基本的に風間ファミリー以外でいるときは孤独が好きな京だが、このままではいけないことも分かっていた。
そのため少しづつ人と関わっていこうと思い、挨拶だけはしっかりしていたので陰湿な虐めにあうことはなかった。

「ねえあなた・・・」

ふと京の後ろから声がかかり振り返ると、そこにいたのは一人の女生徒だった。
これに京は珍しいこともあるものだ、と思った。
別に京が声をかけられることが珍しいわけではない、その女生徒が誰かに声をかけるのが珍しかったのだ。
女生徒の名前は月村忍。
長いロングストレートが印象的で、先月までドイツに留学していた生徒だ。
京と同じく彼女は普段からあまり人と関わらず、授業中以外は寝てるか本を読んでいるかのどちらかであった。
そんな様子に京は自分に少し似ているなと思い、印象に残っていた。

後に京は語る、実はこれがほぼ正反対の性格をしているなどとは欠片も思っていなかった、と。
これが椎名京が風間ファミリー以外で初めて出会った友達だった。
そしてこの出会いのおかげで、京は中学時代も孤立することはなかった。

川神学園入学前（後書き）

作中でとらハネタが何回か出てきましたが多分ほとんど名前だけです。
というわけで、わからなくてもオリ設定と思って頂ければ大丈夫です。
ちなみにわかる人はどれくらいいるのでしょう？

これからはしばらく日常パートを書いていこうかなと思います。
さて・・・作者の力量でどこまで出来ることやら・・・

金曜集会！！（前書き）

リアルの研究室がすごく忙しくなって更新がこれから遅くなりそうです。
でも評価してくれている人や感想をくれる人がいるので更新停止はしません。毎日更新は無理ですが少しずつ書き足しながら更新していきます。

金曜集会!!

恭也は川神市に引っ越してた。
そしてそれと同時に京もまた、静岡の実家から川神市に下宿することになった。
これにより、久しぶりに風間ファミリーが川神市に全員集合することになる。

「やぁ～久しぶりに全員集まったなぁ。」

「お姉さまでしょ、大和でしょ、恭也で京、キャップ、モロ、そんでアタシにガクト!!」

「よかった。」

「なにがだモロ？」

「恭也、犬は優先順位を付けるというだろ。ちなみに俺は2番目らしい。」

「・・・・おいワン子!!なんで俺様が一番下なんだよ!!」

「はっはっは、普段の行いが悪いからじゃないのかぁ。」

「モモ先輩もあんまり良くないよね。」

「言ってくれるじゃないか京、そうゆう悪い子にはお仕置きだぞ～」

「恭也～私が犯されちゃうよぉ、ヘルプ～ヘルプ～・・・」

「京、口は災いのもとだ。」

「そんなにクールに返されても・・・でもそういうところも素敵！！はぁはぁ・・・」

「なぜか京の変態な部分はいつも恭也だけに聞こえないんだよな。」

「武術の業の一つらしいわよ。」

「京が言うには恭也の好きなタイプは大和撫子系だから、出来るだけ理想に合わせるんだってさ。」

「だからって自分を隠したって仕方ないだろ。俺様みたいにオープンにいけよ。」

「恭也のためならお墓の中まで持っていくよ。くくく、それにガクトはそれで全敗してるよね。」

「うるせぇー！！」

「見た目は確かに大和撫子だが中身は完全に変態だからなぁこいつ。まあそれはそれで可愛いんだが・・・」

「モモ先輩、照れる・・・」

「変態って言われて照れないの！！」

「モロ、急に変態などと叫んでどうした？」

「ちなみに今の私とモモ先輩の会話も恭也には聞こえてないよ。くくく・・・」

「くくく・・・」

「は、はめられた・・・」

「相変わらず京は恭也にべったりだな～。ま、それはいつものことだからほっといて、金曜集会始めるぜ！！」

「キャップ、今日の議題は？」

「おう、せっかく久しぶりに集まったんだし明日はパーティーだ！！」

「そいつはいい！！ここでやるのか？」

「いや、恭也の家でやることになった！！」

「それって前に電話で言ってた翠屋って店のことか？」

「ああ、母さんからぜひ来てくれとのことだ。なんでも開店前に店の料理の味見をしてほしいらしい。もちろん今回はただでいいそうだ。」

「本当！？行く行く！！」

「こらワン子！！ちゃんと遠慮も覚えなさいと教えただろ！！」

「あう！！ううぅ、ごめんなさぁい。だからそんなに怒らないでよ

お。」

「おお、さすが大和。ワン子の教育をしっかりしているな。」

「甘やかすのは私がしているからな。」

「大和も結構甘い時あるよね。飴と鞭がしっかりされてる。」

「大和、今回は本当に遠慮なしでいいんだ。その代わり、新しい店ということもあるから学校が始まったらしっかり宣伝してほしい。」

「なるほど、そういうことなら了解だ。」

「つーわけで、明日の予定は決定だ!!そんじゃ、中々会えなかったこの一年を振り返ってみようぜ。」

「といっても俺様達は受験勉強であんまり話題もないがな。」

「ガクガク、あんなに怖い大和は初めてだったわ・・・」

「そうしないとワン子は落ちてただろ。あれは愛の鞭だ。」

「はぁはぁ、私も恭也から愛の鞭を受けたいなぁ。」

「そこ!!変態発言禁止!!」

「モロ、突然叫んで大丈夫か?」

「ニヤリ・・・」

「またやってしまった・・・この突っ込み体質が憎い・・・」

「私は恭也の旅の話が聞きたいぞ。」

「俺も俺も!!どんな冒険してきたんだ!?」

「そこまで大したことはしていないが・・・そうだな、初めはイギリスに行ったんだがそこで爆破テロの予告があったからその警備などをした。」

「最初の一言ですでに大したことあるんですけど!!」

「クレイジー・ボマーとスライサーという世界的テロリストが組んでいてかなり苦戦した。一度は護衛対象を誘拐までされたからな。剣の腕だけでなく護衛の技術ももっと磨かなければと再確認した出来事だった。」

「スライサーは私も知っているぞ、戦闘狂としてかなり有名だからなぁ。一度戦ってみたかったのだが、恭也がすでに倒していたか。」

「この二人の会話が異次元すぎる。」

「でもテロリスト相手に大立ち回りって男の夢だよなぁ!!」

「「ないない。」」

キャップの言葉に他の男全員で否定しておいた。

「ドイツでは中将の護衛もしていたのだが、ついでに軍に混じって訓練させてもらった。護衛任務は一人でやることばかりじゃないか

らああいう指揮訓練も必要だな。いい経験をさせてもらった。」

「もう僕はなにも突っ込まないよ・・・」

「恭也は英語やドイツ語も話せるの？」

「英語は御神本家の人間は誰でも話せる。時代はグローバル化らしいからな。ドイツ語は片言ならぎりぎりいける程度で正直微妙だ。今回は先方が日本語を話せたからなんとかなったが・・・」

「おおぉ、素敵！！」

「京じゃないが、確かに英語を話せる男ってイカしてるよな。」

「ん？だがじじいから聞いたんだが、恭也、おまえって入試ギリギリだったんだろ？」

「国語や英語は問題ないのだが、どうも理系は頭に入らん。」

「それわかるぜぇ。」

「ガクトは国語も駄目でしょ！！」

「ねえねえ、他には他には！？」

「アメリカでは大統領のＳＰをさせてもらった。」

「おお！！」

「とはいえ特に事件も起きず仕舞いだった。まあ護衛としてはそれ

が一番だがな。そういえば百代、鉄心殿はいったい戦争で何をしたんだ?ずいぶん大統領が気にしていたみたいだが・・・」

「さあな・・・若いころはずいぶんヤンチャをしたと言っていたが教えてくれないから知らん。」

「恭也・・・やっぱりお前も姉さんと同じで非常識な人間なんだな。」

「常識の範囲内なんてつまんねーよ!!やっぱみんなもっと自由に生きなきゃな!!」

「キャップは相変わらずだよな。1年ってことはまだあるんだろ。」

「まああとは世界を回って有名な者と手合せしてきたくらいだな。」

「おお、その話は非常に興味がある!!」

「アタシも!!誰と戦ってきたの!?」」

「カラカル兄弟、セルゲイ、メッシなど他にも多くの者と戦ったな。」

「それらは強いのか?」

「大和はなにも知らないのねぇ、世界の有名どころばかりじゃない!!」

「ワン子に馬鹿にされた・・・だと。」

「特にこの中ではカラカル兄弟が全米格闘チャンプとして、メッシは太陽の子として有名よ！！」

「へぇ・・・ワン子詳しいんだね。」

「ふふ～ん、すごいでしょ～。褒めるなら今のうちよ～」

「人を馬鹿にしといて調子に乗るな。」

「あぎゃ！！うう～大和ごめんなさぁい。」

「それで、どうだったんだ？」

「百代、人から聞いた話で満足できるのか？」

「むっ・・・たしかに満足は出来ないが、せめてこれからの参考にはしたい。」

「そうか・・・ならばはっきり言うが、これらの者達は百代の敵ではない。」

「なんだ・・・やっぱりそうなのか・・・」

恭也のその言葉と聞き、百代は少しショックを受けた顔をした。
それに気付いたのは恭也とワン子、大和の三人だけであった。
恭也とワン子は百代がどのような思いを胸に秘めているかを知っているが故に。
大和はもっとも百代に近い位置にいる男故に。

「姉さん・・・」

「しかし、それは今の段階では、という意味だ。」

「なに？」

「どうやら・・・日本と中国以外では気の運用法が伝わっていないようでな、初めて見せたときは皆驚いていた。」

元々各国でトップの戦士達である。
それこそ銃などを持っていても並みの人間ではどれだけ人数を集めても歯が立たないほど強い。
しかし、そんな彼らは気の存在を知らなかった。
恭也と戦い、負けることで気の存在を知り、今は気を使いこなす修行している。

「ならば・・・」

「ああ、元々のポテンシャルはかなり高い者ばかりだった。実際メッシなどは気の存在を知るとすぐに使えるようになったしな。」

「そうか・・・そうか！！」

「それに気を使わないでの戦いでは皆かなり苦戦した。きっと彼らは強くなる。」

「恭也にそこまで言わせるとは・・・将来が楽しみだ。」

「というか、恭也は結局のところ気を使わない戦いでも全米格闘チャンプとかに勝てるんだね。」

「お姉さま・・・よかったね・・・」

「それに世界は広いぞ。有名でなくても恐ろしいほどの強者はたくさんいた。」

「いつか・・・そんな者とも戦いたい者だ。」

恭也の話を聞き、百代は世界の広さに感動していた。
恭也の話が終わると、今度は他の者の話で盛り上がった。
例えば京にも風間ファミリー以外で友と呼べる者が出来たという。

「忍って言うんだけど・・・初めて話した時と全然性格が違って、騙されたよ。」

初めの印象はお淑やかな美人で高根の花といった感じであったが、実際は非常にテンションの高い女の子であった。
しかもかなりの意地悪で、よく忍と仲の良い後輩が色々な嘘で騙されていた。
他にも彼女はゲームが好きで、よくインドア派の京も連れ回されたそうだ。
京としてもそれが不快ではなく、結局中学ではほとんど二人で一緒にいた。

「京、今度俺様にその子を紹介してくれよ。」

「いいよ、高校は川神学園に来るらしいしガクトにも紹介してあげる。」

「マジか!!俺様にもついに春が来た!!」

「まだ出会ってもないでしょ！？」

「いいの京？」

「うん、はいこれ写真。」

「ブラボー！！最高に美人じゃん！！」

「どうせ結果は見えてるからね。くくく・・・」

「京のその笑い方怖いわ。」

「京にいい友が出来てよかった。」

「ありがとう恭也。もしかして心配してくれた？」

「少し・・・な。」

「うれしいな、やっぱり恭也は優しいね。ねえ恭也、抱いて・・・」

「昔から京は甘えたがりだな。これでいいか？」

「相変わらず意味は違うけどこれはこれで、はぅ～・・・」

「俺もいつか恭也みたいに命を賭けた波乱万丈な冒険がしたいぜ！！」

「むふふ、俺様のバラ色の学園生活、早く来ないかな～。」

「大和～、お姉さんも大和を抱きたくなったぞ～」

「ぐわ、姉さん！！ちょ、せ、背骨・・・が・・・ゴキ！！」

「ちょっと大和、お姉さまから離れなさいよ～！！」

「僕はいったいどれに突っ込めばいいんだ！？」

いつも通りの風間ファミリーであった。

おまけ

テレビでは格闘家特集がやっていた。

解説は最近人気が出始めてきた雪広アナと、格闘家として名高い九鬼揚羽であった。

「それでは揚羽様、世界の強豪の解説を。」

「フハハハハ、よかろう説明してくれるわ。」

「九鬼揚羽様は武の世界で生きており、その道に大変詳しいそうですね。」

「うむ、とはいえ我が武の世界にいるのは今年で最後だがな。」

「なんと、それは本当なのですか？」

「ああ、来年からは九鬼財閥の仕事を手伝うことが決まっておってな。」

「そうですか、それは武の世界が少し寂しくなりますね。」

「なんの、我より強い者はいくらでもいるものだ。武の世界は皆が思っている以上に広い。」

「そうなんですか。それではそんな達人達を紹介していただきたいと思います。」

「現在、武の世界で有名なのはまずアメリカのカラカル・ゲイツであろうな。それに中東地方では石油王にして武道家ミスマ。ロシアにいる世界最大の巨人セルゲイ・・・」

「いずれも音に聞こえた戦士達ですね。」

「最後に、太陽の子といわれるアルゼンチンのメッシ。メッシが恐らく、挙げた者の中では強い。」

「これらの戦士達と比較すると日本・・・侍ジャパンはどうなのでしょう?」

「日本の圧勝であるな!!」

「川神院がある。そこを筆頭とした我を含む四天王の存在であれば上記で挙げた世界の格闘家達も敵ではあるまい!!といいたいところなのだが・・・」

「どうかしたのですか?」

「うむ、実は九鬼財閥では常に新しい人材発掘のために世界中を調査しているのだが、どうもこの1年で世界の強豪達に変化があったらしい。」

「ほう、それはいったい？」

「なんでも彼らはみな同じ者に敗れ、そして己を見詰め直しているらしい。我も気になりメッシと戦ってみたのだが・・・」

「結果はどうだったのですか？」

「我の知っていたメッシの何倍も強くなっていた。もちろん、まだまだ我には届かないがあの成長スピードは脅威であったな。話を聞くと、他の強豪達もまたどんどん強くなっているらしい。」

「ほう、それはこれからの武の世界が楽しみですね。」

「うむ、我も引退するとはいえ武術自体を止めるわけではないのでな、ワクワクして仕方がない！！」

「しかし、そうなると世界の強豪達を刺激した人物が気になりますね。」

「世界は広い！！どこにどんな人材が眠っておるか分からぬ！！このことからも有名かそうでないかは武の世界では関係ないことがよくわかるな！！いつか世界中の武を競い合わせてみたいものよ！！」

「そうですね。それでは揚羽様、ありがとうございました。」

金曜集会！！（後書き）

というわけで恭也と京はこんな感じで、都合の悪い言葉は恭也に聞こえない仕様となっています。
あと、これからのＭＥＳＳＩ達に期待してください。
それにしても会話文ばかりな回になってしまいましたが読みにくくなかってでしょうか？キャラが多いので少し大変です。

川神学園入学！！（前書き）

研究室が忙しく更新が遅くなってしまいました。
これからも3日~5日くらいのペースで更新していくと思いますが見捨てないでくれるとありがたいです。

感想で思った以上にとらハに詳しい方がたくさんいたので以前よりとらハネタが増えるかもしれません。とはいえ今まで通り知らなければオリキャラで通るレベルなので知らない方も大丈夫だと思います。

川神学園入学！！

島津寮

ガクトの母親が寮母をしている、川神学園に通う生徒専用の寮である。
この島津寮は1階に男子が3部屋、2階に女子が3部屋の計6部屋ある。
とはいえ、男女一緒の寮というのは男子にはともかく女子にはあまり人気がない。
去年までは3部屋とも埋まっていたのが、卒業してしまいいなくなったため女子部屋には今のところ京一人で他の2部屋は空き部屋となっている。

男子は親が海外に行ってしまった大和と冒険家で家にほとんどいないため下宿したキャップ、それとこの二人と同じ年で、ワン子と孤児院が同じであった源忠勝の三人となっている。
大和やキャップはワン子からこの忠勝の話をよく聞いていたため、初めて会った時からかなり親しくしていた。
具体的には・・・

「お前が噂のタッちゃんか！！」

「ワン子からよく話は聞いてるよ。仕方ねぇって口でいいながら色々世話を焼いてくれるんだってねタッちゃん。」

「一子から聞いたのか・・・だが勘違いするなよ、あれは色々不器用で遅いから早く休みたい俺が代わりにやってただけだ。」

「おお、これが噂のタっちゃんのツンデレか。」

「なんだ、結局心配だから世話してるんじゃん。」

「うるせぇ、なんだお前らは!?殺すぞ!!」

「タッちゃんタッちゃんワン子のタッちゃん!!」

「タッちゃんタッちゃん僕らのタッちゃん!!」

「俺のことをタッちゃんって呼ぶんじゃねぇ!!」

と、こんな感じであった。
その後は大和達がタッちゃんと呼ぶと怒られるので、彼のことをゲンさんと呼ぶようになった。
新ジャンル・健康的なツンデレ不良、それが源忠勝である。

「さあ、今日から学校だ!!」

「キャップ、中学でもそうだったがやっぱり制服でもそのバンダナを外さないんだな。」

「また内申下げられるよ。」

「いいんだよ京、これは俺のトレードマークだからな!!それに俺、将来は冒険家になるから学校の成績とか関係ねぇし。」

島津寮の前でキャップ、大和、京の三人は他のメンバーを待ってい

た。
すると隣のガクトの家から声が聞こえてきた。
「ほらガクト！！もう大和ちゃん達待ってるよ！！」
「わかってるよ！！声でけぇんだから近所迷惑だろ！！恥かかせんな母ちゃん！！」
「あ、でてきた。」
「よ、名前負け。」
「なんだいきなり喧嘩売ってんのか！？」
「冗談だ武力９５、今日は一段と決まってるな。」
「当たり前だぜ知力９５。なんたって今日は始業式、第一印象は大切だからな！！ってなんだよまだ三人かよ！！」
「そうでもないよ。ほら・・・」
「お、恭也とモロじゃん。お～い！！」
キャップが叫ぶと聞こえた様で、恭也とモロも手を挙げて近づいてくる。
「みんなおはよう。こうして制服を着て一緒に登校するのは初めてだな。」
「制服姿の恭也とこれから一緒に登校できるなんて、なんて素敵！

！ねえ恭也、私の制服・・・どうかな。」

「ああ、良く似合っている。」

「ありがとう、うれしいな。・・・襲いたいなんてそんな急に・・・みんな見てるのに、でも恭也がどうしてもというなら・・・」

「相変わらず飛ばしてるね京は！！あ、みんなおはよう。」

「おう！！恭也やモロとは土曜日ぶりだな！！」

「あのときは騒がしくして悪かったな。」

「いや、母さんもあれで騒がしいのは大歓迎だからな。それに明るい友達だとほめていたぞ。」

「しかし恭也の母ちゃんマジで美人だったよなぁ・・・しかもめちゃくちゃ優しかったし・・・」

「友達の母親に欲情しない！！」

「ガクト、自分の母親のことを思い出すんだ。」

「げぇ・・・やめてくれ。テンションが一気に落ち込んだぜ。」

「恭也のお父さんも格好良かったし、将来は恭也もあんな感じになるんだね。」

「しかもすごく強そうだったなぁ。」

「姉さん!!いつの間に!?」

「よっ、今来たところだ。」

「モモ先輩、ワン子は?」

「もうすぐ来る。」

百代のいうとおり、後ろから走ってくるワン子の存在があった。

「みんなーおはよー!!」

「おお、相変わらず朝から元気なやつだ。」

「当然よ!!しっかり朝ごはんも食べてるからね~。」

「あれ?今日はタイヤ引きずってないんだね。中学のときは毎日引きずっていたのに。」

「入学式くらいちゃんと制服で登校しなさいってじいちゃんに止められちゃったの。だから今日はこの３Ｋｇのリストバンドだけ。」

「どんなときでも鍛錬を忘れない自慢の妹だ。」

「よーし、それじゃあみんな揃ったしさあ行くぜ。狂乱麗舞、風間ファミリー出陣だ!!ワン子、泣く子がいたら黙らせろ!!」

「任せなさい!!アンタら、アタシに続けー!!」

キャップの掛け声とともに全員で学園に歩きだした。

島津寮から川神学園までは多馬川沿いの河原を歩き、その先にある多馬大橋を渡る。
この多馬大橋は別名変態の橋と呼ばれている。
変人が多く集まるだけでなく、奇妙な生徒達が登校していくからだ。
とある三人組

「川神学園は美男美女が多いと聞きますし、楽しみですねぇ。」

「こらー、ボクがいるのに他の子に見とれるのはだめー。特に男は絶対だめー！！」

「若、珍しくユキが嫉妬してるぜ。」

「なーんてね。ラン・ラン・ルー！！」

「唐突に危ないネタ禁止！！」

「ボクを止めるには情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ……そして何よりもぉおおおおーーーっ髪の毛が足りない！！」

「アンタが剃ったんでしょ！！」

三人でじゃれ合っていると正面から二人組の美女が歩いてきた。

「それにしても唯子が教師になるなんて、昔じゃ考えれなかったよな、小鳥。」

「そうだね真くん。でも唯子ならいい教師になれると思うよ。」

「生徒にいじられるのが容易に想像できる。」

二人は制服を着ていないため学校関係者ではない。
話から推測するに、学校の教師の付き添いで途中まで来たようだ。

「見てください準、なんと美しいお嬢さんなんでしょう・・・」

「どれどれ・・・身長１４４ｃｍ!!体重４０ｋｇ!!Ｂ７０Ｗ４７Ｈ７５!!まさに神が己の限界を超えて生み出した奇蹟!!」

「なんで準は見ただけでそこまでわかるんだよー!!」

「行きましょう。ちょっとよろしいですかお嬢さん方。」

声をかけられた二人は立ち止まり、肌が浅黒い男、葵冬馬の方を向く。
なぜか片方は先ほどまでと違い急に不機嫌になってしまっていた。

「なんか用?」

「いえ、お二人があまりに美しいものですからつい声をかけてしまいました。」

「俺は男だ!!」

「なんと!?ですが何も問題ありません。元々私はどちらもいけますから。むしろこんなに美しい男性なら大歓迎です。」

「うお、その返しは初めてだ!!てか勘弁してくれ!!」

もう片方の小柄な女の子は頭が綺麗な男、井上準に声をかけられ怯えている。

「お譲さん、可愛らしいですね。どうかこのまま成長しないでいてください。」

「私、もう２２歳なんですけど・・・」

「永遠のロリ美少女キターーーーー！！俺が生まれた意味を知りました。結婚してください！！」

「駄目だこの変態共、ボクがなんとかしないと・・・」

私立川神学園
川神市の代表的な学校で個性を重んじているための自由な校則とユニークな授業・行事が特徴的。レベルは平均的にはそこそこだが、特別進学クラスであるＳクラスは全国でも屈指の偏差値を誇る。
中間などは存在せず、期末が勝負となる。
土日は休み、アルバイトはＯＫ。
他にも決闘システムという、互いを競い合わせ、遺恨を取り除こうというシステムも存在する。

「お、あそこクラスが張られてるみたいだ。行こうぜ！！」

「お、俺はＡクラスだな。」

「大和は一人みたいだね。え～と、僕とガクトはＢクラスだね。」

「お、モロと一緒か。同じクラスになるの多いな。」

「俺はＣクラスだぜ！！」

「アタシはＤ！！うう～、一人だぁ。」

「俺と京はＥクラスか。」

「恭也と同じクラス・・・きっと愛の力だね。」

「いや学校側が決めたものだから！！」

「ま、クラスの数を考えたらこんなもんだろ。」

「確かにな。まだ一人なのが俺とキャップとワン子でよかった。俺達ならすぐに知り合いくらいは出来るだろうし。」

「1年にはＦクラスはないんだな。」

「ああ、このクラスは特別で2年生からしい。素行の悪いやつや極端に成績の悪いやつ、あとは進路の希望で成績を考えないでいいやつが集められるんだ。」

「もう一つの特別枠のＳクラスとはずいぶん違うんだな。」

「それだと来年はキャップとガクトとワン子はＦクラス確定だな。」

「ちょっ、モモ先輩ひでえな！！」

「ちなみに姉さんはＦクラスみたいだね。」

「なん・・・だと！？」

「モモ先輩は全部当て嵌まってるから仕方ないよ、くくく。」

「ははは、人のこと馬鹿に出来ないでやんの。」

「ま、モモ先輩も俺様達と同じバカってことで。」

「キャップ、ガクト、覚悟は出来てるだろうな・・・」

「てことでガクト！！後は任せた！！」

キャップは風のように走り去っていった。

「あ、キャップずりぃ！！てか京も笑ってたじゃん！！」

「京ならとっくに恭也とクラスに言ったよ。」

「さてと・・・じゃあモモ先輩、俺様もそろそろ行くわ！！」

「さわやかに言っても駄目だ。お前は三人分の罰を受けてもらおう！！」

「ギャー！！」

Eクラスに入った恭也と京はまず自分の席を確認した。
男子の前から順に名前順で並ぶようで、京と恭也は離れていた。
そうして二人で席に向かうと明るい声をかけられる。

「あ、京だ。やっほー。」

「あ、忍。同じクラスだったんだ、やっほー。」

京に声をかけたのは、中学時代における唯一無二の友達、月村忍であった。

「それにしても京が男と一緒に教室に入ってくるなんて驚いたわ。ってことは彼が噂の？」

「そう、私の彼氏の恭也。」

「京が冗談を言うなんて、本当に仲の良い友達なんだな。」

「わお、これが素なら京も大変ね。あ、そういえば初めましてだね。私は月村忍、京の友達だよ。」

「不破恭也だ。これから1年よろしく頼む。」

「おお、見た目通り古風な感じだね。もう同級生だし敬語はナシでいいよね。」

「ああ。わかった。」

「あははーよろしくー。もちろん京もね。」

「うん、よろしく。そういえば恭也、結構見知った顔の人多いね。」

京のいうように恭也が周りを見渡すと、確かに見知った顔が多かった。

住んでいるところが違い、中学も別の京と恭也だが、意外に川神では知り合いが多い。

トニーとの対戦以来、キャップ達も自分たちだけであの原っぱを独占することはなくなったため一緒に遊ぶことが増え、顔見知りも増えたのだ。

「あれは・・・渋川、それに吉川だったか？」

「うん、他にも何人かいるみたいだね。」

「これなら他のクラスの奴らも心配なさそうだな。」

「そうだね、もっとも一番心配だったのはきっと私たち二人だったんだろうけど。」

「なんだか京に友達がたくさんいることにビックリね。」

「ま、ここにいるのは友達ってほどじゃないよ。というか忍はネコ被らなくていいの？」

「あ、うん。前までは家の問題があって誰とも関わりたくなかったんだけどね、その問題も解決したし高校ではっちゃけようかなって思って。」

「うん、それがいいよ。私もそっちの忍の方が好き。」

「あははー、ありがと。京も中学時代より明るくていいね。やっぱり愛しの彼がいるからかな～？」

「もちろん、だけど大変だよ。例えば・・・恭也、大好き。」

「急にどうした？もちろん俺もお前たちは大切だぞ。」

「とまあこんな感じで。」

「京も苦労してるね～。これが中学時代で氷の女神とまで言われた京とは思えない撃沈っぷり。」

「恭也が私の事を大切に思ってくれてるのは分かるし、いいんだけどね。私は恭也が振り向いてくれるまで待ち続けるの。」

「鳴かぬなら、鳴くまで待とう、ホトトギスだね。」

「それが正しいと歴史が証明しているからね。」

「二人は一体なんの話をしているんだ？」

「うふふ～内緒。乙女は謎が多いほど素敵になるの。」

「ごめんね恭也。」

「まあいい。月村さん、これからも京と仲良くしてくれ。」

「もちろん!!あ、不破君もね。」

「ああ、そうしてくれると助かる。」

キーンコーンカーンコーン。

「あ、チャイムだ。とりあえず席に座ろ。」

「ああ。」

「それじゃあまた後でね～。」

恭也が自分の席に座ると、隣の人物が声をかけてきた。

「よお不破、久し振り。お前もこの学校だったんだな。」

「お前は・・・赤星か。お前は確か違う県ではなかったか?」

男の名は赤星勇吾。
恭也が旅を始めた初期のころに日本最大の剣道流派である草間一刀流の道場でであった青年である。
師匠である草間一刀流の師範が自分と同年代の人間に倒されるのは、他の弟子達に衝撃を与えた。
その後、ほとんどの門下生達が遠巻きにしていた恭也を慕ってきたのは赤星だけであった。
そのため恭也もよく覚えていた。
赤星からすれば覚えているのも当然で、圧倒的な剣に憧れもした。

「ああ、俺は剣道の推薦で来たんだ。そういう不破はこの街出身だったのか?」

「なるほど、確かにこの学校は剣道が強かったな。俺はつい先日引っ越してきたところだ。まあ、引っ越しが決まる前からこの学校に進学することは決めていたが。」

「へえ、まあせっかく久しぶりに会ったんだ。旅の続きとか聞かせてくれよ。」

「ああ、だが先にＨＲのようだ。先生が来た。」

「ん？まだ誰も来ていないようだが・・・っとほんとに来た。よくわかったな。」

「真っ直ぐこちらに向かう気配がしたからな。また後で話そう。」

「ああ、楽しみにしてる。」

その後、入ってきたのはポニーテールが特徴のジャージを着た女体育教師だった。
その整った容姿とスタイルは、入ってきた瞬間に男子生徒から欲望の詰まった叫び声が聞こえてくるほどであった。
かなり甘い声が特徴的で、後にこの教師、鷹城唯子の名前から唯子ヴォイスと呼ばれるようになる。
美人の担任にレベルの高い女子、男たちが上げた勝利の雄叫びは隣のクラスまで届くほどであった。

そんなとき恭也は入ってきた担任を見て、足の運び方などでなにか武道をやっていて強いと思うがどれほどかがわからない、などと考えていた。
とはいえ、この学校に強者が何人かいることは分かっていたので驚

くほどのことではなかった。
むしろ、このような者を探し出してくるとはさすが川神鉄心殿だと感心していた。

おまけ

「ママ、次のツアーが決まったよ!!」

「あらあら、それで、次はどこの国に行くのかしら?」

「日本だって。同じ日にゆうひも日本に行くらしいから一緒に行くの。とりあえず来日中はアイリーンが泊めてくれるって。」

「そう、日本なら士郎や恭也にも挨拶してきたら?二人とも命の恩人なのだし。」

「うん、士郎に電話したら今は川神市ってとこにいるから来るなら歓迎するって!!アイリーンのマンションも隣町らしいし空いた時間に遊びに行く予定だよ。」

「本当に、二人には感謝しても感謝しきれないわね。」

「うん、ママやパパ、それに私が生きていられるのも二人のおかげだもんね。」

「なにかお礼でも出来たらいいのだけれど・・・」

「私に出来ることは歌うことだけだから・・・チケットは渡そうと思う。この命を救ってくれた人に対するプレゼントには足りないけど。」

「いいのよ、大事なのは気持なのだから。二人ならわかってくれるわ。そうね、士郎は新しい家族が出来たと言っていたし、恭也も思春期の若者だし、ペアチケットでも渡せばきっと喜んでくれるわ。」

「ママ、ナイスアイデア!!そういうことならアイリーンやゆうひにも協力してもらうね。」

「ええ、それじゃあ日本ツアー頑張りなさい。」

「うん!!」

イギリスのとある親子の会話であった。

川神学園入学！！（後書き）

ユキは基本原作通り、ですが壊れてはいないのでたまに一般人並みの反応をします。

やっと学校編まで書けました。
しばらくは恭也達が1年のオリジナル展開が続きます。
とらハが手元にないためキャラの口調に違和感があるかも・・・
ここからは作者の力量が確かめられる時・・・頑張ります！！
なので評価や感想を頂けると嬉しいな～とか思っちゃいます。
それではここまで読んで頂きありがとうございます。

とある日常の一幕（前書き）

しばらくは1年生でオリジナル展開が続きます。
その間に複線とかを上手くばら撒ければいいのですが・・・
とはいえあんまりグダグダしていると見限られてしまうのでこれからは少しずつ展開を早くしていきたいと思います。

とある日常の一幕

入学式も終わり、下校時間になったが恭也達は教室から出なかった。
それは恭也達だけでなく、他のクラスメイトも同様であった。
というのも新しい学校が始まり、ほとんど人間が新しい交友関係を築こうとしているからだ。
風間ファミリーも大和の提案で、この日は交友関係を広げるために使おうと決めていた。
もちろんそれは強制ではなく、京などはクラスメイト次第ではすぐに帰るつもりだった。
しかし、偶然にも中学で唯一仲が良かった忍と同じクラスになれたこともあり、今だにクラスに残っていた。

「京、せっかくだし一緒に帰らない？」

「うん、いいよ。もちろん恭也も一緒だけど。」

「オッケー。と、不破君も誰かと話してるね。」

「ほんとだ。恭也がこんなに早く仲良くなるなんて珍しい・・・」

「私たちみたいに同じ中学なんじゃないの？」

「ありえなくはないけど、恭也の地元ってすごく遠いから考えにくいよ。」

「ふーん、まあ聞いてみればいいんじゃない。おーい、不破君！！」

教室内で大声を上げたため、すぐに恭也も赤星も忍の存在に気付い

た。
それは恭也達だけでなく、他のクラスメイトたちも何事かと忍を見る。
そして忍の容姿に気付いた男子達は早速クラスの美女と仲良くなったと思われる恭也に嫉妬の眼を向けた。
また同様に、クラスの女子達もクラス内で格好いい男子が他の女子に持っていかれたと考え、忍に嫉妬の眼を向けていた。
つまりどっちもどっちである。

「不破、呼ばれているぞ。」

「月村さんか、何の用だ?」

「行けば分かるだろ。俺も一緒に行っていいか?」

「ああ、京にもお前のことを紹介したいしな。」

「京っていうと、あのショートカットの子か。不破も以外に隅に置けないな。」

「なにがだ?」

「いや、何でもないさ。ほら、待ってるぞ。」

赤星と一緒に恭也は忍のところへ向かった。

「来た来た。」

「月村さん、俺に何か用か?」

「いやー京と一緒に帰ろうと思ったんだけど、不破君と一緒じゃなきゃ帰らないって言うから。」

「間違ってはいない。けど本当の理由は人付き合いが苦手な恭也が入学初日から話してるなんて珍しと思って。」

「なるほど。こいつは赤星と言って俺が去年旅をしていた時に立ち寄った道場で会ったことがあってな。」

「そういうこと。俺は赤星勇吾、よろしく。」

赤星の容姿はジョニーズ系で見る人を不快にさせることがない。
そんなさわやかな彼が京に笑顔で挨拶をすると・・

「なんてさわやかな・・・これは私には眩しすぎる!!」

「は?」

「あははー、確かに!!京には眩しすぎるさわやかさだね!!」

「不破、俺はなにかしただろうか?」

「京は人付き合いが苦手でな。いきなり明るく挨拶されて驚いたんだろう。」

「そうなのか?」

「さすが恭也、私のことをよく分かってるね。大好きだよ。」

「京との付き合いも長いからな。俺も京のことは大切だ。京、挨拶

を返してないぞ。」

「ん、椎名京。よろしく・・・」

「あ、ちなみに私は月村忍。よろしくね赤星君。」

「ああ、よろしく。そういえば不破はここが出身じゃなかったんだよな。なのに椎名とは付き合いが長いのか？」

「ああ、それは・・・」

「とりあえずそろそろ移動しない？注目浴びてる。」

恭也が話すよりも早く、周りの視線に耐えられなくなった京が提案した。
言われて恭也や赤星が周りを見渡すと、たしかに注目されていた。
恭也は殺気などであれば気付くことができるが、今回の視線は好奇心の籠ったもので、気付かなかった。
なにより恭也は注目される理由がわからなかったことが気付かなかった要因の一つであった。
もっとも、なぜ自分たちが注目されているのかわからないのは赤星も同様であったが。

「あはは、不破君も赤星君も鈍感だねぇ。まあ気にしなくてもよ、せっかくだし４人でどっか行こうよ。」

二人の様子を見た忍はくすくす笑い、京の案に賛成するのであった。
赤星も入学式であるこの日は部活もなく空いていたので賛成し、恭也としても反対をする理由もなかった。

４人で教室を出た後、残ったクラスメイトはというと・・・

「ちくしょー!!ちくしょー!!ちくしょー!!」

「入学早々クラス最高級の美人が２人とも持っていかれた!!」

「Ｓｉｔ!!Ｓｉｔ!!Ｓｉｔ!!」

「世の中顔なのか!!なぜこの世はこんなに不平等なんだ!!こうなったらこんな世の中俺が変えてやる!!」

「馬鹿にしやがって馬鹿にしやがって馬鹿にしやがって!!」

「不破君も赤星君もかっこよかったねぇ・・・」

「どっちがどっちと付き合ってもお似合いすぎて何にも言えないわ・・・なんて言うと思ったか!!」

「はぁはぁ、不破×赤星・・・有りだわ!!」

「「ねぇよ!!」」

入学早々打ち解けたクラスメイト達であった。

学校を出た恭也達は忍の提案で一緒に昼食を食べることになった。

始業式が午前中で終了したこともあり、全員お腹も空いていたので

反対意見も出ることはなかった。
とはいえ、ここにいるのは元々川神出身でない者ばかりでまだ地理を把握していない。
京は川神出身だがそれは小学生の時までで、おいしいお店などは知らない。
なので京はつい先日ご馳走させてもらった翠屋に行くことを提案した。

翠屋は洋菓子兼喫茶店ということでランチに丁度よかった。
また商店街にあり、学校の帰り道からそう遠くないのも理由の一つであった。
恭也としてはやはり少し気恥ずかしいものがあるが、他の二人も事情を聞いて即ＯＫを出してしまったのでそれに従うことにした。

カランカラン

「いらっしゃいませ・・・あ、お兄ちゃん！！」

恭也達が翠屋に入ると、小さな女の子が挨拶をしてきた。
とはいえ、普通はお客にお兄ちゃんなど呼ばれない。
それを聞いた忍達は疑いの目で恭也のことを見た。

「お兄ちゃん？・・・不破君、そんな趣味あったの？」

「不破？」

「恭也？」

「妹だ！！というか京は知っているだろう・・・」

「もちろん冗談だぞ・・・ははは。」

「じょーだんじょーだん。ほら、怒らないで。それにしてもかーわーいーい!!」

「そ、冗談だよ。こんにちはなのはちゃん。」

「あ、えーと・・・京お義姉ちゃん!!こんにちは!!」

「よく言えました。なでなで。」

「えへへ～。」

「今どこか発音がおかしかったよな・・・？まあなのはも嬉しそうだしいいか。」

「将を射んと欲すればまず馬を射よを地で行ってるわね・・・京、恐ろしい子!!」

「とりあえず入口は邪魔になるから入れてもらわないか？」

「そうだな、なのは案内頼めるか？」

「うん!!こちらになりまーす。」

なのはに案内されて、恭也達は４人席に座った。

ふと恭也が周りを見ると、今日はいつもよりお客が多いように感じた。

少し気になりもう少し注意して見ると、どうやら川神学園の生徒がほとんどであった。

「あれは・・・キャップか。それにあっちはガクトとモロ。」

「他にもワン子やモモ先輩もいるよ。あ、大和もだ。みんな考えることは一緒みたいだね。」

「どうやら本当にみんな宣伝してくれたようだな。」

「そうだね。」

恭也達が言うように、他の風間ファミリーの面々も考えることが同じようで各自新しい友達を連れて翠屋に集まっていた。
キャップはずいぶん丸い、ぽっちゃり系の男子生徒と一緒に来ているようだった。
ワン子は恐らく剣道をやっているだろうと思われる女生徒、他の面々もそれぞれ友達が出来た様である。
こうして集まるのは自然な流れでもあった。
翠屋は最近出来た店であるため知名度はないが、一度食べたことのあるファミリーの面々はその味が保障出来る。
新しい友達を作るための話題作りに翠屋の存在は一役買ったのだ。
また始業式が午前中で終わり、丁度ランチタイムなのも理由の一つであった。

「何々なんの話？二人でイチャイチャしててイケナイんだー。」

「店員さん、彼女にオレンジジュースを、私のおごりで。」

「わーいラッキー、でもトマトジュースの方がいいわ！！」

「それはダメ。」

「なんで!?」

「せめてちゃんとメニューを見てから店員呼ぼうぜ。」

「うちにトマトジュースはない。なのは、俺は抹茶宇治茶で。」

「不破、そんなものも載っていないぞ。」

「裏メニューだ。」

「そうなのか?」

「そんなのありません!!すいませんこの兄よく真顔でウソをつくんです・・・」

恭也達も他の面々同様、新しく出来た友人とまったりしていた。
翠屋は最近出来たこともあり、今時のお洒落な雰囲気があった。
音楽も流れているが、有線ではなくその日その日の気分に合わせて桃子が選んでいた。
今も音楽が流れているが、忍はあることに気付く。

「ねえ京、この声ってSEENAよね?」

「多分そうだね。私は忍からCD借りるくらいだしこの曲は知らないから確証ないけど・・・」

「それがどうかしたのか?」

SEENAとは作詞作曲を自ら手掛けるシンガーソングライターで

あり、綺麗な歌声で聞く人を穏やかにさせる、癒し系の歌い手として女性を中心に人気が高い女性歌手である。
また『天使のソプラノ』の二つ名を持ち、英国と日本をまたにかけて活躍している。

「京は知ってるけど、私はＳＥＥＮＡのファンだから限定のＣＤとかも全部買って聞いてるの！！・・・でもこの曲知らないのよ！！」

「アルバムに入ってるマイナーな曲なんじゃないのか？」

「そういう曲も全部聞いてるわ。それにこんないい曲だったら忘れないわよ。」

「ああ、この曲はつい先日完成して来月出す予定らしいから知らないのも無理ない。たしか曲名はＭＹＨＥＡＲＴ・ＭＥＭＯＲＩＥＳだったかな。」

「ちょっと、どうして不破君がそんなこと知ってるの！？というかなんでそんな曲が流れてるのよ！？」

「月村さん、他の客もいるから少し声のボリュームを下げるんだ。」

「むぅ・・・」

「どうしてと言われても、今朝配達で送られてきたから母さんが流したんだろうな。」

「恭也、忍はなんでそんな曲を恭也の家に来るのか聞いてるんだよ。」

「そうそれ！！」

「ああ、なるほど。ゆうひさんとは個人的に知り合いなんだ、だからだな。」

「ゆうひってＳＥＥＮＡの本名よね・・・知り合い？」

「ああ。」

「確かにＳＥＥＮＡは川神市を第二の故郷って呼んでるのは有名な話だし・・・知り合いがいてもおかしくないけど・・・」

「いや月村さん、やっぱりおかしいだろ。こいつ最近川神に引っ越して来たんだぞ。」

「子供のころは毎日私たちと一緒にいたしね。というか私も知らなかったよ。ねえ恭也、私と言うものがありながらＳＥＥＮＡとはどういう関係なの！？」

「どうした京？ゆうひさんはイギリスで護衛していた時の知り合った。護衛対象の友達だったらしくすごく感謝していて新曲を出す度に送ってくれると約束してくれたんだ。」

「そうなんだ。疑っちゃってごめんね。」

「なにがだ？」

「不破は相変わらずだな。」

「わからないならそれでいいよ。」

「いいないいな！！ねえ不破君、ＣＤ送られてきたら私にも貸して！！というか私の分ももらって！！」

「まあ貸すのは構わんが自分の分は本人に言ってくれ。日本にいる間はだいたい川神市にいるそうだし翠屋も気に入ってくれたそうだから多分そのうち会えるだろう。そのときに紹介する。」

「本当！？ありがとう！！」

「忍・・・距離、近いよ・・・」

「あ、京・・・つい興奮しちゃって、ごめんね。」

「それにしても、そろそろいい時間だな。とりあえず出るか。」

「ねえ、せっかくだからこのまま遊ぼうよ！！」

赤星の言うように、すでに恭也達が翠屋に入ってから2時間が経過していた。
忍はＳＥＥＮＡの話題が出たことからカラオケに行きたくてうずうずしているようであった。
京や恭也は普段風間ファミリー以外の面々とは遊びに行くことはないが、今回は行くことにした。
その後、忍はカラオケやゲームセンターなどに恭也と京、それに赤星を連れて行った。

おまけ

恭也達が外に出たあと、とある3人組が翠屋に入ってきた。
お客に気付いたなのははすぐさま入口に向かって行った。

「いらっしゃいませ!!何名様ですか?」

「おやおや、これはかわいらしいですね。3名です。」

「カワイイー!!」

「ここは・・・天国か・・・おじょーちゃん、お手伝い?えらいねー。」

「あ、ありがとうございます。こちらにどうぞ・・・」

「準、少し引かれていますよ。」

「コラー!!ハゲがそんな目をしていいと思っているのか!!」

「俺はただ純粋に頑張っている幼女を愛でていただけだ!!なにもやましいことなどない!!」

「準、あのマスターが凄い形相になっていますし少し自重した方がいいかと。」

「うお!!あれは恐らく父親だな・・・仕方ないこれで出入り禁止にされては堪らないからな。しかし・・・働く幼女・・・なんて素晴らしい!!」

「全然自重する気ないよこのハゲは。」

「ハゲハゲ言わない！！」

おまけ２

恭也が入学してからしばらく経ったある日・・・

「Ｈｉ、シロー、キョーヤ、久し振りだね。」

「おお、フィアッセか。電話で日本に来るとは聞いていたが、どうしたんだ？」

「久しいなフィアッセ。」

「今日は私たちの命の恩人である二人に何か出来ないかなって思って、プレゼントを持ってきたの。」

「へえ、何をプレゼントしてくれるんだ？」

「おい父さん！！フィアッセ、俺達は褒美が欲しくて君たち親子を守ったわけじゃないんだ。もちろん仕事である以上給料はもらったが、それ以上は必要ない。俺達が守った命が他の人のためになにかしてくれればそれでいいんだ。」

「恭也、それは違うぞ。これは報酬ではなくプレゼントだと言っただろ。お前は友達がプレゼントを持って来てくれたのに断るのか？これはゆうひちゃんがＣＤを送ってくれるのと一緒だぞ。」

「うん、士郎の言うとおり。これは私からの気持ちなの。受けとってくれないかな？」

「むぅ、そういうことなら受け取ろう。余計なことを言ってしまって済まなかったな。」

「ううん、いいよ。それじゃあ・・・はいこれ！！」

「チケットか。」

「うん、こっちが私のツアーの特等席のペアチケットで、こっちは私とゆうひ、それにアイリーンが一緒にやるコンサートのチケットなんだ。ライブの方は恭也の友達も誘ってきてほしいから一応１０人分持って来たよ。」

「そんなに高価なもの・・・貰っていいのか？」

「うん、全然ＯＫだよ。二人に守ってもらったこの命がどういうものか知ってもらいたいの。」

「そうか、ならぜひ行かせてもらおう。きっと仲間達も喜ぶ。」

「うん、コンサートは６月の終わりだよ。ツアーの方は川神に来るのは５月の終わりだから楽しみにしててね。」

「ああ。楽しみにしておこう。」

とある日常の一幕（後書き）

今回はとらハキャラの出番が多くなりましたね。個人的にはまじこいキャラの方がテンポが良くて書きやすいみたいです。まあキャラわからない人は何度も書きますがオリキャラだと思って読んでください。そんなにメインで何度も出てくるわけではないので。

呼んでいる人は違和感などは感じていないでしょうか？違う作品をクロスさせているので読んでいる人の反応が気になります・・・

それではここまで読んで頂きありがとうございます。

世界を回ると出会いも増える（前書き）

久し振りの投稿です。
やっぱり今週は特に厳しい。ですが今週を乗り切れば・・・まあそれでも忙しいのは変わらないんですけどマシにはなります。
そしたら多分更新のペースも上げられればいいなぁ。

世界を回ると出会いも増える

恭也達が川神学園に入学してすでにもうすぐ2ヶ月が経過しようとしていた。
この川神学園には個性的な人間が多く集まる学園として有名であり、恭也達もこの短期間でそのことは大いに納得していた。

なにせ学校に和服でやメイドと共に人力車で登校してくる生徒、ロリコン、両刀、語尾に候(そうろう)と付ける人に始まり、一体どこの国の人間なのか不明な民族衣装を着た人間や一体いつの時代の人だ！！と言いたくなるような教師までいたのだ。

また他にも学校で火を噴いたり異常な数の動物と常に一緒にいるなど奇人変人が多く、個性的にも程があるのではないかと疑問に思ってもいいレベルであった。
とはいえそんな学園生活も1ヶ月もすれば慣れてしまい、これらの生徒も日常の一部と化していた。

金曜日、学校に行くため恭也達が登校している途中、後ろからガラガラと人力車の音が聞こえてきた。

「おい、最高級の変人の一人だ。目を合わせるな。」

大和の言葉にモロやワン子は言われたとおりにする。
しかし恭也は何を言われているのかわからず通常通りにしていた。
というのも恭也はこの人力車の音源が誰なのか知らなかった。
かなり有名とはいえ、広い校舎の中で今まではち合わせしたことがなかったからだ。

人力車は恭也達の前を通り過ぎると急停車し、振り返った。
人力車を引いていたのはショートカットのメイドであった。
またその上に乗っているのは金色のスーツを身に纏い、おでこにバツ印の傷がある青年であった。

「あれは・・・」

「おはよう庶民!!我こそは九・鬼・英・雄!!皆の英雄(ヒーロー)である!!この栄光の印、その目に焼き付けるが良い!!」

「素敵です英雄様!!みなさーん☆おはようございますー。」

「・・・はよーございまーす。」

「はよっすー。」

「フハハハハ、元気がないぞ庶民!!朝はもっと元気でいなければ一日持たんぞ!!」

「君たち、英雄様が挨拶してくださってるんだから・・・キチンと挨拶しないとお命頂きますよ☆」

「でしゃばるな、あずみ!!我より目立つことは許せん!!」

「申し訳ございません!!英雄様ぁぁぁぁぁぁ!!!!」

「構わん、我は寛大だからな・・・ん!?そこにいるのはまさか・・・」

英雄は何かに気付いたようで、人力車から降りて大和達の方へ向か

った。

「おい、あいつ俺様達の方に来てるぞ。」

「おいおい、面倒臭いことにはなりたくないな。」

大和達が話している間にも英雄は近づき、そして・・・

「恭也殿ではないか!!貴方も川神学園でしたか!!」

「「は?」」

突然の事態に大和達の思考が一時停止した。
入学してからあまり経っていないため詳しく知っているわけではないが、普段から自分を一番上に置き他の生徒達を庶民と呼ぶ彼が、自分達の仲間に対してずいぶんと丁寧な対応をしたことに驚いていた。

「やはり英雄だったか。久しいな、イギリス以来か。」

「うむ、まさかここでまた会えるとは。士郎殿は元気ですか?」

「あの父が元気でないところなど想像も出来ん。」

「確かにそうでありますな。しかし同じ学び舎であったにも関わらず今まで知らなかったとは・・・」

「広い学校だ、俺も今まで英雄がいるとは思っていなかった。」

「それにしても恭也殿も元気そうでなによりです。」

「ところでその言葉遣いはなんとかならないか？一応同じ学年のようだし。」

「むむ、しかし恭也殿は命の恩人。我は年齢ではなく尊敬できるかで言葉遣いを変えるのですが。」

「俺としては普通の友人として接してほしいのだが・・・」

「・・・分かりました、いや分かった！！これで良いのだな！！」

「ああ、そちらの方が俺としてもいい。」

「そうか！！だが恭也殿は命の恩人には変わらぬ。これからもその思いを忘れずに接していこう！！」

「英雄様、そろそろお時間の方が・・・」

「むっ、そうか！！王である我が遅刻などをしていまえば他の庶民に示しがつかんな！！それでは恭也殿、また会いましょう！！あずみ、人力車発進！！」

「了解しました英雄様ぁーーー！！」

人力車はそのまま橋を渡り一気に見えなくなった。

「あのメイド、なかなかの身のこなしだな。モロ達にはわからんだろうがスキがない。タダ者ではないな。」

「そもそも人力車で車並みの速度出してる時点でタダ者じゃないか

ら！！」

「あずみはなかなか強いな。一度戦っている姿を見たことがあるが風魔流忍術を使っていた。」

「ほう、忍者の末裔か。」

「なんで忍者がメイドなの！？」

「さあ、あずみは英雄になにかを感じたみたいだが・・・」

「一体あれのどこに魅力があるんだか？」

「そうでもないぞ。英雄は確かに人の上に立つ器だ。」

「そうかぁ・・・？ところで九鬼とはずいぶん親しそうだったな。」

「ああ、イギリスのテロ事件に巻き込まれた時に英雄と会ってな。そのときに敵に狙われた英雄を助けた。どうやら父さんも昔助けたことがあったらしいが。」

「だから珍しく九鬼もあんなに丁寧な対応だったのか。」

「たしかに、命の恩人だったら俺様でも敬語使うって。」

「ククク、きっとガクトの敬語は敬語になってないんだろうね。」

「京、それ言う必要あるか！？」

「それから九鬼財閥に入らないかとスカウトされるようになった。

前は九鬼総帥からは機会があればとのことだったが英雄からは専属になってほしいと言われている。」

「すげぇ、将来安泰だな。」

「だが誰か専属になるつもりはない、と返事をしているのだが中々諦めてもらえん。」

「まあ恭也の実力なら仕方ないな。」

「そんなことよりそろそろ行かないとアタシたちも遅刻しちゃうわよ。」

「ワン子の言う通りだ。俺達もみんな急ぐぞ！！」

キャップが走り出したため、他のメンバーも駆け足で学校に向かった。

放課後、いつものように恭也達は秘密基地に集まり週末について話し合っていた。

「そういえば、忘れていたのだがみんな来月末は空けておいてくれないか？」

「お、恭也がそういうのは珍しいな。バイトのシフトまだだし俺は大丈夫だ！！」

「確かに恭也がそういうこと言うのは珍しいね。どうしたの？あ、ちなみに私は恭也との予定ならいつでも空いてるよ。特に夜とか。」

「京は少しは自重してよね！！」

「実は知り合いからこんなもの貰い、ぜひ友達と来てくれと言われてな。」

恭也はそういうとカバンからチケットを取り出した。
そのチケットを大和が受け取り、中身を確認する。

「なになに・・・っ！！おい恭也、これ本物か！？」

恭也がまるで近所のおじさんから貰った福引券を見せるかのように出したため、大和も心の準備が出来ていなかった。

「ああ。」

「どうしたの大和？もしかしてすごく有名なお店のタダ券だったり！？」

「なにぃ！！俺様は肉なら大歓迎だ！！」

「それで大和、それは一体何のチケットなんだ？」

「・・・『光の歌姫・フィアッセ・クリステラ』、『天使のソプラノ・ＳＥＥＮＡ』、『若き天才・アイリーン・ノア』、クリステラ・ソングスクールが輩出した歌姫達による夢の共演が実現・・・そのコンサートチケットだ。しかも最前列を人数分、つまり８枚。」

「えええぇぇぇぇぇ!?ちょっと、それホント!?」

「それは・・・すごいな・・・」

「マジかよ!!そんなもんオークションにでも出したら1枚で１０万単位の値が付くぜ・・・」

「ＳＥＥＮＡの件でも思ったけど、恭也もキャップみたいに斜め上行くなぁ。でもそんなところも素敵!!」

「さすが恭也だ!!これで来月のメインイベントは決まったな!!」

「これに動じないキャップも流石だわ・・・」

全員が驚愕するのも当然だった。

ＳＥＥＮＡ、フィアッセ・クリステラ、アイリーン・ノア、いずれも世界で積極的に活動している有名歌手である。

もちろん日本でもその知名度は変わらず、その人気は他の日本人有名歌手と比較しても劣らないレベルだ。

さらにいくら日本でも活躍しているとはいえ、世界中を飛び回っているため日本でのコンサート自体は少ない。

また3人ともそこらのアイドルや女優に負けないほど容姿が整っていることから、コンサートのチケットは非常に人気があった。

1人でやるコンサートチケットですら入手困難な物が、3人共演ともなればその価値は恐ろしいものがある。

この1枚を入手するためならいくらでも払うと言う人間がいてもおかしくないレベルだ。

それほどプレミアが付いているチケットを、恭也は8枚も持ってきたのだ。

他のメンバーが驚くのも無理がなかった。

「これ、いったいどうやって手に入れたんだ?こんなの知り合いから貰えるレベルの物じゃないだろ。」

大和は流石にこのチケットが偽物でないか、恭也が騙されているのではないかと思い、恭也に問いかける。

他のメンバーもこれだけのプレミアが付いたチケットをどうやって手に入れたのか気になるようだ。

「と言われても、フィアッセ本人から貰ったものなのだが・・・」

「本人!?」

「ちょっと、恭也ってフィアッセ・クリステラと知り合いなの!?」

「ああ、モロには言ってなかったか?」

「俺様も聞いてねぇよ!!」

「アタシも!!」

「というか多分誰も聞いてないよ。ところで恭也は私の知らないところで一体どれだけ女の知り合いを作るのかな?カナ?」

「京、落ち着いて!!それなにか違うから!!」

「モロ!!ガクト!!京を抑えろ!!」

「めちゃくちゃ怖ぇ!!」

「こんなの僕たちじゃ抑えきれないよ！！」

黒いオーラを放つ京に男が三人がかりで抑える。
3人ともすでに全員涙目となっていた。

「京から少し変な気が出ているのだが・・・俺は何かしたか？」

「まあ、あれだ。恭也は気にしなくてもいいんじゃないか、多分。」

「そうか。」

「相変わらず恭也は予想外な展開に持っていくよなぁ。」

「キャップだけには言われたくないと思うよ！！」

「そうか？あ、そういや恭也はどこで知り合ったんだ？」

「イギリスでの爆破テロの時の護衛対象がフィアッセだったんだ。
そのときのお礼としてこのチケットをくれて、友達と来てくれと言われてな。」

「そっか。だから恭也はＳＥＥＮＡとも知り合いだったんだね。」

その言葉を聞き、京のオーラが消えていった。

「ってＳＥＥＮＡとも知り合いなの！？」

「そちらも言ってなかったか。まあそうだな。」

その言葉に他のメンバーは驚きを通り越して呆れの表情をする。
しかしよく考えればアメリカの大統領とも知り合いな恭也である。
もはや恭也が誰と知り合いでも気にしないことにした。

「それで来月末っていつなの？」

「6月27日の日曜日だ。みんな行けるか？」

「「もちろん！！」」

全員が参加の意思を込めて返事をした。

「よかった。これでだれか来れない者がいるとフィアッセに申し訳が付かないからな。むっ、そういえば・・・」

「まだあるのかよ！？」

「もう僕らお腹いっぱいだよ！！」

「こちらは人数分でないのだが・・・」

そういうと恭也は再び先ほどとは別のチケットを取り出した。

「今度は・・・フィアッセ・クリステラ単独のコンサートチケットか・・・ん、ペアチケット？」

その瞬間、空気が変わった。

「ああ、だから俺とあと一人しか行けないんだ。明日なんだが誰か空いている者はいないか？」

「明日って急だね。」

「実はコンサートの日にちは覚えていたのだが、皆を誘うのを忘れていた。」

「俺も行きたムグォ！？」

何かを言おうとしたキャップは大和に取り押さえられた。

「悪いな恭也、実は俺とキャップは明日とても大切な用事があるんだ。」

「ゴアムガグデボドロ？（そんなのあったか？）」

「僕も明日はクラスの友達と遊ぶ約束をしちゃった。」

「私とワン子も駄目だなぁ。明日は川神院で特別な修行をするんだ。言っておくが極秘の鍛錬だから内容は内緒だ。」

「えっ！！お姉さま本当！？」

「ああ、楽しみにしておけよ。（すまん、ワン子。）」

「うん！！」

「む、そうなのか？約束や修行ならば仕方がない。」

「俺様も明日はデートだからよ。悪いな恭也！！」

「ガクト、ウソは良くないぞ。」

「恭也も結構ウソつくだろ!!てかなんで俺様のはばれゴフ!!」

ガクトが最後まで言葉を紡ぐことは出来なかった。
京が恭也には見えない角度から攻撃したからである。

「恭也、ガクトのはウソじゃないよ。忍を紹介するって約束したから。」

「そうなのか、すまなかったガクト。だがそれなら京も無理だな。皆無理ならば仕方がない、部活で忙しいだろうが赤星にでも聞いてみるか・・・」

「大丈夫。忍には写真渡してるから二人で会ってもらうことにするし。」

「いいのか?」

「うん。元々その予定だったよ。」

「そうか、では明日一緒に行ってくれるか?」

「もちろん!!」
(二人でコンサートなんてこれは誰がどう見てもデート!!こんなチャンス逃すわけにはいかない!!)

(頑張ってね。)

(俺も行きたかったのに・・・)

（いいだろキャップ、京を応援してやろうぜ。）

（ワン子には私から言っておこう。）

（ありがと皆、今度何か奢るよ。）

（おい、京！！マジで明日忍ちゃんと会えるのか！？）

（忍にアドレスと写真送っておくよ。ちゃんと事情も全部説明するから会ってくれると思う。ついでにガクトのいいところとかも言っておくね。）

（うぉぉマジか！！みなぎってきたぁぁぁ！！）

この日はこの後もライブの話題で盛り上がっていた。

おまけ

その日の不破家。

「んふふ～。」

「どうした桃子、ずいぶん機嫌がいいな。」

「だって士郎さん、明日はフィアッセのコンサートでしょ。もう楽しみで楽しみで。」

「しかし店は大丈夫だろうか・・・」

「大丈夫よぉ、なんたって松っちゃんがいるもの。」

松っちゃんは元々桃子と一緒に働いており、翠屋を開いたときに連れてきたアシスタントコックだ。
桃子の3歳年下でかなり若いのだが腕は確かで翠屋では桃子が休みの時は彼女が指示を出していた。
とはいえまだ開店したての店の割には大和達のおかげで学園からもお客が入るようになり、ピーク時には両方がいないと店が回らない。
そのため桃子がこの日を休むと聞いたとき、松尾は必死に桃子を説得していた。

「松尾さんは怨念を込めてお母さんの名前を呼んでたけど・・・」

「気にしない気にしない。」

「いや、あれは歴戦の猛者のみが放てる殺気だったぞ・・・」

「気にしない気にしない。」

おまけ2

「あ、京からメールだ。なになに・・・へぇ明日は不破君とデートなんだ。んで、そのために私に協力してほしいっと。ま、京の頼み

なら仕方ないか。それがなんでこの男子とのデートに繋がるのかは謎だけど。顔は・・・う～ん正直微妙だな～。筋肉質過ぎるのもちょっと・・・あ、でも仲間思いで誰かのために体を張れるのはポイントかな。まあやっぱり最初の印象で決めちゃ駄目だよね。とりあえず会ってみてからにしよっと。」

「お譲様、そろそろ寝ないと・・・」

「ん、りょ～かいノエル。それじゃ京に返信して、おやすみ～」

世界を回ると出会いも増える（後書き）

お気に入り登録が３００件を超え、かなり嬉しいです。
次はついにデート編です。やっと京をヒロインらしく出来そうだ・・・
どんな内容にしようか悩みますが書くのは楽しいので少しテンションも上がってきました。
それではここまで読んで頂きありがとうございました。

どきどきのデート　前編（前書き）

とりあえず忙しい時期を抜けました！！
とはいえ、元々忙しい研究室には変わらないのでそれが少しマシになったかなって思うぐらいですが・・・
とりあえず投稿は3日に一回くらいできたらいいなぁと思っています。

どきどきのデート　前編

休日ということもあり、いつも以上に川神駅は人であふれていた。
そんな中、恭也は京とフィアッセのコンサートに行くため待ち合わせをしていた。
このような人が多い場所で待ち合わせをしなくても、恭也は京を寮まで迎えに行くつもりであった。
しかし、京の希望により川神駅を待ち合わせ場所になったのだ。

「しかし母さんに言われてからとはいえ、待ち合わせの１時間も前に来るのは早過ぎだったな・・・これでは待ち合わせ時間を指定した意味がない。」

現在の時刻は午前１０時。
そして本来の待ち合わせ時間は恭也が呟いた通り、午前１１時。
昨夜、恭也は桃子に今日のことを聞かれたため素直に答えると、いろいろとレクチャーし始めたからだ。

待ち合わせの時間より１時間前から待機しておくこと。
女の子が来た際に自分が到着した時刻は言わず、今来たところと答えること。
そして服装をチェックし褒めること。
道を歩く際は常に車道側を歩くこと。
エスカレーターでは常に低い方に立つこと。
絶対に自分（母親）が言ったと言わないこと。

他にも長い間言われ続け、結局寝るのがかなり遅くなった。
恭也からすれば京と出かけるのはいつも通りのことであるし、なぜ母がそこまで言ってきたのかわからなかった。

とはいえいつも通りの時間に起きて鍛錬は欠かさなかったが。

また朝出かけようとした際にも恭也は桃子に引き留められた。
そして強制的に、どこから持ってきたのかワックスを渡し、髪の毛を整えるよう命令が下された。
とはいえ大げさに変えるのではなく、見る人が見ればいつもよりオシャレをしてきたなと感じる程度であったが。

昨夜と今朝のことを思い出しながら恭也が時計を見ると１０時３０分になっていた。
あと３０分かと思いながら待っていると、近くで知っている気配がした。
そちらの方を向くと、恭也の予想通り京がいた。
いつもと違いうっすら化粧もしているようで、恭也からでもいつも以上に可愛く見えた。
ちなみに恭也は意外と化粧などには詳しい。
なぜなら護衛の時に変装して侵入してくる者などがいるため、見極めなければいけないからだ。

「恭也、早いね。もしかして待たせちゃった？」

「いや、俺もついさっき到着したところだ。京こそ早いな。」

「今日は楽しみだったから・・・」
（なんて素晴らしい会話だ！！まさしくデートの最初に相応しい！！）

そう言うと京は恭也になにか期待するような目で見つめていた。
普段と少し感じの違う京に恭也は少し動揺したが、母の言葉を思い出した。

「今日は化粧もしていて雰囲気が少し違うな。その服も初めてみたが、どちらも良く似合っているぞ。」

「本当？そう言って貰えるとうれしいな・・・化粧とかは普段しないから心配だったんだけど変じゃない？」

「ああ、上手に出来ていると思う。」

「そっか。そういえば今日は恭也も普段と少し違うね。」

「むっ、そうか。俺もワックスなどしたことがなかったから自信がないのだが・・・」

「よく似合ってる。凄くカッコいいよぉ。」

「そう言ってもらえると助かる。少し早いがもう行くか？まずは買い物だったな。」

「うん。」

コンサートは午後5時から始まるのに2人がこんなに早く集まったのは、せっかくだから一緒に遊ぼうということになったからだ。
もちろんこれは京から言い出したことである。
せっかくの二人きりのデートをコンサートのみで終わらせたくはなかったからだ。

京自身も出来る限りのオシャレをしてきたつもりだった。
予想外であったのが恭也もまた普段とは違い、服装や髪に気を使ってきたことである。

とはいえ、そのことに気付いてすぐにそれが恭也の意思であるものではないことには気付いてた。

京は伊達に何年も幼馴染として見てきてはいない。
恭也にとって自分は守るべき仲間であり家族。
そのため恋愛対象として見ていなかった。
恭也は自分の好意に気付いておらず、そのためどれだけ甘えても妹のように扱う。
京はそれに気付いていたが、恭也のタイプがお淑やかな女性であることは知っていたので肉食女子のように接することが出来なかった。

そんな恭也が、今まできっかけもなかったのに京と2人で出かけることをデートなどと考える筈がない。
だからこれは恭也の母親である桃子さんが気を使ってくれたに違いないとわかった。

（ククク。以前翠屋にお邪魔させてもらったときに色々アピールしておいてよかったよ。）

京にとって桃子にアピールすることはある意味賭けであった。
これが息子を誰にも渡さないというような子離れの出来ない母親であれば逆効果であったからだ。
とはいえ実際はそんなこともなく、桃子は京の期待通り後押しをしてくれているようである。
なのはの件といい、京は着々と恭也の周りから崩していくのであった。

恭也達が最初に訪れたのは、馴染みのある商店街の方であった。
こちらは駅の方とは違い、昔から地元の人たちがよく集まる場所で顔見知りも多い。
ちなみに翠屋のある商店街はイタリア商店街といい、新しい町並みに合わせて若い世代が比較的多く集まる。
京がここで買い物をすることを選んだのは理由があった。
それは自分たちの関係を周りの人達に見せて噂をしてもらうためだった。
鈍感な恭也に告白されるため、京は色々手を回していた。

「ねえ恭也、こうして二人で歩いていると周りからはどう見えるかな？」

「ん？この辺りの人たちは昔から世話になっているし相変わらず仲が良いとでも思われるんじゃないか？」

「うー・・・えいっ！！」

「急に腕に抱きついてどうした？秘密基地ならともかく外では流石に恥ずかしいぞ・・・」

「こうしていればカップルに見えるかなって思って。」

「大和や百代も似たようなことをしているしここの人達ではそう思わないんじゃないか？」

「確かに・・・でもきっとそう思ってくれる人もいるよね。」

「傍から見ても俺では京に釣り合わないと思うのだが・・・」

「そんなことない。あ、目的地に着いたよ。」

京が指さした場所は小さな本屋で、キャップが入学と同時にバイトをしている場所でもある。
ここの店長とは昔からの馴染みで、キャップなどは本当の父親のように思ってる。
ちなみに口癖はバッキャロー。

「見事に誰もいないね。」

「失礼なこと言ってんじゃねぇよこのショートカットバッキャローが！！」

「あ、いた。」

「店長の店なのだからいるのは当たり前だろう。」

「おめぇらは相変わらず一緒にいるんだな。他の奴はどうした？」

「今日は二人きりでデート。私たち付き合ったの。」

「お、そいつはよかったなバッキャロー！！」

「そういう冗談はあまりよくないぞ。」

「ん、ごめんなさい。」

「ウソかよ！！んで今日は何の用だ？一応言っておくがいつもみたいに立ち読みだけだったら追い出すぞバッキャロー！！」

「今日はちゃんと買うよ。炎群を入荷したってキャップから聞いたんだけど。」

「おうおう、よくそんな古いタイトル知ってるな！！」

「一応前にネットで探したんだけどなかったんだよね。」

「あったりめぇだバッキャロー！！俺が厳選したチョイスは伊達じゃねえぜ！！」

「確かに私にとっては興味深い本が多い。マニアックな本しか置いてないからお客もほとんどいないんだけどね。」

「一言余計だ！！クロスケ、お前からもなんとか言ってやってくれよ！！」

「京、あまり店長を困らせるな。それに・・・ちゃんと持ち上げておけば普通じゃ手に入らない本とかを入荷してくれるかもしれんぞ。」

「ククク、それは盲点だった。店長、その頭のタオル似合ってるよ。」

「もうお前ら帰れバッキャロー！！」

京の買い物はすぐに終わり時間も余ったため、恭也達は喫茶店で昼

食を食べながら時間を潰すことにした。

「コンサート自体は5時からだが、少し早めに行っておこうと思う。」

「いいよ。でもなんで？」

「チケットのお礼をしに行こうと思ってな。」

「でもそんなに簡単に会えるの？普通はファンの人とかが入れないように警備員がいると思うんだけど。」

「それなら心配いらない。フィアッセの警備をしているのは知り合いの会社だから話を通しておく。」

「おおう、それはまた・・・でもよく考えたら元々恭也は知り合いだし問題ないのかな？」

「まあ恐らくそれで大丈夫だろう。」

「それにしても、この喫茶店に来ると昔みんなに祝ってもらった誕生日を思い出すよ。」

「そういえばこの店だったか。」

「ガクトが“目覚めたばかりの昆虫を採取したセット”を送ってきてつい怒っちゃった。」

「いや、あれは怒っていい場面だったと思うぞ。何匹か生きていたせいで店内に放たれて大変だった。」

「恭也とモモ先輩がいなかったらもうこの店には立ち入り禁止になってたね。」

「あのときは百代が珍しく焦っていたな。」

「それでも一瞬でかなりの数を捕まえてたけど。逆に恭也は冷静だったよね。」

「まあ、虫などは野宿で慣れていたしな。それに御神流を扱う身としては簡単に心を乱すわけにはいかん。」

「さすがだなぁ。」

「そういえば、その髪飾りはまだ着けてくれているんだな。」

「恭也が選んでくれた誕生日プレゼント、とても大切な私の宝物だもん。」

恭也が選んだプレゼントは花柄の髪飾りであった。
女心に疎い恭也は桃子や琴絵に聞いて必死に選んだ記憶があった。

「子供のときのプレゼントだからそこまで良い物というわけでもないぞ。」

「大切なのは気持ちだよ。これは一生大切にする。」

「そこまで言ってもらえるとプレゼントした甲斐があった。」

その後も昔話をしながらまったりして、時間は過ぎていった。

元々お互い話題を振ることはあまりない性格だが、それでもこのような雰囲気は二人とも気に入っていた。
恭也としては仲間の中で優先順位をつけるつもりはないが、それでも二人きりで過ごすなら誰が一番いいかと聞かれると、キャップか京がいいと思っていた。
両極端な性格な二人だが、キャップのように自由奔放な者は一緒にいて気持ちが良く、また恭也からすれば父親に似た性格であることから慣れていることが大きい。
京の場合は自分と同じく静かな環境が好きで、一緒にいて落ち着くのが良いと思っていた。
とはいえ仲間の誰もが大切であるため、もしこの中で誰かが危険に晒されれば命を賭けて助ける覚悟は出来ていたが。

「そろそろ行くか。」

「そうだね。コンサートは初めてだから楽しみ。」

恭也が時計を見ると2時を過ぎており、二人は喫茶店をでてコンサート会場であるホテル・ベイシティへ向かった。

おまけ

忍が待ち合わせ場所に行くと、写真で見た男がいた。

「初めまして、島津ガクト君だよね。」

「その通り、貴方が月村忍さんですね。京から話は聞いています。写真よりずっと美しい！！」

「あははーありがと。こっちも島津君のことは京から色々聞いてる。あ、同じ年なんだし敬語はいらないよ。」

「ああ、よろしく！！」

（うぉぉ、マジで美人だ。しかもなんか好印象っぽいし、京ナイス！！）

「それじゃあとりあえず何処か行こっか。」

「おう！！」

ガクト達はまず喫茶店で腹ごしらえをしながらお互いの自己紹介から始めることになった。

その後、ガクトは風間ファミリーでの京の話を、忍は京の中学時代の話などをした。

「いらっしゃませー！！」

「ん、あれは恭也と京じゃねぇか。」

「え、どれどれ・・・わお、本当だ。」

「どうやら京もうまくやってるみたいだな。」

「ねえ、どうせだしこの後どうなるかつけてみない？」

「ああ、それはやめといた方がいいと思うぜ。」

「え、なんで？」

「そんなことしたら気配で恭也のやつに一発でばれる。そうなったら京にどんなことされるか・・・」

「そんな漫画じゃあるまいし気配でなんて・・・」

「甘いな、恭也はそういう点じゃ普通じゃない。」

「不破君が？・・・ちなみにどれくらい強いの？」

「俺様が知る限り学園長のじいさんを除けばモモ先輩と唯一まともに戦える人間だ。」

「そんなに！？」

「一回だけお互い全力で戦ったことがあるらしいが、結果はお互いに負けって言うだけで教えてくれなかったな。」

「京は怒ると怖いし・・・今回は諦めるかぁ・・・」

「まあ俺様達は俺様達で楽しもうぜ。」

「そうね、それじゃあ次はゲームセンターに行こ！！」

その後ガクト達はゲームセンターやカラオケなどで遊び、日も暮れてきた。

「そろそろ帰らないと。島津君、今日は楽しかったよ。」

「ちょっと待った!!どうやら、俺様マジになっちまったみたいだ。」

「えっ、なにが?」

「熱いぜ、体中の血が沸騰しちまいそうなほどに・・・」

「え〜と・・・」

「好きだ!!付き合ってくれ!!」

「ごめんなさい。」

「返答早!!なんで駄目なんだ!?」

「今日は本当に楽しかったし、友達としてなら遊びたいと思ったよ。ただ、彼氏としては見れないと思ったの。」

「くっ!!だがそれは別に筋肉が気持ち悪いとか生理的に無理とかではないんだな!?」

「うん、むしろそれは男らしくていいんじゃないかな。」

「そうか!!」

「せっかく告白までしてくれたのにごめんね。」

「いや、俺様も急過ぎた気がするぜ。月村にも迷惑掛けたな!!」

「いつか島津君の魅力に気付いてくれる人が現れると思うから、その時は協力するよ。」

「おう、ありがとよ！！」

「それじゃあ今日は帰るね。」

「家まで送っていくぜ！！」

「ありがと、でも迎えの車が来るから大丈夫。」

「そうか、またな！！」

「うん、それじゃあまたね。」

そのまま忍は帰って行った。
その後ろ姿を見ながら、ガクトはへこんでいた。

「ちくしょー、また振られちまったぜ！！でも今まで告白した相手は皆キモイとかばっかだけどこんな風に振られたのは初めてだ。これはまだ脈はあると思ってもいいな！！」

「いやないから！！」

「なんだモロどっから出てきた！！」

「ガクトが京の友達に何かやらかさないか心配でついてきたんだよ。」

「大和もか！！」

「まあ思ったよりひどい結果にならなくてよかったな。」

「そうだね。」

「お前ら見てたんならわかるだろ!!俺様は振られたんだぞ!!」

「でも別に近づかないで欲しいとかは言われなかったじゃん。」

「そうだな、ガクトにしては珍しい。」

「あんなに美人で性格もいいんだ。マジで付き合いたいぜ!!」

「まあ気持ちはわかるけど・・・」

「向こうも友達としてって言ってるんだから素直に諦めろよ。」

「ちくしょー!!いつか絶対モテてやる!!」

その後3人で晩御飯を食べに行った。

どきどきのデート　前編（後書き）

とりあえず前編です。後編も出来るだけ早く更新したいと思います。

そろそろ一回山場みたいなのを出したいところですが、正直百代レベルだとどんな障害も意味がなくて困ります。

ちなみに恭也は今のところ学校で決闘などをしていないためどれくらい強いのかはあまり知られていません。

それではここまで読んで頂きありがとうございました。

どきどきのデート　後編（前書き）

京は恭也がいないときは基本変態です。
その犠牲になるのは基本的に大和かモロかガクトです。ちなみにキャップの場合はピュア過ぎて意味が通じない場合が多いためあまり被害を受けません。
でも恭也がいるとそんなことはありません。

どきどきのデート　後編

ホテル・ベイシティ

政治家や芸能人、スポーツ選手などもよく利用する川神市でも最高級のホテルである。
地下にコンサートホールまで持っており、ここの支配人がＣＳＳ（クリステラ・ソング・スクールの略）の大ファンでもあることから、彼女達が日本で公演する場合はほぼ毎回利用されている。
そのため今回のフィアッセ・クリステラのコンサートもここで行われることが決定した。
当然警備は厳重となっており、さらにこの時ばかりは日本だけではなく海外のセキュリティーサービスまで警備に就くようになっていた。

ホテル自体は一般人でも普通にも入れるようだが、入場者入口の方を見るとすでにファンの一部が隠していたカメラなどを没収されているシーンが見られる。
さらに携帯電話の回収なども行われているようでさすがの京もこの厳重な警備体制に驚きを隠せなかった。
それに対し恭也は慣れているため気にすることなく、入場者入口とは正反対の方に足を運ぶ。
向かった先は関係者以外立ち入り禁止区域である。
その入口で警備していたのは二人組の日本人警備員であり、当然のように引き留められた。

「おい君たち、ここは見ての通り関係者以外は立ち入り禁止だ。一般のファンは地下にコンサート会場があるからあっちのエレベーターで降りるように。」

「フィアッセの知人で今日は公演前にお礼と挨拶をするために伺いました。」

「ふむ、だが知人と偽って近づこうとするファンも多い。何か身分を証明できるものは？」

「不破恭也です。身分証はこちらに・・・すでに連絡は入れているのでフィアッセに取り合ってもらえれば証明できますが。」

「不破恭也・・・確かに来賓リストに名前は乗っている。とはいえこちらも名前だけでは通すわけにはいかない。正直最近のファンはインターネットが発達したせいか異常な手段で不法侵入をする輩もいるのでな。一応念のため関係者の証明が必要なのだ。」

「では、こちらはマクガーレン・セキュリティサービスの方々も警備をしていますよね。」

「どうやらフィアッセ・クリステラ本人が連れてきたようだが、よくそんな名前を知っているな。」

「自分はそちらの関係者でもあります。そちらの方に連絡していただければ証明出来るかと。」

「わかった、少しここで待つように・・・」

警備員がどこかへ連絡を入れるとすぐに中から屈強な肉体をした男が現れた。
そして彼らは警備員と一言二言話をすると恭也達の方に振り向き、近づいてきた。

彼の後ろで、警備員は何を話されたのか驚いたように恭也の顔を見ていた。

「恭也殿、お手を煩わせてしまい申し訳ございません。」

「いえ、こちらとしても厳重な警備は良しとするものです。彼の行動は褒めることこそすれ責めるものは何もありません。」

「ガードマンが学生に頭を下げる・・・なかなかシュールな光景。」

「そちらは?」

「自分の大切な仲間です。今日はフィアッセにお礼を言うため連れてきました。」

「なるほど、素敵なガールフレンドですな。しかしこれではエリスお譲様も報われない・・・か。」

「エリスがどうかしましたか?」

「いえ、こちらの話ですので恭也殿は気にせずとも大丈夫です。」

「そうですか、なにかあれば言ってください。微力ながらお手伝いします。」

「ははは、恭也殿に手伝ってもらうような事件がそう簡単にあっては我々の身が持たないですが、その時はよろしくお願いします。」

「任せてください。」

「さて、元々私と話すためにここに来た訳でも無いでしょうし中へどうぞ。」

「ええ。ほら、京も。」

「あ、うん。」

恭也達は関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉を通り、中へ入って行った。
それを見ていた警備担当は先ほどまでいた学生の二人組について話していた。

「先輩、さっきは何に驚いていたんですか？まあ確かにあんな筋肉モリモリな外人が学生相手に頭を下げるシーンはビックリでしたけど。」

「お前、去年の冬にイギリスで起きたＣＳＳの事件知ってるか？」

「そりゃもちろん。世界的テロリストによる爆破予告事件。しかもそのとき警備に就いてたマクガーレン社の人員は半数以上が重傷になったのはこの業界じゃ有名な話ですし。だから今日だってこんなに厳重な警備体制になってるんでしょ。」

「そうだ、それじゃあそのとき犯人を捕まえたのは誰か知ってるか？」

「いや、先輩も知ってるでしょ。この事件に関しては箝口令が敷かれて俺ら下っ端には教えてもらえなかったじゃないですか。」

「・・・それがあの少年らしい。」

「は！？いやいや、いくらなんでもそれはないでしょ！！」

「それが本当らしい。実際さっきのガードマンも彼がいなければ命がなかったと言っていた。」

「そんな漫画みたいな出来事が本当にあるんですねぇ・・・」

「現実は小説よりも奇なりってことだな。」

二人の警備員は先ほどの少年、不破恭也の通った扉をしばらく見ていた。

恭也達はガードマンに案内され、フィアッセの控室の前まで来ていた。

「こちらです。恐らくフィアッセ殿も恭也殿が来たと知れば喜ぶでしょう。」

「ねえ恭也、なんかこの部屋からすごい笑い声が聞こえるんだけど。」

「ふむ、この気配に笑い声はもしや・・・」

恭也達が案内された部屋に入るとそこには・・・

「フハハハ！！今宵の公演も楽しみにしているぞフィアッセ殿！！」

「うん、ヒデオも毎回来てくれてうれしいよ。あ、恭也！！来てくれたんだ！！」

「ああ、久し振りだな。それに、やはり英雄だったか。」

「おお、恭也殿ではないか！！貴方もフィアッセ殿も歌を聞きに来たのか！？」

「ああ、フィアッセからチケットをもらってな。」

「ねえ恭也、なんで九鬼がここにいるの？」

「ああ、それは・・・」

「うむ、何を隠そう我はフィアッセ殿の大ファンであるからな！！」

「ということだ。」

「ヒデオは私のコンサートには毎回来てくれるんだよ。」

「へぇ、ちょっと意外・・・」

「お主は確か椎名京であったな、そんなに意外なことではないだろう。我も王とはいえ人間、疲れもするし立ち止まりたいと思うときもある。だが王がそのような甘えを持っては愛するべき庶民達に顔向けができんだろう。そんなとき我はフィアッセ殿の歌を聞き、再び立ち上がるのだ。フハハハハハ！！」

「最後も高笑いは意味がわからないけど、まあ少しは納得。」

「そういうわけで我はフィアッセ殿のファンなのだ!!それではフィアッセ殿、我は一足先に会場で楽しみに待っている!!」

「うん、頑張るよ。」

「それでは!!」

そう言って英雄は恭也達が入ってきた扉から出て行った。
それをきっかけに恭也もフィアッセに話しかける。

「フィアッセ、今日は招待してくれてありがとう。」

「ううん、前も言ったけど感謝の気持ちだから。こっちこそ来てくれて嬉しいよ。」

「仲間達もすごく喜んでいた。」

「それなら良かった。ところで、そこにいる可愛らしい恭也のガールフレンドの紹介してくれない?」

「そんな彼女だなんて・・・恭也、この人はいい人だ!!」

「この子は椎名京。前に話したことがあるだろうが俺の大切な仲間だ。」

「スルーされた。椎名京です、よろしく。」

「うん、よろしく。ところでミヤコは恭也の彼女さんでいいのかな

？」

「Ｙａｓ！！」

「普段はそんなにはっきり返事をしないのになぜウソを吐くときだけそんなに張り切る・・・」

「へ～、日本のお人形さんみたいにキレイだね。これがよく言われるヤマトナデシコなんだね。あ、髪の毛触ってもいいかな？」

「だめ。この体は細胞の一つまで恭也の物だから。」

「アハハ～恭也、愛されてるね。」

「ここになんとかしてモロを連れてくるべきだったか。」

「冗談だよ恭也。」

「そうそう。」

「そうか。そういえばフィアッセ、時間は大丈夫なのか？」

「うん、まだ余裕もあるよ。あ、そうだ！！いいこと思いついた！！」

「うん？」

「せっかくだし恭也もミヤコも着替えない？ここには今回以外の衣装もたくさんあるし別の部屋にも男性用があるから二人とも着替えれるよ。」

「いや、俺は遠慮しておこう。」

私も・・・と言おうとした京だったがその言葉を飲み込んだ。
あまり乗り気になれなかったが、フィアッセが京に近づき一言つぶやいたからだ。
（きっとドレスとかに着替えたらいつもと違う印象に恭也もノックアウトだよ。）
（っ！！）

「そう？でもミヤコの方は着替える気マンマンみたいだよ。」

「なに？」

「恭也！！せっかくフィアッセが着替えていいって言っているんだ、着替えよう！！」

「京？」

「それじゃあ着替えるから恭也は一回出て行ってね。外のＳＰに言えば着替えさせてくれるから大丈夫だよ。」

バタンと扉が閉められた

「え、あ、おい・・・」

そして恭也は外にいる顔見知りのＳＰと目が合う。
不思議な顔をされたので事情を話し、とりあえず着替えることにした。

先ほどまでの服とは違い、高級スーツに身を包んだ恭也は扉の前で待っていた。
男の恭也と違い、衣装選びに時間がかかっているようでなかなか扉が開くことはない。
とはいえそれに対し恭也は別に苛立つようなこともなく普通に待っていた
ただあまり開演まで時間がないのではないかと恭也が思っていると扉が開いた。

「え・・・と、恭也、どうかな？」

京が選んだのは肩が露出された大胆な蒼いドレスであった。
とはいえそれでも嫌らしさなどはなく、胸の部分に付いた白い花のブローチがどちらかといえば清楚な印象を与えていた。

「・・・・・・」

「恭也？」

「っ！！ああ、良く似合ってる。一瞬見とれてしまったほどだ。」

「え、それ本当？」
（恭也が初めて私を女として見た！？）

「ああ、綺麗だぞ京。」

「うん・・・ありがとう。」

（でもまだ恥ずかしがらずに綺麗とか言えるのは私を妹として見ている証拠。だけどそれでも一歩前進だ！！）

「それじゃあフィアッセに挨拶だけして俺達も会場に行くか。」

「うん。」

そして部屋に入り恭也達はフィアッセに一言声をかけてから地下のコンサートホールに向かった。
途中、恭也と京に他の客から視線を感じたが、二人ともそれを気にせずホールの最前列へと座った。
そしてしばらくすると会場の電気が消え、ピアノ音とともに舞台でライトアップされたフィアッセが出てきた。
そして歌を紡ぎだす。

フィアッセは確かに歌姫と呼ばれるだけあり、歌が上手であった。
だが京はそれ以上に、この歌声に別の何かを感じていた。
それはどこかやさしい歌。
かつて母親にゴミのような扱われたとき、恭也が抱きしめたときと同じような温かさが歌を通して京に伝わってきた。
そして知らず知らずの内に京の瞳から涙があふれ出す。
それは決して嫌な涙ではなく、京は感情に任せるままに泣くことにした。
その様子に隣で気付いた恭也はそっと京の手を握り、気付かないふりをしていた。
フィアッセの歌は人の心に響き、そして優しく包み込む。
そのことを知っていたから・・・

コンサートが終わり観客がぞろぞろと出口に向かう中、恭也と京はしばらく席から動かなかった。

「恭也、ありがと。」

「ああ。」

「すごいね、歌ってここまで心に響くものだって知らなかったよ。」

「そうだな。俺も初めて聞いた時は驚いた。」

「昔のことを思い出したのに、全然嫌な気持ちにならなかった。」

「フィアッセが前に言っていた。歌を歌うことは自分の魂を人に届けることだと。」

「うん。」

「彼女は歌で人を幸せにしたいと真剣で願っている。だからこそ、俺はこんな人達を理不尽な暴力から守ろうと思った。」

「そうだね。彼女達みたいな人こそ守るべきだよ。」

「ああ、そうだな。それではこの衣装を返して俺達も帰るか。」

「うん、今日は本当に楽しかった。ありがとう恭也。」

「ああ、こちらこそ。」

最後に恭也達はフィアッセに別れの挨拶をしてから帰った。
その際、二人の距離はわずかだが朝に比べて近くなっていた。

おまけ

「フィアッセの歌、すごくよかったわね士郎さん。」

「ああ、さすがはイギリスで光の歌姫と呼ばれるだけはあったな。」

「ほんと、なのはを置いてきちゃったのは心苦しいわ。なにかいいお土産でも買ってあげないと。」

「そうだな。ちなみに桃子、ここにこんなものがあるのだが・・・」

「えっ・・・カギ？」

「ここのスイートルームのカギだ。実はチケットと一緒にフィアッセがくれてな。」

「士郎さん・・・でも駄目よ、なのはも家で待ってるし・・・」

「なのはなら今日は友達の家に泊ってるから大丈夫。なんでも昨日の夜に新しく出来た友達らしくずいぶんと仲良くなったそうだ。」

「そうなの？」

「昨日俺達が帰った時はもうなのはも寝てたし、朝は桃子も準備で忙しくて話せなかったから知らなくても仕方ない。まあ何にせよ家のことは心配いらないということだ。」

「士郎さん・・・」

「さあ行こう。」

「はい・・・」

士郎と桃子はそのままエレベーターでスイートルームがある１６階まで昇って行った。
そして全てが終わって士郎が寝る直前、ふと桃子が思い出したかのように言う。

「この部屋のカギって恭也のチケットにも入ってたのかしら?」

「ああ、そうみたいだな。」

「となると、夢の３０代で孫が抱けるかもしれないのね!!」

「そうだな。とはいえあの息子にそんなこと出来るとは思えんが・・・」

「あら、そんなことないわよ。恭也は結構しっかりしてるし、それにあの子・・・」

「ん?」

「京ちゃん。もう恭也が好きで仕方がないって目をしてたわぁ。今日も一緒に来てたみたいだし孫が抱けるのも近そうね。」

ちなみに、このホテルの鍵を見つけた恭也はすぐにフィアッセに連絡をして返していた。
そしてその鍵はドレスに着替えている間にフィアッセから京へと再び渡された。
しかし結局使うタイミングを脱してしまい、そのまま寮まで持って帰ってしまったのだ。
そのため・・・

「ただいま。」

「おうお帰り!!コンサートはどうだった!?」

「凄くよかったよ。キャップも行きたそうだったのにごめんね。」

「ま、仲間のためなら仕方ねぇよ。気に済んな京。」

「これ、一応お礼ってわけじゃないけど・・・」

「ん、鍵?」

「ホテル・ベイシティのスイートルームの鍵。使うタイミングもなかったから代わりに使って。ちなみに二人部屋だからだれか好きな人を連れて行ってね。」

「おお!!スイートルームとか普通じゃ絶対泊まれない部屋じゃん、いいのか!?」

「うん、これくれたフィアッセも好きに使っていいって言ってたし。」

「そうか!!それじゃあ遠慮なく使わせてもらうぜ!!」

「ただいま～。」

「お、大和だ!!京も好きなやつって言ってたし大和と行ってくる!!」

「うん、楽しんできてね。ククク。」

「任せろ!!」

「おわっ!!キャップ一体どうしたんだ!?」

「いいから来い!!滅多に経験できないことをさせてやるよ!!」

「ちょっ!!せめて理由くらいいいいいい!!」

「ハァハァ・・・二人の今後がどうなるか気になって夜も寝られないよ・・・」

どきどきのデート　後編（後書き）

フィアッセは京の恋愛を応援していたので京も毛嫌いしていません。また原作より少し早くファミリー入りしたため京が丸くなっていますね。京ファンの人はどう感じているのでしょうか？

こういった細かいさじ加減としっかりした物語の軸を一本作ることが今後の課題ですね。

それではここまで読んで頂きありがとうございました。

恭也の一日　朝（前書き）

かなり更新が遅くなってしまいました。
これからも更新が不定期になってしまいそうですがなんとか書ききりたいと思います。

恭也の一日　朝

恭也の朝は早く、朝5時には目を覚まし顔と歯を洗いジャージに着替える。
このとき朝のジャージは学校指定ではなく虎のロゴマークが入った黒ジャージである。
着替え終わるとバナナを一本食べ、朝の鍛錬を始める。
まずは体を温めるために町内をランニングをする。
その際、毎日同じ時間に動物達の散歩をしている動物病院の先生に挨拶を交わす。
その後再びランニングを再開し、学校の通学路である河原に辿り着くと今度は恭也と同じく朝の鍛練をしているワン子と出会う。

「おはようワン子。今日も熱心に鍛錬しているな。」

「あ、おはよう恭也！！当たり前よ、なんたって私の目標は川神院の師範代になってお姉さまの隣に立つことなんだから！！1日たりとも無駄になんか出来ないわ！！」

「いい心がけだ。そういえば今日は百代はいないのだな。」

「あ、うん。お姉さまならまだ寝てるわ。昨日は結構遅かったみたいだし。」

ワン子がこの時間から鍛練をしているのは自主練のようなもので、川神院の修行というわけではない。
しかし妹が可愛くて仕方がない百代はワン子に付き添ってこの時間から鍛練をすることもある。
とはいえ百代は基本的には川神院での鍛錬以外はあまりしない。

なぜなら川神院の鍛錬自体がかなり密度の濃いものとなっているため、それ以上をしようとするワン子の方が異常なのだ。

「そうか、なら今日は俺が鍛錬に付き合おうか？」

「本当！？」

「ああ、俺も一人で家の道場を使っても寂しいしな。それに一人で鍛錬するよりも得られるものがある。」

「うんうん、ならお願い。」

「よし、ならこのままアップも兼ねてランニングで行くか。」

「ハイ！！」

二人は河原から再び走り出し、道場がある恭也の家に向かった。

二人は道場に着くと準備体操を始めた。

お互い体が大事なため、怪我のないようにかなり念入りにすることを忘れない。

準備体操を終えたワン子は道場に飾ってあった薙刀を手に取ると素振りを始めた。

もちろんこの薙刀は本物ではなくレプリカである。

恭也が川神に来て少し経った頃、家に道場があると聞いたワン子がいつでも恭也と戦えるように川神院から持ってきたものだ。

ワン子が素振りを始めたのを見た恭也は、同じく小太刀を手に取り素振りを始めた。
最初はゆっくり丁寧に剣を振り、小太刀は自分の体の一部であることを認識させる。
そして徐々にその速度を上げていく。
最初は隣でその素振りを見ていたワン子であったが、速度を上げられるにつれてその剣先が見えなくなっていた。
そしてついには小太刀だけではなく恭也の腕すらも見えなくなっていった。
そんな姿を見たワン子は自分も頑張らなければと思い直し、素振りを再開させた。
恭也とワン子が黙々と素振りを続け、どちらからというわけでもなく素振りを終えた。

「ふう・・・」

「ハァ、ハァ、ハァ～・・・よし、準備運動終了!!さあ恭也、勝負よ!!」

「ああ、といっても模擬戦だ。お互い小太刀と薙刀、それに肉体のみでいいな。」

「うん!!」

そしてワン子は武器を構えると恭也の様子を探る。
模擬戦とはいえ勝負であるため、合図などをすることはなかった。
恭也は二刀の小太刀を握り、ワン子の出方を伺っていた。
元々恭也とワン子には次元が違うと言ってもいいほど力量に差がある。

そのため恭也から攻めてしまうと一瞬で勝負が付くため、基本的にはワン子が攻めて恭也が守るというようになっていた。
最初はこれに不満を持っていたワン子であったが、この模擬戦で直接攻撃を受けた恭也からアドバイスをもらえることと自身の弱さから今では不満もなくなっていた。

ワン子はなんとか恭也の隙を見つけようとするが、なかなか見つけられない。
そのためお互いに睨みあったまま時間のみが過ぎていた。
このままでは意味がないと感じたワン子はついに攻撃に出た。

「隙が見つからないなら、出来るようにするのみ！！」

恭也との距離を一気に詰めて、ワン子は薙刀で切りかかった。
昔と違い、きちんと川神院で学んできたワン子の攻撃は素人がどうにかできるレベルを遥かに超えていた。
キャップも昔から喧嘩などをしているためそこそこ強いが、今のワン子には太刀打ち出来ない。
ガクトであればもしかしたら勝てるかもしれないが、それでもやはりワン子の方が上であろう。
しかし今ワン子が相対しているのは、すでに武神として世界にその名を轟かせている川神百代が唯一負けたと公言している男、不破恭也である。

キン！！と金属がぶつかり合う音が聞こえた。
恭也がワン子の斬撃を小太刀で受け止めた音だ。

「ふっ！！」

受け止められたワン子だが、相手の実力は百も承知と言わんばかり

に連撃を加えた。
薙刀での斬撃だけではなく、突きや払いも含めて恭也に迫る。
薙刀の間合いは他の武器と一線を画しているといってもいい。
そのため恭也のように間合いの短い小太刀のような武器とは相性がいい筈であった。
しかしワン子の攻撃は恭也に受け止め、ときには受け流され一撃も入らない。

ワン子はお世辞にも体格に恵まれていないため、純粋な力勝負をすることが出来ない。
そのためワン子は己の素早さを上げ、薙刀の間合いから相手を攻撃することで相手に反撃をさせずに攻撃するというスタイルを決めた。
ワン子がこのスタイルで戦えば、かなり実力が上の強者でも十分通用する筈であった。
しかし、何度攻撃をしても恭也の防御を抜くことは出来ない。
それどころか無茶な攻撃のせいで段々ワン子の方に隙が出来始めた。
もしこれが普通の勝負であれば一撃をもらっているのはワン子の方であった。

「っ！！それなら！！」

それが分かったワン子は一度攻撃の手を止め、大きく後ろに下がり間合いを取った。
そして薙刀を頭上で回転させ、気を溜めていく。
今までのスタイルでは恭也に届かないと感じたため、一撃の大きさで勝負に出たのだ。
一見隙だらけの様に見えるが、もし今のワン子に不用意に近づけば切られるのは相手の方であった。
恭也もそれが分かっているし、あからさまに隙があるならともかく、基本的に攻撃をしない恭也はワン子が力を溜め終わるのを待ってい

た。

「行くわよ!!川神流・・・大車輪!!」

最大まで気を溜め終わったワン子が、一気にその薙刀を振り下ろす。
それは今までとは速さも力強さも圧倒的に違う、ワン子が出せる最大の一撃であった。
さすがの恭也もこれをまともに受ければ無事では済まない。
恭也はその一撃を見て、泣き虫だったワン子がずいぶん強くなったと感じていた。

「だが・・・甘い。」

「へっ!?ふぎゃ!!」

恭也はワン子の一撃に合わせて一歩前に出ると小太刀で薙刀を受け流し、ワン子の足を払った。
体を支えていた部分が突然地面と離れ、ワン子は地面とキスするように倒れた。
恭也は倒れたワン子に手を貸すと立ち上げた。

「大丈夫か?」

「う〜・・・ちょっと痛いけど大丈夫。」

「そうか、今日はここまでだな。」

「うん、ありがとうございました。」

「ありがとうございました。」

始まりに合図はなかったが、終わりはきちんと互いに礼をする。
武道家にとってそれは大切なことであるからだ。

「ワン子もだいぶ強くなった。」

「ほんと!?」

「ああ、といってもまだまだ未熟なのは変わらんがな。」

「うぅ～恭也にも全然通用しなかったし、いつになればお姉さまと肩を並べられるのかしら・・・」

「百代と肩を並べるのは並大抵のことではないからな。とはいえ諦めずに挑戦しなければいつまでも届かない。」

「うん、私は諦めないわ!!」

「ああ、それでは先ほどの戦闘を振り返るぞ。」

「ハイ!!お願いします!!」

「まず、最後の大振りは良くない。」

「うっ!!だって・・・速さには自信があったのにどれだけ攻撃しても恭也には一太刀も入れれなかったし・・・」

「それでもだ。百代の様に多少攻撃を受けても怯まず攻めていくようなパワーファイターならばともかく、俺やワン子のようなスピードタイプでは一撃受けただけでも致命傷になりかねない。だから俺

達はこういう戦い方をしてはいけないんだ。」

「恭也もなの？」

「ああ、実際百代の攻撃を一撃でもまともに受ければ倒れるだろうな。」

「そうなんだ・・・」

「だからこそ俺達は常に冷静さを求められる。勢いに任せて攻撃を仕掛けてはいけないんだ。」

「うん。」

「ワン子の武器は薙刀で間合いも長いし最初の攻撃は悪くなかった。腕力や速さは成長期ということも含めてこのまま鍛錬を続けていけば上がるし、あとはどこまで相手のことを見切れるかが今後の課題だな。」

「ハイ！！」

「次だが、ワン子の攻撃は直線的過ぎる。これでは攻撃を見切ってくださいと言っているようなものだ。」

「ちゃんとフェイントとかもいれたわよ？」

「そのフェイントも含めて直線的だということだ。そうだな・・・ワン子、これを見てみろ。」

「え、どれどれ？」

そう言って恭也は握った左手をワン子に見せた。
当然のようにワン子もその手を見る。

「なによ～、何にもないじゃない・・・っ！！」

何もないことを確認したワン子が恭也の顔を見ると、恭也の右手に握られた小太刀がワン子の首元に添えられていた。

「どうだ？」

「どうだじゃないわよ、ずるい！！」

「ずるくなどない。相手の気を逸らしたりするのも一つの技術だ。とはいえ今のはあからさま過ぎるし当然戦闘で使えるようなものではないが。」

「じゃあどうするの？」

「例えば攻撃の際に一瞬だけ目線を逸らす。それだけで敵はそこに何かがあるかもしれないと疑い動きが鈍るものだ。他には・・・このようなことも有効だな。」

「っ！？」

恭也が最後まで言葉を発した瞬間、ワン子が突然振り返って薙刀を振るった。
しかしこの道場には恭也とワン子しかおらず、当然ワン子が振るった薙刀は空ぶった。

「・・・あれ？なんで？確かに今後ろから殺気を感じたのに・・・？」

「今のは気当たりによる残像だ。といってもそれをコントロールして背後から感じるように発したが。」

「そんなこと出来るの？」

「出来る。実際今ワン子は背後に敵がいると思って反射的に攻撃したな。」

「うん、じゃなきゃやられると思ったし・・・」

「今のが実戦であったらワン子は正面の敵に攻撃を受けていた。背後には何もないのに・・・だ。」

「うん。」

「ワン子は基本に忠実だからこういうことを知らなくても十分強くなれるが、少なくとも対処法くらいは知っていた方がいい。もちろん出来るなら使えるようになった方がいいがな。」

「ハイ！！でもお姉さまはこういうことしないわよね。」

「ああ、あれは例外だ。純粋な戦闘能力が高すぎるために小細工をすると逆に弱くなる。」

「う～、お姉さまは使わないのかぁ・・・」

強くなれるのは大歓迎だが目標である百代が使わないのであれば自

分も、とワン子は考えていた。
幼いころからワン子のことを知っている恭也は、ワン子の態度からそのことに気付いたため補足をする。

「別に今すぐどうこう考えなくてもいい。こういう小細工は身につけるのに時間もかかるし、その間に鍛錬した方が強くなれるのは間違いないからな。ただもし自分に限界を感じたりしたとき、このような技術もあるということを思い出してみるといい。」

「うん、そうするわ。私は私で強くなっていつかお姉さまや恭也に追いつくんだから！！」

「ああ、その時を楽しみにしている。今日の鍛錬ではこれくらいだな。」

「うん！！今日は鍛錬に付き合ってくれてありがとね。」

「ああ、こちらもいい鍛錬になった。」

その後、ワン子は川神院に帰って行った。

おまけ

ワン子が帰ったことを確認した恭也は汗を流すためにシャワーを浴び、リビングの食卓に着いた。
不破家では家族４人全員で朝ごはんと晩御飯を食べると決めていた。
そのため士郎と桃子は朝早くに翠屋に行き、ある程度店の下準備を

してから家に戻ってくる。

「なんだ恭也、ワン子ちゃんは帰ったのか？」

「ああ。」

「残念だわ。せっかくだから一緒に御飯食べてもらえばよかったのに・・・」

「ワン子も川神院でご飯があるからな。」

「まあそうよねぇ・・・あの子可愛くてつい構っちゃうのよ。」

「まあワン子も嫌がってはいなかったからいいが、あまり恥ずかしいことをしないでくれ。」

「あら、ワン子ちゃんは喜んでくれたわよ？ねえなのは。」

「うん！！なんかお母さんに抱きしめられると安心するんだって言ってたよ。」

「ほらみなさい。」

「むぅ・・・。」

「ところで恭也、最近京ちゃんとはどうなの？」

「どうとは？」

「もう、相変わらず鈍いわねぇ。この間デートに行って来たんでし

よ。」

「何度も言うが別にデートというわけではない。京は大切な仲間だし二人で出掛けるなど仲間同士ではいつものことだ。」

「この子ったら顔はいいのに何とかならないのかしら?ほらなのは、この写真見てよ。」

そう言うと、桃子は携帯に送られてきた写真を士郎となのはに見せた。

「わぁ、お兄ちゃん格好いい!!それに京お義姉ちゃんも綺麗!!」

「ほぉ～・・・こりゃ恭也には勿体無いな。」

その写真はフィアッセの計らいで着替えさせてもらったときの写真で、コンサートが始まる前に一緒に撮ってもらったものだ。
きちっとしたスーツを着て凛とした表情の恭也と、蒼いドレスを着て少し照れた顔の京は誰の目で見てもお似合いのカップルであった。

「待て、なぜ母さんがその写真を持っている。」

「京ちゃんが送ってくれたのよ。」

「なん・・・だと・・・!!というかいつの間にアドレスの交換などしたんだ。」

「ふふふ、内緒よ。いい女には秘密が一杯なんだから。」

「お母さんってよく京お義姉ちゃんとメールしてるよね。」

「ふふふ、実はあんたのことも結構聞いてるんだから。授業を結構寝てるとか・・・」

「くっ！！」

「まあ学校の勉強については特に言うつもりはないけどね。」

「他に何を知っているのか怖くなるな。」

「例えば、先週別のクラスの女の子に告白されたんですってね？」

「それは丁重に断った。まさか泣かれるとは思わなかったが・・・」

「あらあら、少しは動揺してもいいのに。なんでその子のことを・・・」

「もういいだろう。ご馳走様、それでは学校に行ってくる。」

桃子の言葉をさえぎるように恭也が声を出す。

「はいはい、それじゃあ行ってらっしゃい。また帰ってきたら色々聞かせてもらうからね～。」

恭也は桃子の言葉を聞かなかったことにして家を出た。

京には出来るだけ学校のことを母に伝えないように念押しすることを心に決めて。

恭也の一日　朝（後書き）

今回はワン子との修行となりました。
本当はあまりスポットの当たっていない風間ファミリーを出していこうと思ったのですがワン子だけでそこそこの量になったためそのまま投稿しました。
総合評価が１０００を超え、ＰＶ数も二十万、ユニークアクセスも三万を超えました！！
またたくさんの感想を聞かせてもらえてとても嬉しいです。
これもみなさんの応援のおかげです。これからもがんばっていきたいと思います！！

それではここまで読んでいただきありがとうございました。

恭也の一日　放課後（前書き）

多分こうした方がマジ恋知らない人も少しは読みやすいのではないかと思い、前話に引き続きメインキャラなのにあまり活躍のないキャラにスポットを当ててみました。

恭也の一日　放課後

学校授業も終了し、恭也はガクトとモロの3人だけで帰宅していた。
普段はもう少しいるのだが、今日は他の面々の予定が被り3人だけとなった。

この日キャップはいつもの放浪癖が出たため学校には来ていなかった。
一応島津寮には手紙が残されていて、今は九州にいるらしく距離から考えて恐らく帰ってくるは明日以降であると予想された。
これは中学時代からで、もはや風間ファミリーの面々は慣れていたため気にしない。
それどころかお土産を期待している者もいるくらいである。

大和は知り合いを増やすために放課後は学校に残っていた。
まだ学校が始まって間もない今が一番頑張らなければいけない時期ということで、ここ最近はずっと残って人脈構築をしている。

これは大和の父親の考えで、知り合いを増やすことは将来自分の力になるということからだ。
とはいえ、確かに最初は大和もただ自分のコネを増やすためのつもりでやってきていたが、最近では純粋に知り合いが増えるのが楽しいらしい。
川神学園は変人が多いため、面白い知識を持っている者や特技を持っている者が多いのも、知り合いが増えて楽しい理由の一つであった。

ワン子は授業が終わると、すぐに決闘を出来る相手を探しに行った。
今は剣道部や柔道部などを回っていて、赤星も決闘をしないかと誘

われてた。
血の気が多い川神学園の生徒はすぐに決闘に応じるのですぐに戦えるため、基礎修行も大切だが対人戦が一番いいのかワン子は楽しそうだ。

すでにワン子は毎年一人はいると言われる、バトルジャンキーとして早くも有名になってしまった。
普通は決闘ばかりしていては少しは恨まれそうなものだが、ワン子の容姿と明るい笑顔に皆毒気を抜かれてしまい、再戦を希望している者の方が多い程だった。
ちなみに去年のバトルジャンキーは外国からの留学生で現在骨法部に所属している。

百代はファンの女の子達と一緒にどこかへ行った。
風間ファミリーといる百代は普段とは違う一面を見せ、そのギャップがいいらしく最近は特にファンが増えていた。
特に下級生が現れたのが大きいらしく、その数は今までの倍に膨れ上がったようだ。
百代は年上にもそこそこ人気があったが、その性格上やはり後輩の方が圧倒的に人気が出ていた。

京は最近になって弓道部に入り、今日は部活に出るためにいない。
本来京は人見知りが激しく、部活など以ての他であった。
しかし弓道部の顧問である小島梅子からどうしてもと頼まれ、いつ休んでもいいという条件出たため参加をすることにした。
最もその代わり、参加した場合は部員に弓の指導をすることも条件に含まれたのだが。

梅子は弓道部の顧問だが、嗜んでいるとはいえ弓の家系というわけではない。

そのため弓の椎名とまで云われ、さらに天下五弓に数えられる京のことを知った梅子はなんとか入部してもらい部のレベルアップをと考えた。
また京としても部活は嫌だが自分の弓の腕を鈍らすわけにはいかないと考えていたためこのような形になった。

最初は上級生がこのような特別待遇には納得していなかったが、京の弓を見て考えを改めた。
他とは一線を画する腕を持つ京が自分達を指導してくれれば、その腕は飛躍的に上昇出来ると考えたからだ。
人に嫉妬して落としにいくより、利用して腕を磨き自分が上に立とうとする。
それが川神学園がもつ校風であった。
今のところ京は部員というより臨時で来てくれるコーチの扱いを受けており、京としてもやりやすかった。

このように他のメンバーが全員何かしらの用事でいないため、今日は男3人で帰ることになった。

「あぁ～、彼女が欲しいぜ。」

「唐突だね。昨日も失敗したばかりじゃない。」

「うるせー!!昨日失敗しても今日がある!!」

「言葉だけ聞けば格好いいんだけどね。」

「ガクト、気を落とすな。いつかお前の魅力に気付いてくれる人が現れる。」

「恭也・・・お前からはそんな言葉聞きたくねぇんだよ!!」

「・・・なぜだ?」

「お前先週女子から告白されてただろうが!!しかも3年生とウチのクラスの女子の二人に!!」

「でもどっちも振ったんだよね。なにか理由があるの?」

「告白されたのはうれしいが、俺のどこを見ていいと思ったのかがわからなかった。なにせ二人とも話したこともなかったんだぞ。」

「そんなの付き合ってから知っていけばいいじゃねえか!!」

「そういう考えはあまり好きじゃないし、今は付き合おうとは考えられん。なにせようやく川神に来てお前達と一緒にいられるようになったんだ。出来るだけお前たちといる時間を取られたくもないと思ったしな。」

「お前なぁ・・・」

「てことはファミリー内での恋愛ならＯＫってこと?」

「京やワン子や百代ならということか?」

「そうそう。」

「3人とも魅力的な女性だから俺とは釣り合わないだろう?」

「仮にだよ仮に。」

「むぅ・・・それは考えたことなかったな。」

「俺様はモモ先輩なら俄然ＯＫだぜ！！」

「ガクトには聞いてないから！！」

「むぅ・・・・・・・むぅ・・・・・・・」

「モロ、恭也のやつめちゃくちゃ悩んでるぞ。」

「ごめん、そこまで真剣に考えなくていいから。」

「そうか。だが正直なところどうなるかわからん。あいつらは大切な家族というイメージが強すぎる。」

「まあ恭也はそうだろうね。」

「俺様もワン子や京はガキの頃を知ってるからな、そういう対象には見れん。」

「恐らく向こうもそう考えているだろうな。」

「「それはない。」」

「なぜ二人声を揃える？」

「いや、なんでもないよ。」

「ああ、何でもないぜ。」

このような話をグダグダしながら、３人は帰宅をしていた。

帰宅途中、モロがゲームセンターに行きたいと言ったため、特に用事がなかった二人は着いていくことにした。

「そういえば、ゲームセンターに入るのは初めてだな。」

「俺様もあんまりゲームセンターには縁がないな。」

「まあ確かに風間ファミリーで遊ぶ時はほとんど外だもんね。」

「一応モロに貸してもらったクリハンはたまにやっているぞ。」

クリハンとはクリーチャーハンターの略称で世界的に人気なアクションゲームである。
名前の通り様々なクリーチャーを剣や槍などの武器をで狩っていく。

「あ、やってくれてるんだ。恭也とかは反射神経が半端じゃないしすぐ上手くなりそうだよね。」

「中々難しいが面白い。しかしたまに思うのだが・・・あれなら自分で戦った方が勝てる気がする。」

「あれやってその感想が出てくるのは恭也だけだから！！」

「そんなことはない。百代も同じこと言っていたぞ。」

「この二人に狩られるクリーチャーが簡単に想像できてしまう・・・」

「俺様達はたとえ宇宙人が攻めてきても生き残れそうだな・・・」

「ところでモロはどのゲームをしに来たんだ？」

「あ、僕がやりたいのはこれ。パワードハーツ。」

「格闘ゲームか。」

「うん、だいぶ前からこれをやりこんでてクリアは出来るんだけど中々ファイターランクＳＳになれないんだよね。」

「それはクリアしたときのランクなのか？」

「そうだよ。今までＳＳランクを出した人はいなかったんだけど、最近ついに出した人がいたんだ。だから僕も今日こそはと思って。」

「おお、モロが燃えてるぜ。」

「ああ、頑張れモロ。」

「ありがと、じゃあ行ってくる。」

モロはパワードハーツの台まで歩いていった。

その背中は今までモロとは違い、歴戦の勇者のようでもあった。

２０分後・・・

「駄目だった・・・」

「まあ仕方あるまい。相当難しいのだろ。」

「もう一回チャレンジしたらいいじゃねぇか。」

「そうだね。よーし、頑張るぞ。って対戦者が現れちゃった。」

「ほう、となると対人戦か。」

「負けるなよ。」

「う、うん。右、左、下、下、右斜め前、スタート、スタートっと。」

モロがキャラクターを選択しているときに対戦者が現れたため、まだ決めていなかった。
そしてモロがコマンドを入力をすると、今まで表示されていなかったキャラが出てきた。

「これは？」

「このゲームの隠しコマンドで出てくるキャラのＤＫ（ダークナイト）。特徴は両腕に刀を装備した黒衣の戦士で、早いダッシュと連撃で敵を倒すっいう恭也によく似た闘い方をするキャラだね。」

「ほう・・・」

「お、始まるぞ。」

相手のキャラはいかにもパワータイプと言った感じで大剣を持って構えていた。
対戦が始まるとモロの操作するＤＫは一気に間合いを詰め攻撃する。
相手はガードをしたためほとんどライフを削られなかった。

しかしモロはガードをされた瞬間に技をキャンセルし投げ技をした。
ＤＫの投げ技は地面に叩きつける瞬間に刀を添えて切るをいったものだった。
相手が倒れたのを確認するとＤＫはジャンプし空から刀を下向きにして串刺しにした。
ダメージを負った相手は一度距離を取り、今度は攻めてきた。

相手は大剣を振るい、ＤＫはその攻撃を避けられなかったためガードをする。
しかしどうやらキャラの特性かガードをしても吹き飛ばされるようで、ＤＫにも少しダメージが残った。
そのまま相手は突っ込んできたが、これにＤＫは迎え撃つ。

スライディングで相手を転ばすと、地面に倒れる前に相手を掴み上に投げた。
そしてそのまま空中まで追いかけ、両手の刀と蹴りを巧みに使い連撃を加える。
最後に二刀の刀を合わせるように同時に上から切りかかり、地面に激突させた。

相手のライフはすでに半分を切っており、その上さっきの連続攻撃でどうやら気絶状態に陥ったようだ。
そのチャンスを逃さないと言わんばかりにＤＫの体が光る。

そして気付いた時には相手の背後に立っており、相手は血飛沫を出して倒れた。

ＤＫが「闇夜に消えろ」と呟くと同時にモロの画面にはＹＯＵ　ＷＩＮの文字が飾られた。

「ふぅ・・・」

「決め台詞まで恭也っぽかったな。」

「俺はこんなこと言わん。ところで勝ったのか？」

「うん、でも相手もかなり強かったよ。このキャラじゃなかったら負けてたかも。」

「勝ちは勝ちだろ。てか途中モロの指の動きが見えなかったぜ。なんであれで運動神経悪いんだよ？」

「まあこれは反復練習によるものだよ。」

「おいオメェ！！」

恭也達が話していると、声をかけてくる少女がいた。
どうやら先ほどまでモロと戦っていた少女のようで、赤い長髪をツインテールにしているのが特徴的だ。

「ぼ、僕？何か用？」

「さっきのキャラなんだよ！？ウチこのゲームの家庭用のやつ持ってるけどこんなキャラ出てこねぇぞ。」

「そうなのか？」

「え、うん。このキャラはゲーセン限定の隠しキャラだから家庭用でしかやってなかったら知らないのも無理ないかも。」

「なにぃ！？そんなんあったのかよ！？てことはなんだ、他のゲームでもあるのか！？」

「ここのゲーセンだと後は獣拳もだけど・・・」

「よし、獣拳だな！？オメェちょっとこっち来い！！」

「えっ！！ちょっ、待っ！！」

そのままモロは少女に連れていかれた。
それを見送った二人はこの後どうするか考えた。

「とりあえず、取り返しに行くか？」

「いや、モロは女子と目を合わせられないのを克服したいと言ってたろ。せっかくだからその訓練と思って頑張ってもらおうぜ。」

「逆効果になりそうな勢いだったが・・・」

「それぐらいが丁度いいんじゃね。」

「そんなものか？」

「ああ、てことで俺様達は帰ろうぜ。」

「・・・そうだな。」

結局恭也とガクトはモロを置いて帰ることにした。
その後、モロは頻繁にゲーセンで彼女と出会うことになり、なんだかんだで仲良くやっていく。
視線を合わせられないのは相変わらずであったが・・・

その頃、鹿児島では・・・

「う・・・あれ?ここどこだ?」

風間が眼を覚ますと、そこは知らない場所で畳に布団が敷いており、和風の部屋であった。
現状を把握しようと、昨日までを思いだそうとした。

「昨日は確か・・・森で野宿したんだった。」

恭也に教わったサバイバル術を試そうと森で野宿をしたのだ。

「あれ?でもそのあとは普通に寝たよな?」

「気が付きましたか?」

「ん?あんたは?」

「あ、私は神咲那美といいます。体はもう大丈夫ですか？」

「ああ、ピンピンしてるぜ。俺は森にいたはずなのに何でここで寝てたんだ？」

「それは・・・」

キャップはいわゆる霊によって引き起こされる障害、霊障の被害にあった。

神咲一族の者が祓おうとして山に逃げた幽霊が、寝ていて無防備になったキャップに取り憑いた。

すぐに霊自体は祓ったのが、その時の反動で1日寝たきりになってしまったのだ。

「俺が寝ている間に・・・」

「こちらの不手際で、申し訳ありませんでし・・・」

「なんて面白そうなことが起きてたんだ!!」

「・・・はい？」

「くぅ～、なんてこった!!なんで俺はこのときに寝てたんだ!!くっそ～・・・」

「あ、あの・・・一応命の危険もあったんですけど・・・」

「命の危険結構!!なにより俺はスリルを求めるぜ!!なあ、もしかしてここって霊媒師の家なのか!?」

「え・・・えぇ一応。日本最大の退魔師の本家ですから。」

「おお!!じゃあもしかしてここで待ってたら幽霊とか見れたりは!?」

「だ、駄目です!!本当に危ないんですから!!それに霊障は全国各地で起きるものですからここに居ても見れるとは限りません!!」

「ちぇっ、せっかく幽霊が見れると思ったのに・・・」

「どちらにしてもあなたでは霊力が強くないので見れませんよぉ・・・」

「なんだよ~・・・それじゃあ意味ないじゃん。」

「そうです。だから大人しくしておいてくださいね。いいですか!?絶対ですよ!!一応検査して明日には地元まで送っていきますから!!」

「あいよ、世話になったな!!」

「いえいえ、それではゆっくり休んでください。」

「ああ!!」

那美に厳重に注意され、キャップはとりあえず言われた通り大人しく寝ることにした。

おまけ

川神院

「総代、いったい何をやっているのですカ？」

「おお、八神にルーか。最近の若者がどのような遊びをしておるのか興味があっての、モモからゲームを借りてきたんじゃ。」

「これは・・・クリハンですか？」

「クリハン？」

「八神は知っておったか。」

「ええ、息子の誕生日にプレゼントしましたから。人気過ぎて買うために日本中のゲームショップを回って大変でしたよ。」

「そんなに人気なのですカ？」

「うむ、学園でもかなりの数の生徒がこのゲームをやっているそうじゃ。ほれ、お主達もやってみるといい。」

「いえ、ワタシはやめておきまス。」

「私も子供と一緒にやったことがあるのですが、どうも上手く出来ないようで・・・」

「結構面白いんじゃがのぉ・・・しかしこのゲームの欠点はあれじゃな、素手で戦えないことじゃわい。」

「それは私も思いました。きっと素手ならあのクリーチャー達にも引けを取らないと思っているのですが・・・」

「そういう問題なのかイ？」

「ええ、これがゲームでなければあのようなクリーチャー達など・・・」

「なにかあったのかの？」

「子供にそのことを言ったら白い目で見られました。現実で強くてもゲームで強くないと周りに自慢出来ないよ・・・と。」

「それはお気の毒ニ・・・」

御神本家

「くっ、この！！」

「一臣義兄さん、急いで逃げて！！」

「すまない静馬！！少しだけ時間を稼いで・・・うわ！！」

「一臣さん、静馬さん、いったい何をやっているのですか？」

「やられた！！ん、琴絵か。これは最近うちの若い者達がやっているゲームでな、少しだけ貸してもらったんだ。」

「しかし最近のゲームはすごいですね。義兄さん」

「そうなのですか？」

「ああ、すごく良く出来ている。しかし欠点がある。」

「そうですね。」

「欠点ですか？」

「「ゲームよりも現実で戦った方が強い。」」

「あらあら・・・」

「なによりクリーチャーよりも・・・」

「御影婆さんの方が何倍も強いし怖いし化け物だから。」

「その話、詳しく聞かせてもらおうかね。」

「「へっ？」」

「だれが化け物だって！？覚悟は出来てるんだろうね！！」

「み、御影様・・・」

「婆さん・・・」

「ったく、あんたらの世代は本当にロクなのがいないね。不破と御神の当主が揃って若いのに実力で抜かれて・・・」

「に、義兄さん・・・ど、どうしましょう。」

「お、落ち着け静馬!!さっきのクリハンを思い出すんだ。こっちは二人、あっちは一匹。ゲームが現実になっただけだ!!」

「た、確かに!!・・・あれ、ちょっと待ってください・・・さっき俺達・・・」

「さあ、地獄まで行ってもらおうか!!」

その瞬間、御影から莫大な気が溢れ二人に襲いかかった。
そして二人揃って吹き飛ばされるのであった。
意識を失う瞬間、二人は同じことを考えていた。
そういえば・・・さっきのゲームでもやられたなぁ・・・と。

恭也の一日　放課後（後書き）

初めて出てきた当主達が少しキャラ崩壊してしまいました。まあ元々原作にも名前ぐらいしか出ないですしいいですよね・・・

実は題名を変更しようか迷っています。
というのも恭也以外にもちょいちょいとらハキャラが出ているのと、そもそも海鳴を川神に置き換えていることからこの題名では少し違うのではないかなと思ったりしました。
なのでもしかしたらタイトルが変わっているかもしれませんが引き続きこの作品を読んで頂けたら嬉しいです。

それではここまで読んで頂きありがとうございました。

太陽は沈まない（前書き）

前話のあとがきで書いたようにタイトルの変更しました。
もし急に見つからないなどと思った方は申し訳ございません。

ＣＳＳのコンサートは外伝で出します。
１年生が長すぎて早く本編に入れ！！と思う方もいると思うのですがまだまだ１年生がしばらく続きそうです。すみません。

太陽は沈まない

7月も中頃になり学生にとって最大の山場、期末試験が近づいてきた。
川神学園では中間テストが行われず、この期末試験で赤点を取ってしまうと夏休みに登校して補習を受けなくてはいけなくなる。
風間ファミリーではそれを防ぐため、成績の良い大和と京が他のメンバーに勉強を教えようとしていた。

「さて、それじゃあ始めるか。」

「大和、どの科目から教える？」

「とりあえず全員の苦手科目を聞いてからにしよう。ワン子は？」

「全部！！」

「自信満々に言うなこの馬鹿犬！！この、この！！」

「あわわ、痛い痛い！！なんで！？正直に言ったのに～！！」

「コラ大和、ワン子を虐めるんじゃない。」

「姉さんは一個上だから期末の範囲を探るの一番苦労したんだけど？」

「ワン子済まない・・・力のない姉を許してくれ・・・」

「諦め早！？」

「まあこの時期の大和には俺様含めて誰も逆らえないからな。」

「よ～し、それじゃあ諦めたやつはこっちな！！」

「いきなり逆らってるのがいたよ！？」

「キャップ、せっかく大和が色々用意してくれているんだ。真面目に教えてもらえ。」

「いいんだよ。俺はどうせ成績関係ないし。」

「だがキャップ、それで補習を受けたらしばらく遊べないぞ。」

「大和・・・そんときはサボる！！」

「ほう・・・そんなことさせると思っているのか？」

「なんだよ～・・・脅そうとしたって無駄だからなぁ・・・」

「別に勉強をやれとは言わん。だが補習をサボれば下手すれば退学だ。そんなことは流石に許容出来ん。」

「そういうことだ。まあキャップはまだ頭は悪くないし要点だけ教えるから真面目に受けるんだな。」

「くそ～。」

大和と恭也に言われ、キャップも諦めて勉強し始めた。

この中で赤点の危機にあるのは百代、ワン子、ガクトの３人である。

キャップは元々そこまで頭は悪くないが、すぐに旅に出るといい学校を休むため成績は良くない。
恭也は国語、英語、それに世界史と日本史は大丈夫だが、理系科目が特に苦手でこちらを重点的に勉強する。
モロは得意も苦手も特にないが、そこまで成績の良いというわけではなかった。
それに対し大和、京はともに入試の段階ですでにSクラスに入れるだけの成績があったため、十分勉強を教える資格がある。
特に大和は得意の人脈構築から過去のテストの入手したり、教師を観察してしてテストの範囲を絞るなど、かなり本格的にテスト対策をしているためメンバーからかなり頼りにされていた。
期末テスト前ということもあり、この日の大和は容赦がなかった。
泣こうがわめこうが容赦の無い暴君が現れた瞬間であった。

期末テストが終わり、臨時集会を開くためファミリー全員で秘密基地に向かっていた。
明日の終業式が終わり次第夏休みとなるため、その予定を決めるためだ。

「いや～、まさに地獄だったぜ。」

「誰のためにやったと思っているんだ。恭也にも感謝しろよ。」

「何度も逃げるから捕まえるのに苦労した。しかし大和のテスト予想はすごかったな。」

「ほんと、おかげで助かったよ。」

「俺様もなんとかなったぜ。」

「あわわ、もう思い出したくもないわ・・・」

「ワン子はずいぶんお仕置きされたもんね。」

「お仕置きしたのは京じゃない！！」

「なにか文句でも？」

「何でもないです！！うわ～ん、お姉さま～！！」

「おお～よしよし。ほ～ら泣くな泣くな。」

大和と京のおかげで全員なんとか赤点を免れることとなり、ファミリー全員の顔が明るい。
そのまま校舎を抜けて変態橋を超えると、一人の影が立っていた。
その男は立っているだけで周囲に威圧感を与えるほど、強者の風格があった。

「お姉さま！！」

「ああ、この殺気・・・もしや挑戦者かな！？」

世界が誇る川神院、その総代である川神鉄心には世界中から挑戦者が訪れる。
とはいえ鉄心もかなりの高齢であること、また川神院の総代や学園長としての仕事もあり多忙である。

そのため川神院は、鉄心に挑戦するにはまず百代を倒す必要があるとした。
百代としても世界中から挑戦者が自分を倒しに来るのは大歓迎であったため、これを嬉々として受けていた。

「カワカミ・モモヨだね。私はメッシ・・・格闘家だ。」

「メッシって恭也の話に出てきた太陽の子の!?」

「モモ先輩・・・この人かなり強いよ。」

「ああ、なかなかの風格だ。」

「自分は南米Ｎｏ1と呼ばれているが・・・そんな称号はなんの意味もない。それをそこにいるキョウヤに教わった。」

「久しぶりだな、メッシ。」

「恭也・・・君と戦い、いかに自分が未熟であるかを知ったよ。だからこそ、君が言っていた世界最強の壁を知るため、カワカミ・モモヨに挑戦しに来た。」

「百代は強いぞ。俺よりも・・・」

「だからこそ挑む価値がある。受けてくれるかな、モモヨ。」

「承知した!!時間と場所は今、ここでだ!!」

「感謝する・・・ハアアアアア!!」

メッシが構えて声を上げると、体から金色の炎のようなものが噴き出した。
その炎はどんどん勢いを増していき、近くに立っていたモロやキャップなどは吹き飛ばされそうになる。

「モロ、キャップ、俺の後ろに立っておけ。」

「う、うん。」

「俺は大丈夫だ!!」

「これがメッシ・・・南米Ｎｏ１クラスの実力なのね・・・」

「恭也と戦った時は気の存在も知らなかったはずが、わずか半年でここまでなるか。」

メッシの気がどんどん膨れ上がり、それと同時に筋肉も膨れ上がった。
もはやそこにいたのは先ほどとは同一人物とは言えない存在になっていた。

「キョウヤに負け、クキ・アゲハに負けた私はもういない。今の私はかつてのメッシを超えたメッシ・・・名づけるならそう、スーパーメッシだ!!」

「カッケェ～!!」

「「ダサ!!」」

前者はキャップ、後者はモロとガクトのセリフである。

「でも実力は本物だよ。」

「ああ、確かに前に俺と戦ったときと違い、気を使えるようになっている。だが・・・」

「メッシ殿、準備は出来たな・・・それでは、いくぞ!!」

百代はこれまでの挑戦者相手にしてきたように、一気に間合い詰めて右ストレートを放った。
今までの挑戦者の中にこの一撃に耐えた者はいない。

「ぐあっ!!」

メッシもこれまでの挑戦者と同じようにこの一撃に反応出来ず、吹き飛ばされた。

「勝負有り。姉さんの勝ちだな。」

「さすがお姉さま!!」

「相変わらず瞬殺とか・・・相手は南米Ｎｏ１なんでしょ!?」

「モモ先輩最強過ぎだろ・・・」

「おっかねぇ～・・・」

百代の勝ちを確信した他のメンバーは色々言う。
しかしそれに対し、百代、恭也、京は厳しい目で先ほど吹き飛ばされたメッシの方を見る。

まるでまだ勝負は着いていないと言わんばかりに。
そしてそれは正しかった。
吹き飛ばされた先で、メッシが起きあがったのだ。

「うお！！あいつ立ったぞ。」

「マジかよ・・・姉さんの一撃に耐えたやつは初めて見たぞ。」

立ちあがったメッシにキャップや大和は驚く。
メッシはそのまま近づいてきた。

「さすがだ・・・以前の私では恐らく何が起きたのかもわからないまま倒されていただろうな。」

「私の一撃を受けて立ちあがった挑戦者は久しぶりですよ。」

「気を体中に纏っていなければ先ほどの一撃で終わっていた。噂に違わず恐ろしい使い手だ。」

「まだやれますよね？」

「もちろんだ！！今度はこちらから行くぞ！！」

そう言うとメッシは一気に百代に近づき、連続で攻撃していく。
元々南米Ｎｏ１の格闘家という称号は伊達ではなく、多彩な技を見事なコンビネーションで放っていく。
それは並みの武術家ではすぐに決着が着くであろう攻撃であった。
さらに気による身体能力の強化により、一撃一撃が必殺の威力を含められていた。
それに対し、百代は冷静に攻撃を受け流していく。

「ハイ!!フッ!!トウ!!」

「・・・・・・」

傍目から見れば隙のない攻撃に見えるが、武神と呼ばれる百代には見える隙がある。

百代はそういう隙を見つけては反撃の一撃を加えるが、それをメッシはガードしすぐにカウンターを仕掛ける。

しばらくはそのような攻防が続いていた。

状況は完全にメッシが優勢に見えていた。

「あわわ、お姉さま・・・」

「おいおい、あのモモ先輩が防戦一方になってるぞ。」

「マジかよ・・・」

「ねえ恭也・・・本当にモモ先輩が押されているの?」

「ん?京達にはそう見えるか?」

「えっ?それってどういう・・・」

「ガハァ!!」

モロが恭也に聞こうとすると、突然メッシが百代によって吹き飛ばされた。

突然の出来事に全員の視線が百代に注がれる。

「中々の技とパワーでしたが・・・気をそんな風に使っていてはいつまでも私や恭也には届きませんよ。」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・馬鹿な!?なぜこれだけの攻防をしてモモヨは息も切らさず気の量も減っていないんだ!?いや、そう言えばアゲハと戦った時もそうだった・・・」

メッシの言うとおり、百代の気は最初に対峙した時とほとんど変化していなかった。
対するメッシはダメージこそほとんどないが、先ほどの攻防でかなりの量を減らし、すでに最初の半分程度となっていた。

「恭也、これはどういうことなんだ?姉さんの方が押されていたわけじゃないのか?」

「それは違う。百代は完全にメッシの攻撃を見切っていたからな。」

「でもなんでメッシはあんなに疲れてるの?」

「気の総量の違いもあるが、それ以上にメッシの気の使い方が問題だ。例えばワン子、俺や百代が戦うときにメッシの様に気を体外に放出していたか?」

「えっ?・・・そういえば滅多にないかも。」

「確かにあの使い方をすれば攻撃力、防御力は大幅に上げることが出来るだろう。それこそ今のメッシでも百代の一撃に耐えることができるくらいには・・・だがそれでは長くは持たん。」

「だからメッシの気はあんなに減っているの?」

「そういうことだ。そして体内の気が減ればそれに比例して体力も減る。なにせ気とは生命エネルギーだからな。」

「でもそれならモモ先輩は気を使わずにメッシの攻撃を捌いたのか？」

「それは違う。はっきり言って気を使った攻撃は生身の体では到底受けきれるものではない。百代は必要最大限の気を体内で生成し留めていたんだ。だから消耗が少ないしメッシの攻撃にも耐えれたわけだ。」

「恭也も出来るの？」

「ああ、というより気を使う者にとっては必須の技術と言ってもいい。技のキレや腕力以上に気をどれだけ制御出来るかどうかが戦闘では重要となるからな。その点、百代は気の総量、技術ともに最強クラスだ。」

「よく言う。恭也の方が私よりも上手く気を扱えるくせに。」

「それは気の総量が百代よりも少ないからだ。当然、気の量が多くなればなるほどその制御は難しくなるからな。」

「ふん、まあそういうことにしておこう。」

「必須の技術なのに、アタシはまだ教えてもらってないよ・・・」

「必須とはいえこれはかなりの高等技術だからな。一応言っておくがワン子も無意識でちゃんと使っているぞ。恐らくそういう修行が

ちゃんと組まれているのだろう。本来意識しないでも使えるのがベストだからこそ教えていないのかもしれないな。」

「そうなの！？」

「ああ、他には京も矢に気を加えることが出来るだろう？」

「うん、たしかにあれをすると普段より一気に気を消耗するね。」

「そういうことだ。気を放出し続けることはある意味気の無駄遣いと言える。」

「ならば・・・私の修行は無駄だったというのか・・・」

恭也の説明を聞いたメッシが、自分の努力が無駄であったのではと思い崩れ落ちる。

「そんなことはない。少なくとも気を知って半年とは思えないほどの練度だった。メッシは気の使った戦い方を知らなかっただけだ。今日この戦いでそのことを知った以上更なる高みを目指せるはずだ。」

「だが、私には師と呼べる者がいない。１５歳の頃にはすでに太陽の子と呼ばれ、南米では敵がいなくなった私はそれ以来ずっと独学で強くなってきたのだ。そんな私にこれ以上どうしろというのだ・・・私もキョウヤやモモヨのように、歴史のある日本のサムライの家に生まれたかった・・・」

「甘えるな！！」

メッシの言葉に百代は激を飛ばした。
その瞬間、日本に原因不明の地震が起きた。
もはや動じなくなった気象観測士は「どうせＫＡＷＡＫＡＭＩだろ。」と余裕を崩さなかった。

「強くなろうという意思があれば環境など関係ない！！あなたは一体どれほどの思いで日本に来たのだ！？世界最強の壁が知りたいと、そう言ったのではないのか！？もしや私が世界最強と、本気で思っているのか？」

「だが、君は武神として世界最強の一角に名を連ねているだろう・・・」

「それは私が川神院の家に生まれたから有名なだけだろう。世界は広い、きっと私よりも強い存在などごろごろいる筈だ。なにせこんな一つの街ですら、じじいや恭也という私より強い者が二人もいるのだからな。」

「俺より百代の方が強いと思うのだが・・・」

「なら今度こそ決着をつけるか？」

「遠慮しておこう。百代と本気でやり合えばお互いただでは済まん。御神の剣は守るための剣なのに仲間に向けては意味がない。」

「ま、お前はそういうやつだからな。でも約束は守れよ。」

「ああ。もしお前の戦闘衝動が抑えきれなくなれば、その時は全力で止めよう。お前を守るために。」

「覚えているならそれでいいさ。さて、話の続きだったな。例えばそこの恭也だが、去年の段階で家の誰よりも強くなってしまったが、それでもまだまだ強くなっているぞ。」

その言葉を聞いてメッシが恭也の方を見る。

「なにも自分よりも強い者に教えを受けるだけが強くなる手段ではない。自分よりも弱いものでも、自分にない技術を持っているかもしれない。俺はそう考えながら世界中を回っていた。」

「自分よりも弱い者に教えを請う・・・？」

今までその考えを持っていなかったメッシにとって目からウロコが落ちる思いだった。

「上ばかりを見ず、たまには足元を見てみるといい。そうすれば今まで以上に世界が広く見える筈だ。」

「・・・・・そうだな。」

「もしあなたが望むなら、私から川神院に推薦しましょう。独学でここまで強くなったあなたなら川神院の入門条件にも問題ないでしょう。」

「本当か！？」

「はい、どうしますか？」

「・・・・・少し待ってもらってもいいだろうか。まずはもう少し世界を回って自分を鍛えなおしたいと思う。まだベストを尽くした

とは言えないのだから。」

「わかりました。あなたのことは総代に伝えておきます。もし自分に限界を感じたらまたこの街まで来てください。」

「ああ、ありがとうモモヨ。最後に一ついいだろうか？」

「なんでしょう？」

「私と全力で勝負してくれ。」

「分かりました。」

そういうとお互い構えを取り、必殺の一撃のために気を溜めこむ。全力で気を籠め始めた百代に対抗するようにメッシも気を籠めるが、徐々に百代の気の量に圧倒される。

「これが・・・武神・・・だが太陽は神ですら焼き殺す！！サンライト・・・フラァァァッシュッッッ！！」

「だから名前がダサいよ！！」

メッシの両手から灼熱の球体が現れ、それを百代に向けて放った。それに対して百代も全力で迎え撃つ。

「川神流奥義・・・星砕き！！」

「ウォォォ

そのままメッシを巻き込んだ。
レーザーが通り過ぎ、そこに残ったのは倒れたメッシだけだった。

「これってもう武術じゃないよね！？」

「モモ先輩をからかう勇気がなくなる光景だぜ。」

「きっと俺達があれを受けれたらドラゴンボールのセルみたいに細胞一つ残らないだろうな。」

「恭也なら大丈夫？」

「防御に専念すればなんとかなると思うが、それ以前にあんな大技は出させないことが重要だ。」

「いつになればあのレベルに到達できるのかしら？」

「めちゃくちゃカッケェ～！！」

キャップは目をきらきらさせていた。
その後、百代は川神院に連絡を取り、治療のためメッシを回収していった。
その際、百代が川神院の入門にメッシを推薦していた。

おまけ

ドイツ軍少尉、マルギッテ・エーベルバッハはフランク中将に呼び出された。

「中将、急な召集一体どうしたのですか？」

「うむ、クラウス伯爵を知っているな？」

「はい。あまりいい噂は聞かないですが・・・」

「女癖が悪いことで有名だからな。全く、ドイツ軍の恥と言ってもいい。」

「そのクラウス伯爵がどうかしたのですか？」

「実は私の可愛いクリスを見て一目ぼれしたらしく見合いをさせろと言ってきおった。」

「なんと！？わかりました私の任務はクラウス伯爵の暗殺ですね任せてください！！」

「少尉落ち着け。私もその場で殺してやろうかと思わず銃に手をかけたが、なんとか自制したのだ。」

「素晴らしい自制心です。」

「クラウス伯爵と言えばドイツ軍にかなりの金を渡しているため迂闊に敵に回せん。しかもフリードリヒ家の老人達はこれを良縁と言い見合いをさせる方向で話を進めているのだ！！」

「くっ！！あの老害どもめ！！」

「しかし私は可愛いクリスを絶対にあのような輩には渡しはせん！！そこで少尉！！なにかいい案がないかね！？」

「それならば・・・」

マルギッテは思いついた案をフランクに伝えた。

「確かに・・・それならばあの老害達も黙るかもしれんな。よし、早速作戦開始だ！！少尉、急いで彼に連絡を！！作戦名は・・・バルバロッサ！！」

「ハッ！！了解しました！！」

太陽は沈まない（後書き）

メッシ登場です。作者は結構脇役で出てくるキャラクターが好きなので時々こんな感じで色んなキャラが出てくるかもしれません。

次回から夏休みです。書きたい内容は多いですがあまりやり過ぎると本編に入った時に出来るネタがなくなりそうなので少し自嘲します。

バルバロッサ作戦！！（前書き）

今回はずいぶんと書くのに時間がかかってしまいました。
楽しみにしていただいた方は申し訳ない。
キャラの口調がなかなか安定しなくて、難しかったです。

バルバロッサ作戦！！

夏休みが始まってすぐ、恭也は飛行機の中にいた。
かつて武者修行時代に知り合ったドイツ軍中将、フランク・フリードリヒから頼みたいことがあるという連絡を受けたからだ。

元々、恭也は学生生活を送っている3年間は依頼を受けないつもりであった。
そのことはフランク中将を含め不破恭也のことを知っている人間には全員に伝えていたので知っていた。
しかし今回はどうしても信頼出来る人間でないと任せられないという必死の頼みに、恭也はドイツに行くことを決意した。

とはいえ依頼内容を聞かなければ話にならないのが現状であるが、電話回線では盗聴の恐れがあるため伝えることが出来ないということで、直接ドイツで内容を伝えることとなった。
恭也も軍隊において作戦が相手にバレるということが、どれほど危険かは知っていたのでこれを承諾。
そのため、まだ恭也自身どのような任務を受けるかは知らなかった。

ドイツに到着した恭也は、空港で待っていた軍隊の案内によってフランク中将の家まで向かった。
まるで中世のお城のような外観の家の入口に到着すると、そこにはマルギッテが立っていた。

「マルギッテか、久し振りだな。」

「お久しぶりですね不破恭也。相変わらず底の知れない強さ・・・恐れ入る。」

「それほどのものではない。中将は？」

「こちらです、着いてきなさい。」

恭也はマルギッテに案内され、最上階の部屋に入った。
そこにはドイツでは知らぬ者なしとまで云われた英雄、フランク・フリードリヒがいた。

「お久しぶりです、中将。」

「ああ、久しいな恭也君。今回は無理を言ったにも関わらずよく来てくれた。」

「いえ、以前お世話になった中将の頼みとあれば当然のことです。ところで、自分でなければいけないとのことですがその理由を教えてもらってもよろしいでしょうか？」

「うむ、その仕事の早さは正に軍隊に向いている。さて、私から頼みたいことだが・・・私の娘のクリスは知っているだろう？」

「はい、何度か顔を合せましたから。」

「実は、花よ蝶よと大切に育ててきたそのクリスにとある貴族が交際を申し込んできたのだ！！」

「はぁ・・・」

「しかもその貴族は軍に多額の金を寄付しているため迂闊に敵には回せんのだよ。」

「しかしそれくらいなら断ったところで問題にはならないのでは？」

「いや、私以外のフリードリヒ家の人間がこれに賛成しているためこのままでは既成事実として公表されかねん。しかし私はどこの馬の骨とも知らんような男にクリスは絶対にやるつもりはない！！」

「それと自分が呼び出された理由がよくわからないのですが・・・」

「うむ、ここで話が最初に戻るのだが・・・恭也君、君にはクリスの恋人のフリをしてもらいしばらく周囲の目を欺いてもらいたい。」

「・・・はい？」

「そうかやってくれるか！！」

「いえ・・・今のは返事ではなく、意味がわからずもう一度聞き直したのです。」

「むっ・・・まさか我が愛しのクリスの恋人役に選ばれるという栄誉に不満があると言うのか！？」

「そうではなく、なぜそうなるのかもう少し順を追って説明してください。」

「むぅ・・・そもそもの発端はクラウス伯爵がクリスに一目ぼれをしたことから始まった。」

その後、フランク中将は順を追って説明した。
クラウス伯爵がパーティーの場でクリスに一目ぼれをし、見合いをしたいと言ってきた。
クラウス伯爵はドイツでも有数の資産家で軍にも多額の寄付金を送って貢献している。
本来フリードリヒ家の掟では２０代後半までは己の鍛錬に集中するため恋人など作ってはいけない。
しかしフランク以外のフリードリヒ家の者は、クリスが女であるためこの掟は関係ないと言い、伯爵との繋がりを良縁だと思って話を進めている。
このためこの見合いを簡単には断れないこと。

「そのため私は優秀な少尉に意見を求めたのだ。どうすればこの縁談を断れるかを・・・そして君の名前が出たのだよ恭也君。」

「俺の？」

意外なところで名前が出てきた恭也はマルギッテの方を向く。
マルギッテはフランク中将の右腕で、戦場では猟犬と呼ばれ恐れられている存在だ。
武器はトンファーを使い、接近戦では欧州最強の存在として君臨してる。
軍務に忠実でフランク中将が最も信頼している部下でもある。
また幼い頃からクリスと共に過ごし、お互いに姉妹のような関係で仲がいい。

「個人で我が猟犬部隊を壊滅させたその力、ドイツ軍では知らない

者はいないと知りなさい。」

「つまり、君が恋人のフリをして我が愛しのクリスの傍にいればフリードリヒ家の老害達も迂闊には手が出せんということだ。そして時間さえ稼いでくれればその間に私が伯爵を説得する。なに、老害達さえ邪魔をしてこなければそこまで時間もかかるまい。」

「なるほど・・・時間稼ぎが目的ですか。」

「そうだ。本来なら例えフリでもクリスに恋人など!!・・・だが相手が外部の人間ではなくフリードリヒの者達では軍を動かすという手段が取れん以上仕方がないのだ!!」

「しかし自分などが恋人役など務まるでしょうか?自分とクリスでは傍から見て釣り合わないのでは・・・」

「ハハハ、元々クリスと釣り合う男などいないのだから心配しなくてもいい。軍の者では相手にバレてしまう可能性があるし、普通の若い男ではミイラ取りがミイラになる可能性が非常に高い。私は君の性格も見込んで恭也君ならば、と今回の作戦に賛成したんだよ。クリスのこと、頼んだぞ。」

「・・・わかりました。そこまで期待されたのであればこの依頼、受けさせて頂きます。」

「うむ、よろしく頼む。」

「しかし中将、クリスはこの作戦に賛成するでしょうか?」

「まず反対するだろうな。我が娘は義を重んじているため、こうい

った相手を騙すような手段は嫌っている。」

「なので不破恭也、今回の任務はお嬢様にも気取られてはいけないと知りなさい。」

「なるほど・・・了解しました。」

「ベートーヴェンの調のように美しい我が娘を騙すことは気が引けるが、今回ばかりは仕方がない。このことを知ったクリスは怒るであろうな・・・ハァ・・・」

「不破恭也、私と中将でフォローはするのでお前は気にせず任務を遂行しなさい。・・・はぁ・・・」

後のことを考えた二人からため息がこぼれた。
二人ともクリスに駄々甘なため、このことで責められることが苦痛なのであった。

「わかりました。」

「うむ、では早速クリスのところに行くとしよう。説明は私がするから君は話を合わせてくれ。」

中将はそう言うと椅子から立ち上がりクリスの部屋に向かった。
それに合わせて恭也とマルギッテも中将についていった。

クリスの部屋の前まで着いた中将はノックをする。
すると中から女性の声が聞こえた。

「クリス、入ってもいいかな?」

「父様?どうぞお入りください。」

三人が部屋に入ると、ドイツ人らしい白い肌に金髪のをツインテールにしている少女がいた。
この少女こそ英雄フランク・フリードリヒの一人娘、クリスティアーネ・フリードリヒだ。
友達からはクリスと呼ばれ、日本に強い憧れ抱いていることから日本人留学生の友達が多く、日本語も話すことができる。

「父様、どうしたので・・・恭也殿!?」

「久しいなクリス。」

「お久しぶりです!!今日はいったいどうしてドイツまで来たのですか?」

「それは・・・」

「そのことについては私が説明しよう。」

「父様?」

いつになく真剣な顔の中将にクリスの顔も真剣になる。

「クリスももう立派なレディーだ。そろそろ好きになった者の一人

くらい・・・いるのではないのか？」

中将の声が震え、握った拳からは今にも血が流れてきそうだった。

「いえ、父様のような立派な軍人になるのが自分の夢です。恋愛毎に興味が全くないわけではありませんが、この時期はもっと鍛錬をして自分を高めていかないと・・・」

「そうか！！いい心がけだ！！しかしクリス、私は心配なのだよ。もしかしたらこれから好きになる者が現れるかもしれん。そしてその者が本当は善人ではなく純粋なクリスを騙しているだけなのではないか・・・と。」

「父様・・・私の心配をしてくれているのですね！？」

「ああ、当然だ。本来は掟で２０代後半までは自分を練磨することに全力を注ぎ、それから相応しい婚約者を一緒に探す予定であった。だがそれまでに騙される可能性があるではないかと考え、先に探しておいたのだ。幸い、身近に信頼出来る男がいたことでこの問題はすぐに解決したがな。」

「・・・それはつまり・・・？」

「クリスには恭也君と交際をしてもらう。」

「な、な、な、恭也殿と自分がこ、こここ交際！？」

「なに、そこまで深く考える必要はない。先に交際しておけば悪い男に引っかかることもないと考えただけであって別に今すぐ婚約しろというわけではないのだから。」

「自分はそもそも騙されたりはしません！！」

「何事も経験だ。恭也君はクリスも知っての通り私も認める一本の芯の通ったサムライだが、もしや不満があるのか？」

「そういうわけではありませんが・・・恭也殿にも申し訳がないではないですか。」

「恭也君にはもう了承してもらっている。」

「中将からいきなりの電話で驚いたが、相手がクリスなら断る理由がない。」

「えっ？まさか・・・恭也殿・・・？」

「俺がお前を守ろう。」

「・・・・・あぅ・・・・」

「さて、それでは私は軍務に戻る。二人は仲を深めるために一緒にいるといい。あとクリス、恭也君はしばらく我が家で生活するから後で案内でもしてあげなさい。」

そう言ってフランク中将はマルギッテを連れて外に出た。

その瞬間、膝を地面に付き息を荒く吐き出した。

「はぁ、はぁ、はぁ！！」

「お見事でした中将。」

「これほど己の自制心を狂わさせられる出来事は初めてだった。何度これはウソだと叫びそうになったことか。」

「お譲様も疑っていません。これで作戦の大部分はクリアしたと言ってもいいでしょう。」

「そうだな、クラウス伯爵は女好きだが気が弱いことでも有名だ。こちらが軍を動かすことも視野に入れていることがわかればすぐに引くだろう。」

「とはいえそれでは恨みを買うかもしれませんよ。」

「かまわん!!クリスを守るためなら相手がドイツ軍であっても勝って見せよう!!老害達が邪魔さえしなければこちらも軍を出せるのだからな。」

「ならば我らドイツ軍最強の猟犬部隊、命ある限り中将の敵を喰らって見せましょう。」

「なんと心強い。少尉、私は忠義に溢れるいい部下を持った。」

「もったいないお言葉です。それよりも・・・」

「ああ、すぐに動くぞ。少尉は老害達に報告を頼む。私は3日後のクラウス伯爵との会談で正式に今回の件を断る準備をしよう。では、いけ!!」

「ハッ!!」

「・・・クリスは絶対に誰にもやらん・・・」

クリスの部屋では沈黙が流れていた。
突然の出来事に考えがまとまらないクリスと、恋愛毎に疎いためどうすればいいかわからない恭也。
だがこのままでは話が進まないと、恭也の方から声をかけた。

「嫌だったか？」

「えっ！？いや、そういうわけではないですが、突然の交際しろと言われてもどうすればいいのか・・・」

「そうだな、正直俺もどうすればいいのかわからん。」

「・・・プッ・・・ハハハ、なんだ恭也殿もですか？」

「ああ、今までこういった経験もなかったからな。とりあえず、交際するのだから敬語は止めてくれ。」

「しかし恭也殿は自分の一つ上ですし・・・あの強さには尊敬しています。」

「構わん。俺はクリスとは対等でありたいからな。」

「・・・わかった。これからは敬語を止めよう、恭也。」

「ああ、それでいい。そっちの方がお互い気が楽だろう。まあ突然の出来事でお互いギクシャクしているが、もう少し考えないで普通に接しればいいのではないか？」

「・・・そうだな。ではせっかく我が家に来たんだ、案内するぞ。」

「助かる。この家は広すぎて正直困っていた。以前来た時は執務室と軍の演習場くらいしか用がなかったからな。」

「自慢の我が家だ。ドイツの観光名所としても有名なんだぞ。」

「それだけクリス達の祖先が凄かったということだな。」

「ああ、だから私は尊敬する先祖達に負けないように立派な軍人になることが夢なんだ。」

「クリスならきっとなれる。」

「ありがとう、では早速案内しよう。まずは食堂からだな。」

この日、恭也はクリスに城内を案内してもらった。
もちろん恭也としてもただただ案内をしてもらっただけでなく、万が一この城で襲われたときも考えて逃走経路の確認などもしていた。
この間も少しずつお互いのことを話し合いながら歩いていると、最初に有った気まずい雰囲気はいつの間にかなくなっていた。

（自分はこの人と将来結婚するのか・・・）

クリスにも少し余裕が出来てきて、現状を考えることが出来るよう

になっていた。
クリス自身、フリードリヒ家に生まれた以上は自分で自由に恋愛できる可能性は低いと思っていた。
だがそれでも年頃の娘、理想の男性像くらいはある。
義に厚く、一本の芯を持った男、ある意味恭也はクリスの理想に近い人間であった。
とはいえ例え理想通りの人間でも、そこまで長く一緒にいたわけでもない相手である。
当然すぐに恋愛感情に発展するわけでもなく、クリスはどう対応していけばいいのか悩んでいた。

おまけ

「なにかとても嫌なことが起こっている気がするんだ!!」

「突然叫んでどうしたの京?」

「恭也がいないから少しへこんでいるだけだろ、気に済んな。」

「しかしドイツ軍の中将から直々の依頼とは本当に凄いやつだな。」

「ドイツ軍には強いやつはいるのかな~」

「モモ先輩はそればっかだな。」

「恭也のことだからまた変な武勇伝でも作ってきそうね。」

「そういえば忍が夏休み中はドイツにある実家に行くって言ってたし、恭也の様子を見てきてもらおう。」

「うわ、休暇中の友達を使うとかヒデェ！！」

「それだけ心配ってことでしょ。」

「恭也はドイツか、なら俺はイギリスでも行ってくるかな！！」

「別に張り合うところじゃないから！！」

「やまと～、お姉さんはヒマだから遊べ～」

「ちょっ、いきなり過ぎだ！！」

日本にいる風間ファミリーは平和だった。

バルバロッサ作戦！！（後書き）

というわけでドイツ編、スタートです。
ここから2、3話はドイツでの話になりそうです。

なにやら最近感想も増えてきて嬉しいです。
これからも更新していくので応援よろしくお願いします。

猟犬は獲物を逃がさない（前書き）

気がつけばこの作品も２０話を超えていました。
こうして作者がやる気を無くさずやってこられておるのも応援してくれた皆さんのおかげです。

それでは本編をどうぞ。

猟犬は獲物を逃がさない

クリスと交際を始めた翌日、恭也は普段とは違う慣れないベットの上で目を覚ました。
普段はベットではなく畳に布団を敷いていたため、起きたときに少し違和感を感じていた。
時刻は午前5時、いつも通りの時間に起きた恭也は鍛錬を始めるためにジャージに着替えて鍛錬のため部屋を出る。
とはいえ流石に勝手に外に出て鍛錬をするわけにもいかないため、事前に演習場を使う許可を得ていた。

恭也が演習場に到着とき、いくら軍人でも訓練を始めるには早い時間であったようでそこにはまだ誰の姿もなかった。
軍の訓練の邪魔にならないことにホッとしながら、恭也は広い演習場で一人で鍛錬を始めた。

鍛錬を始めてから一時間ほど過ぎた頃、一人、また一人と軍人が演習場に現れた。
現れた軍人たちは恭也の事を知っていたので、恭也に敬礼をしてから個人訓練を始めた。
そしてある２０人ほどが集まった後、マルギッテが現れると全員即座に整列を始めた。

「猟犬部隊、全員揃っているな。それでは朝の訓練を始める!!」

「ハイ!!」

マルギッテの号令に返事をすると、部隊の者はすぐに隊列を整える。
マルギッテがドイツ軍最強の部隊であると自負するだけあり、猟犬

部隊の動きは素晴らしかった。
一つ一つの動作が並みの軍隊のレベルを遥かに超えており、個人の武力も相当なものである。

「よし、集団訓練終了！！」

マルギッテの号令で集団訓練が終わると、今度は二人一組で組手を始めた。
個人訓練の時間になったのだ。
恭也は邪魔にならないように端の方で鍛錬を続けていたが、なぜかマルギッテが恭也の方に近づいてきた。

「どうしたマルギッテ？」

「我が猟犬部隊は私を含めて２５人。普段は私が他の者の訓練を見るところですが不破恭也、お前がいるなら話は別だ。今から私と鍛錬しなさい。」

「なるほど、いいだろう。」

「いい返事です。以前は不覚を取りましたが今回はそうはいかない。それでは覚悟しなさい！！」

「来い。」

「ハァァァ！！」

恭也の返事を聞くとマルギッテは跳躍して恭也に襲いかかった。
本来の武器はトンファーだが、軍人としていかなる状況でも戦えるようにと鍛えられた格闘術はかなりのレベルである。

さらにマルギッテはたまにいる気の存在を知らずに扱える存在であった。

日本と中国以外では一族の秘伝などのようなモノ以外、ほとんど気の存在は認知されていない。
もちろん名前程度は知られているが、それはあくまで威圧感や殺気などのことであって漫画などで出てくるオーラの様なものが本当に有るとは思われていなかった。
だからこそドイツでは幼い時からすでに神童として圧倒的な戦闘力を持っていたのだ。
マルギッテの様な例は他にもあり、メッシや他の表の強者達もそうであった。

恭也は彼らと戦い、気の存在を教えた。
気の存在を知らずして扱う彼らは総じてポテンシャルが高く、勿体無いと感じたからだ。
そもそも別に気の存在は隠さなければいけないものでもないのも理由の一つである。
マルギッテは他の猟犬部隊にも気の存在を教えたが、今のところ気を意識出来ている人間は彼女一人だけであった。
それも当然のことで気とは本来、十年単位で習得していくモノで川神院のようにその扱いに長けた場所で修行をしても何年も下地があって初めて学べるモノなのだ。
軍隊として何年も訓練をしているとはいえ、1年や2年でどうにかなるものではない。

本来の気の扱いを知ったマルギッテは己を井の中の獅子であると自覚し、今まで以上に苛烈な鍛錬をしてきた。
そしてそれが功を奏して、マルギッテは以前よりもはるかに強くになった。

今この場で恭也に繰り出している一撃も以前の比ではない威力がある。

しかし恭也は幼い頃から気の存在に触れ、武神・川神百代をして自分以上に気を上手く扱えると云わしめた存在だ。
また純粋な戦闘力において、現在のマルギッテをはるかに超えている。
マルギッテの連続攻撃を、全く焦るそぶりも見せずに受け流していく。
そして僅かに出来た隙を見逃さず、マルギッテの腹部に拳を突き出した。
マルギッテはこの一撃を何とか避けたが恭也にとってこれは避けさせるもので、すぐに本命の一撃である回し蹴りが加えられた。
崩された体勢ではこの一撃を避けることは出来ず、マルギッテは吹き飛ばされる。

「グッ！！」

「マルギッテ、鍛錬とはいえ本気で来なければ意味がないぞ。」

「ふ、ふはは、ふはははは・・・相変わらず底の見えない強さだ。だが、だからこそ倒し甲斐がある！！」

そう言うとマルギッテは身に着けていた眼帯を外した。
その瞬間、今までマルギッテを覆っていた猛々しい気から一転して洗礼された澄んだ気に変わっていった。
他の軍人に比べて優秀過ぎたマルギッテは、その力を抑えなければ他の者達とまとも訓練も出来ない状態であった。
そのため、マルギッテは普段から自己制御装置として眼帯をすることにより、己の力を抑えていたのだ。

眼帯を外したマルギッテの気は、確かに先ほどまでよりも静かだが、圧倒的に力強いものであった。

腰に隠していたトンファーを身に着けて構えた。

対して恭也も二刀の小太刀を両手に持ち、相手の出方を待つ。

「全力を尽くして戦える相手に感謝します。Ｈａｓｅｎ！！ｊａｇｄ！！」

「来い。」

「もう行っている！！」

先ほどとは比べ物にならないほどのスピードで、マルギッテは恭也に近づいて攻撃をしていた。

両手に持ったトンファーを回転させながらの一撃は、恭也をしてまともに受ければかなりのダメージを受けることは間違いなかった。

とはいえ本来小太刀とは守りのための剣、どれだけ苛烈な攻撃でもそう簡単に一撃を受けることはない。

恭也は台風の様なマルギッテの攻撃を的確に捌いていく。

「ならば・・・トンファーキック！！」

マルギッテの攻撃は今までトンファーのみであったが、突然蹴りを繰り出してきた。

しかし恭也は元々マルギッテの体術のレベルの高さは警戒していたため、焦ることなく避ける。

さらに小太刀を突き出しマルギッテを狙うがこれはトンファーでガードされてしまう。

今度は自分の番だと言わんばかりにマルギッテは再び攻勢に出る。
だが恭也はマルギッテの左手に握られたトンファーの一撃を右手の小太刀で受け止めると、空いている方の小太刀を上段から振りかぶった。
それをマルギッテは同じく右手のトンファーで受け止めるが・・・

「グッ！！重い・・・腕が・・・」

恭也が加えた一撃には徹が含まれており、ガードの上からマルギッテの腕を痺れさせた。
今追撃を加えられては不味いと判断したマルギッテは、一度距離を取るため大きく後ろに跳躍した。
スピードに絶対の自信があるマルギッテは、一度距離を取れば短いリーチしか持たない恭也相手に優位に立てると踏んだからだ。

「なっ！？」

しかしその判断は間違いであった。
恭也が懐から飛針を投げ、マルギッテはそれを咄嗟にガードする。
その一瞬で恭也は再び距離を詰めてマルギッテに切りかかる。
マルギッテは体勢が崩されたが、なんとかトンファーでのガードが間に合った。
しかしガードした瞬間、トンファーに亀裂が走った。

「馬鹿な！？」

マルギッテにとってこの武器は、世界最硬の木で最高の職人が製作した自慢のトンファーである。
それこそ、力自慢が鋼鉄のオノを全力で振りかぶっても傷一つ付かない筈であった。

それが小太刀の様な小さな武器によって亀裂が走るなど、考えらるものではなかった。

驚愕により出来た一瞬の隙を見逃さず、恭也は小太刀をマルギッテのトンファーに向けて振りかぶった。

亀裂の入ったトンファーでは恭也の一撃を防ぐことは出来ず、粉々に砕けてしまった。

武器を失ったマルギッテはそれでも諦めずに素手で反撃をしようとするが、恭也相手に武器なしでどうにかなるはずもなく、吹き飛ばされる。

「・・・ここまでだな。」

「ぐぅ・・・まだ、負けてはいない!!」

「周りを見てみろ。」

マルギッテが周りを見ると、すでに他の部隊の者達は整列をして二人の戦いを見守っていた。

「くっ、私としたことが戦いに熱くなりすぎて終了の時間に気が付かないとは!!」

「すでに訓練の時間が過ぎている。だから今日はここまでだ。」

「そのようですね。皆すまなかった!!朝の訓練はここまで、解散!!」

マルギッテの合図に部隊の者達は演習場から出ていく。

その中の何人かはマルギッテに近づき、先ほどの戦いの感想などを

言っていた。
恭也も朝食を食べるために演習場から部屋に戻ろうとしたが、部隊の者とは違う人間が近づいてきた。
それは恭也や部隊の者とは別で個人的に朝の鍛錬をしようと来ていたクリスであった。

「すばらしい戦いだったな!!あれほどのレベルの戦いは中々見られるものではないぞ!!」

「クリスか。いや、まだまだ修行が足りん。」

「なるほど、これが日本人独特の謙遜というやつか・・・」

「俺より強い者などいくらでもいるさ。特に気を扱う者は表舞台には出てこない者が多いからな。」

「そうかなのか?正直今の恭也によりも強い者など想像も出来ないのだが・・・」

「いや、すでに日本だけでも自分以上の存在は3人知っている。そういえばクリスは出会った時から無意識にだが気を扱っていたな。」

「そのようだな。父様に聞いたらフリードリヒ家に伝わる秘儀に関わるものらしい。まだ内容は教えてもらっていないがな。」

「そうか、日本や中国以外で気を使う者は大体そのような秘伝になっている者が多いと聞くが、クリスもその例だったか。調子の方はどうだ?」

「ああ、恭也の教えのおかげでだいぶコツは掴んだぞ!!見ててく

れ！！」

クリスはそう言うと、気を体に纏わせた。
まだまだ未熟ではあるが、確かに気をコントロール出来ていた。

「ほう、まさか半年でここまで出来るようになるとは。」

「気を感じるまでに1か月以上かかったが、なんとかここまで形にしたぞ。」

「マルギッテといい、二人ともこの短期間でこれでは先が楽しみだな。」

「ええ、素晴らしい成長ですお譲様。」

「マルさん！！」

部隊の者と話し終わったマルギッテが、恭也とクリスに近づいていた。

「マルギッテか、先ほどはいい鍛錬になった。怪我はないか？」

「ええこの通り、怪我ひとつありません。しかし、以前よりも確実に強くなったつもりでしたが未だお前との距離がどれほどのものかわからないとは・・・」

「マルさんの攻撃も完全に見切っていたな。」

「マルギッテはかなり強くなっていたぞ。何度か危ない場面もあった。」

「越えるべき壁があるというのは喜ばしいことです。不破恭也、感謝してもいい。そして覚悟しなさい、いつか私の牙がお前を捕えることを。」

「自分もまだまだ強くなるからな、いつか恭也がいる高みまで登ってみせるぞ。」

「ああ、楽しみに待っている。」

「さて、それでは私は朝の訓練の結果をまとめなければいけないのでこれで失礼する。お譲様、また後ほど。」

マルギッテはそういうと演習場から退出して行った。

「俺達も行くか。」

「そうだな。」

クリスと他愛のない話をしながら部屋に戻った恭也は、朝食の前に一度シャワーを浴びようと大浴場の方に足を運ぶ。
これは日本の温泉に憧れたフランクが新しく増築したもので、かなりの大きさになる。
フリードリヒ家には多くの軍人が駐在しているため、いくつかシャワールームがある。

基本的にはフリードリヒ家の者とマルギッテ以外は大浴場は使用禁止だが、恭也は特別に使用許可を得られていた。
そのため本来はシャワールームの方に足を運ぶべきであったのだが、大人びているとはいえ恭也もまだ高校生である。
短い期間であるし、せっかく広い風呂があるというならそちらに入りたいと考えてしまったのだ。

このとき大浴場に入れることから恭也にしては珍しく気が緩み、普段行っている気配探知を怠ってしまった。
そのため、本来なら起こる筈のない事件が起こってしまった。
脱衣場でクリスとはち合わせるという事態に、しかも片方は服を全て脱いでしまっている状態でである。

「なっ！！ななななななな！！」

「クリス・・・」

それは美しい体であった。
鍛えられた体は無駄な肉など一切なく、服の上からでは分からなかったがしっかりと付いた筋肉が魅力的であった。
本来なら例え交際していても、このような事態フランク中将が許すはずがない。

「あ・・・あわわわ・・・！！」

見られたのが恭也で見たのがクリス、という構図でなければだが。

「とりあえず・・・扉を閉めてくれないか？」

「す、すまない！！」

ばたん!!

扉を閉めたクリスは顔を真っ赤にして先ほどの光景を思い出す。

「あ・・・あれが男の・・・か、体なのか?・・・あ、あわわ、あわわわわ!!」

「お譲様?いったいどうなされたのですか?」

「ひゃっ!?ま、マルさん・・・なんでもない、なんでもないんだ!!」

「そうですか?とてもそうは見えませんが・・・まあいいでしょう。とりあえず私も汗を流したいのですが・・・」

「い、今は駄目だ!!」

「なぜですか?」

「い、今は・・・その・・・」

また先ほどの光景を思い出し、クリスは顔を真っ赤にしていた。
そのときクリスの後ろで扉が開いた。

「クリス、さっきは済まなかったな。ちゃんと鍵を閉めておくべきだった。」

「不破恭也、大浴場を使っていたのですね。ところでお譲様は一体どうしたのか知っているなら教えなさい。」

「ああ、それは・・・」

「なんでもない！！なんでもないぞ！！さあマルさんも汗を流すために来たんだろう！！なら一緒に入ろうじゃないか！！」

「あ、ちょっとお譲様！？」

クリスは強引にマルギッテの手を引っ張りクリスは扉のなかに入っていった。

その様子を恭也は呆気に取られた顔で見ていた。

「やはりいくら軍人とはいえ、女性にこの体は見難い物であったか。」

幼い頃から苛烈な鍛錬をしてきた恭也の体は傷だらけとなっている。

とはいえ小学校まではまだ浅いものばかりで気にしなくてもいいものばかりであった。

問題は小学校を卒業した後で、奥義を習得するために何度か死にかけたことすらあった。

そのため恭也は基本的に夏でも長袖を着ており、中学校のプールなども担任に事情を話し休ませてもらっていた。

今回の大浴場に向かっていった理由もこれが挙げられる。

不破の家にいたときは別にして、今では大浴場に入れる機会も少なくなっている。

なぜならこのような傷だらけの体では普通の銭湯では入場禁止だからだ。

だからこそ、久し振りの大浴場に気が緩んだのだった。

恭也はクリスの様子がおかしくなったのは自分の傷だらけの体を見たからだと勘違いしていた。
本当は男に免疫のないのに恭也の息子を見たためなのだが、恭也はそれに気付かなかった。

おまけ

ドイツに実家がある忍は、妹であるすずか、叔母である綺堂さくら、メイドのノエルとその妹のファリンと共にドイツに帰っていた。

「ドイツに戻るのも久しぶりね、さくら。」

「そうね。はぁ・・・お爺様に会うのが鬱だわ。」

「まあさくらは帰るたびにお見合いの話ばっか言われるもんね。」

「人事だと思って・・・言っときますけど忍もあと数年もしたら言われるのよ。」

忍の叔母であるさくらであるが実際はそう年は離れておらず、今年で２１歳となる。
そのため、本来であればそこまで焦るような年齢でもないのだが、さくらの実家である綺堂家はドイツでも有数の名家であるため後継ぎは早めに作らなければいけないのだ。

「まあそれはその時になってから考えることだからね。さくら、頑

張って！！」

「まったくこの子は・・・それで、しばらくはドイツに滞在することになってるけど予定は立てているの？」

「まあね、とりあえず留学中に仲良くなった友達と遊んでくるわ。」

「そう、楽しんできなさい。」

「あ、でも明日はさくらと買い物だけどね。」

「ちょっと、聞いてないわよ。」

「あれ、言ってなかったっけ？まあでもいいでしょ？」

「まあ私も家にいて見合い話ばかり聞きたくないからいいけど、そういうことは事前に伝えといてね。」

「は～い。」

「ところでお譲様、京様から頼まれたことはよろしいのですか？」

「ああ、だって不破君がどこにいるのかわからないし無理でしょ。」

「・・・そうですね。」

「もし偶然出会ったらちゃんと身辺状況を聞いておくから大丈夫大丈夫。」

「出会う確率が低すぎます。」

「だから無理って言ったの。まあ別に京も本気じゃないだろうし平気でしょ。」

実は京は本気の本気であったことを忍はまだ知らない。

もし情報を得ることが出来なかったとき、忍の運命はそこで終わってしまうほどに・・・

猟犬は獲物を逃がさない（後書き）

すずかやファリンの名前が出てきましたが、別にリリカルマジカルは始まりません。でもたまにこんな感じでリリカルな名前だけ出てくるかもです。というか実は過去の話でリリカル版アリサは名前は出てませんがちゃっかり出てたりします。

それではここまで読んでいただきありがとうございました。

確認するのは大切だ（前書き）

アンケートありがとうございました。
結果としてSのキャラは出すことに決定しました。

そのため、前々から予定していた内容を前倒しにすることが決定しました。

確認するのは大切だ

恭也がドイツに来てから2日が経った。
最初にハプニングがあったとはいえ、恭也とクリスの仲は良好であった。
とはいえそれは彼氏彼女といった関係ではなく、どちらかといえば友人の関係として良好という意味だ。
このためクリスに彼氏が出来たと伝えても、他のフリードリヒ家の者達が信じようとしなかった。

もちろんこれには理由があり、その理由の一つとしてフランク中将に原因がある。
親馬鹿として有名なフランクが、いくら日本のサムライに憧れているからといって簡単に娘であるクリスと交際を認めるわけがない。
当然親戚である彼らはこれをクリスを外に出したくないだけの策略ではないかと睨んでいた。
とはいえ相手はドイツ軍最強と呼び声の高い猟犬部隊を一人で壊滅に追い込んだ男、不破恭也である。
策略かどうかは別にしても迂闊に手が出せないことには変わらなかった。

「少尉、このままではまずいな・・・」

「ええ、まさかここまで話が平行線を辿るとは思いもしませんでした。」

話を信じないのはフリードリヒ家の者だけではなかった。
なんと今回の交渉相手のクラウス伯爵までもがこの話を信じていなかったのだ。

これは武力に訴えることが出来ないフリードリヒ家の者が、クラウス伯爵に都合の悪いことを伝わらないようにしていたからだ。
そのためクラウス伯爵も反対派がフランク一人に対し、フリードリヒ家全体のバックアップがあるため中々引こうとしない。

またクラウス伯爵が引かない理由は他にもあった。
もちろんこれはクリスの美貌に惚れたこともあるが、それ以上に軍の名門であるフリードリヒ家との繋がりが欲しいからだ
資産家として有名なクラウス家だが、国に対する発言権はそこまで大きくない。
しかしこの縁談が上手くいけば金も力も国内有数のものになり、最大規模の発言力を得ることができる。
そうでなければすぐにでも新しい女の所に行っていた。

このまま話が平行線を辿れば、なし崩しに既成事実となることを恐れたフランク中将はどうするべきか頭を捻っていた。

「一体どうするべきか・・・」

「一つ案が浮かんだのですが発言をしてもよろしいでしょうか?」

「許す。」

「今お譲様と不破恭也の仲が信じられていないのは二人揃ってこの家から出ていないことが原因だと考えられます。」

「・・・まさか少尉!?」

「一度お二人でデートに行ってもらうのはどうでしょうか?」

「駄目だ!!クリスにデートなどまだ早い!!」

「しかしこのままでは時間もありません!!」

「・・・うぬぬぅぅ!!」

「中将、ご決断を!!」

「まさかここまですることになるとは・・・仕方あるまい、彼に伝えてくれ。」

「ハッ!!」

マルギッテは現状を伝えるため、恭也の部屋まで来た。
すると中から恭也の他に誰かいるのか話し声が聞こえた。

「そういえばこの時間はクリスお譲様と一緒にいると言っていたな」

マルギッテは恭也の予定を思い出しながら、ならば後で伝えるか、と思い離れようとした。

「あ、あ、あ・・・きょうやぁ・・・そこ・・あ・・・そこいいぃ・・・」

「ここがいいのか?ならばもう少し強くいくぞ。」

「あっ!!はあ、はあ、あぁぁ・・・うぅん・・・いぃ・・・」

その瞬間、中からクリスのものと思わしき艶のある喘ぎ声が聞こえた。

「一体何をやっているんだ不破恭也ぁぁぁぁぁ!!!!!!」

マルギッテは顔を真赤にして、勢いよく扉を開けて中を見る。

するとそこには恭也に肩を揉んでもらっていたクリスがいた。

突然勢いよく開かれた扉と大声にクリスは驚いてそちらを見ていた。

恭也も扉の前にマルギッテがいることは分かっていたが、なぜここまで勢いよく扉を開けたのかわかっていなかった。

「・・・・・・・・あ?」

「・・・マルさん?いったいどうしたんだ?」

「マルギッテ?」

その光景が目に入り、自分の勘違いであることを理解したマルギッテは顔をさらに真っ赤にさせた。

「いや、その・・・ごほん!!・・・強襲の訓練をしたまでです!!」

「こんなところでか?」

「ば、場所など関係ありません!!優秀である私は何時如何なる場合でも強襲出来るように訓練しなければいけないのです!!」

「相変わらずマルさんは凄いな～」

苦し紛れの言い訳だが、クリスは信じた様でマルギッテを尊敬の眼差しで見ていた。

「信じるのか？」

「当たり前だろ。マルさんは自分に嘘など吐かないからな。」

「うっ！！」

その純粋さにマルギッテは心を抉られた。

「それよりマルさんもどうだ？恭也の肩揉みマッサージは凄く気持ちいいぞ。」

「いえ、遠慮しておきます。それより不破恭也、こちらに来なさい。」

「どうした？」

「なんだマルさん、自分には内緒の話なのか？」

「申し訳ございませんお譲様、ですが極秘任務に関わることなので・・・」

「そういえばドイツにいる間は恭也も任務を任されるんだったな。わかった、それでは自分が部屋に戻っておこう。」

「感謝します。」

「恭也、それじゃあまた後でな。」

「ああ。」

クリスが部屋を出ると、マルギッテは恭也の方に向く。
その目は真剣そのものだ。

「不破恭也、クリスお譲様との仲は良好なようですね。」

「ああ、特に問題もなくやっている。ところで何かあったのか?」

「あまり良くない情報です。どうやらお譲様とお前の仲が疑われているようだ。」

「・・・なぜだ?」

「どうやら交際しているにしてはデートの一つもしていないことが原因のようです。ということで緊急任務を伝えます。お譲様を連れてデートをしなさい。」

「なるほど・・・しかし俺は今までデートの一つもしたことがないのだが、下手なことをすれば余計に疑われるのではないか?」

「それはこちらで情報操作をすることで相手側に伝えておきます。お前は尾行など相手側の密偵に注意しておけばいい。」

「了解だ。」

「ちょうど今は海の季節、リューベックにはトラヴェミュンデとい

う海水浴場があります。ここはドイツ有数のリゾート地としても有名ですからここに行きなさい。海でのデートならばそこまで気を使う必要もなくカップルに見えるでしょう。」

「海か・・・ならば水着を買いにいかなければいけないな。」

「こちらで用意出来ますが？」

「いや、さすがに他人の水着を着る気にはなれん。」

「そうですか、ならばお譲様と一緒に買いに行きなさい。これもデートの一環として見られるでしょう。」

「何から何まで世話になる。」

「これも任務だと理解しなさい。まったく、お譲様は交際経験がないのだからお前がリードしなければいけないのというのに・・・」

「マルギッテは意外とこういうことに詳しいんだな。」

「・・・ま、まあ優秀な軍人は何事においても詳しくなければいけないですから当然のことです。」

「そうか、やはりマルギッテは恋愛事においても経験豊富というこことか。ならば頼りにさせてもらう。」

「ま、任せなさい。」

（い、言えない！！私も恋愛経験がないなどと・・・しかも全てこの任務が始まってから本で得た知識などと・・・）

「ではさっそくクリスと出かけてくる。」

「ああ、こちらもある程度の護衛を用意するつもりですが気をつけてください。今回の縁談でフリードリヒ家や伯爵の力が増すのを防ごうと考える輩もいる筈ですから。」

「ああ、了解した。」

マルギッテは恭也の言葉を聞くと部屋から出て行った。
恭也もクリスに予定を話すために、彼女の部屋に向かった。

恭也は城の入口でクリスを待っていた。
マルギッテとの会話の後、恭也はクリスの部屋まで行き一緒に出掛けることを伝えた。
交際しているとはいえ、あまりそのことを意識していなかったクリスは恭也の突然の誘いに慌てた。
そのため準備があるからと、1時間後に門の前に集合となった。

恭也としてもかつて桃子に言われたことを思い出し、準備が必要であると考え承諾した。
準備をするために自分の部屋に戻った恭也は、いつもとは違う少し動きにくいがオシャレな服装に着替えた。
今回は相手側にデートであることを認識させるのが目的であるため、護衛寄りの服を避けるためだ。

目的地が海ということもあり、今回は京とのデートとは違いワック

スなどで髪の毛などは弄らなかった。
そういうこともあり、ほとんど準備に時間がかからなかった恭也は相変わらず桃子の言うことを信じて早めに待っていた。

途中、軍の人間が来て現地での場所取りを済ましていることを告げてきた。
迷惑ではないかと考えたが、これも任務の一つであることを思い出しお礼を言った。
しばらく待っていると、白いワンピースに肩から薄い黄色のカーディガンを羽織ったクリスが現れた。

「待たせたな!!」

「いや、俺も今来たところだ。」

「ふふ。」

恭也の言葉にクリスは薄く笑う。

「どうした?」

「恭也が30分以上前から待っていてくれたのは知っている。窓から見えていたからな。」

クリスが指をさすと、確かにクリスの部屋から入口が見えるようになっていた。
城の間取りなどはきちんと確認していたはずだが、恭也にしては珍しく忘れていた。

「まいったな、バレていたか。」

「だがその心遣いは嬉しかったぞ。」

「そうか。そういえば服装も変えて来たんだな、良く似合っている。」

「あぅ・・・あ、ありがとう。そう真正面から言われると少し照れるな。」

「クリスは美人だしそういうことは言われ慣れているだろう?」

「っ～～!?確かに父様やマルさんは良く言ってくれるが、その、なんだ・・・恋人から言われるのはまた別だろうに・・・」

「なんだ?最後の方がよく聞こえなかったのだが・・・」

「なんでもない!!ほら、それより早く行くぞ!!」

クリスは恭也の手を握ると、門の外に歩いて行った。
このときは気付かなかったが、後に自分が手を握っていたことに気付きクリスは顔を真っ赤にした。

海に行く前に恭也の水着を買わなければいけないということで、恭也とクリスは街に出掛けた。
初めは軍の人間が車を出すと言ってくれたが、恭也がそれを断った。

出来るだけ二人で行動するのが望ましいと考えたからだ。
そのため移動にはバスを使い、街は基本的に徒歩で見て回った。

「意外とすぐに見つかったな。」

「それにしても恭也は選ぶのが早い過ぎるぞ。自分はいつも新しい服を買うときはどれにしようか凄く迷うのだが。」

「男は大体これくらいだ。」

恭也が買ったのはシンプルな黒の水着で、店に入った瞬間に選んでいた。

「せっかく自分も一緒に選ぼうと思ったのに・・・」

「そうだったのか、それは済まない。しかし時間もそうあるわけではないし早いに越したことはないだろう?」

「まあそうだが・・・あっ!?」

クリスは何かを見つけた様で、目をきらきらさせている。

「どうした?」

「恭也、海に行く前に軽くランチをして行かないか?」

「ん?まあそうだな。時間的にも丁度いいしそうするか。」

「決まりだな!!それじゃああそこに入ろう。」

クリスが見つけたのは学生が好きそうなオシャレなカフェであった。
どこか翠屋に近い雰囲気もあり、恭也としても入りやすく賛成であった。

店員に案内されて二人が席に座ると、メニューが渡された。
恭也は多少ドイツ語が分かるが、それでも店のメニューは専門用語らしきものも含まれていて、きちんと内容を理解しているか自信がなかった。

「自分はサンドイッチとアイスカフェを、恭也はどうする？」

「では俺もそれを。」

「かしこまりました。少々お持ちください。」

店員はメニューを下げて厨房へ去っていった。
カフェとはドイツ語でコーヒーという意味であること、そしてサンドイッチならそう外れることがないだろうと考えて恭也はクリスと同じ物を注文した。
しばらくすると、先ほどの店員が注文したものを持ってきた。

「お待たせしました、アイスカフェが二つになります。」

「おお～！！」

「・・・・これが・・・アイスカフェ？」

運ばれてきたアイスカフェは恭也の想像していたようなアイスコーヒーではなく、コーヒーの上に生クリームとバニラアイスがたっぷり乗った飲み物であった。

その比率はほぼ1対1、純粋に冷たいコーヒーだと考えていた恭也は少し顔が引き攣った。

「ん～、甘くておいしいな～」

「・・・・・」

「どうした恭也、飲まないのか？」

「実は・・・甘い物は苦手なんだ。昔はそうでもなかったんだが、母さんが喫茶店を始める前に嫌というほど試食をさせられて以来、食べれなくなってしまった。」

「なに？ではなぜ頼んだんだ？ドイツでアイスカフェといえばこれのことだぞ。」

「普通に氷の入ったコーヒーだと思っていたんだ。」

「そうか・・・なら店員に声をかけて変えてもらうか？」

「いや、いくら口を付けていないからと言って流石にそれは申し訳ない。クリスは甘い物が好きなようだが俺の分もいるか？」

「いいのか！？」

「ああ、俺は下のコーヒーの部分だけでいい。」

「ありがとう恭也・・・ん～凄く美味しいぞ。」

「ほらクリス、口にクリームが付いているぞ。」

「なに、どこだ?」

「少しじっとしていろ。」

「ん〜」

恭也は近くにあった布巾でクリスの口を拭いてやる。
クリスも大人しくされるがままであった。
本人達がどう思っているかは別として、傍から見ればバカップルそのものであった。

おまけ

親不孝通り、川神市の闇の部分ともいえる無法地帯がそう呼ばれている。
そこにあるバーのカウンターで、一人の中年がため息を吐いていた。
中年の名前は宇佐美巨人。
源忠勝の里親で宇佐美代行センターと呼ばれる代行業、何でも屋を経営している。
その豊富な知識と貴重な経験に川神鉄心が目を付けて、現在では川神学園で教師もしている。
文章にして書くと中々立派な男だが、見た目はリストラ寸前のおっさんであった。

「はぁ・・・一体どうすればウメ先生を落とせるのかねぇ。おじさんも昔はイケイケだったのに・・・やっぱ年齢が不味いのか?」

ウメ先生とは弓道部の顧問である小島梅子のことである。
宇佐美はこのウメ先生に出会ってからというものの、他の女に目がいかなくなるほどに惚れてしまったのだ。
とはいえ、相手のウメ先生は宇佐美のことを嫌っているのか全く相手にされない。
そうして宇佐美が一人で自問自答をしていると、隣の席に一人の男が座った。
男は宇佐美と同じように何か悩みがあるようで、酒を頼むと一人で自問自答し始めた。

「ハァ・・・一体いつになれば夏織のやろうは俺に振り向いてくれんのかねぇ・・・てかアイツ8年前に自分より強くなったらOK出すって言ったくせによぉ・・・あれ以来死ぬ気で鍛錬したんだから今なら俺の方が強いだろ絶対。」

新しく現れた男の名は釈迦堂刑部、川神院の元師範代で今はとある理由が原因で師範代を降ろされた人間だ。
というのも師範代という地位に就きながら己の力を上げることばかりに意識を注ぎ、弟子をまったく取ろうとしなかったため師範代に相応しくないとされたためである。
釈迦堂としても必ず弟子を取らなければいけない師範代という地位は己には合わないと考え、素直に降りようとした。
とはいえ自分より弱い者が師範代では川神院の強さの純度を保てないと考え、師範第候補や現師範代であるルーと戦い、勝った者のみ師範代とした。
この結果ルーが今まで隠してきた奥義を使用し釈迦堂を撃破、川神院唯一の師範代となった。

「「はぁ・・・」」

同時にため息を吐いたからか、お互い相手のことを認識した。
そして一目見て分かった、自分達は同じ悩みを持った仲間なのだと。

「行きますか。」

「ああ。」

二人に言葉など必要なかった。
同じように立ち上がりバーを出ると、新しい店で二人は何十年来の親友のように語り合った。
その次の日、べろべろになって帰ってきた宇佐美は忠勝に、釈迦堂は鉄心に雷を落とされた。

確認するのは大切だ（後書き）

京のときは少し大人っぽい雰囲気で、クリスのときは学生らしいラブコメ風味でいきたいと思っています。
クリスは箱入り娘なため中々恋愛に発展しない・・・地道に（作者が）頑張ってクリスの好意を引き上げていきます。まあもともとサムライというだけで高評価ですか。

ちゃっかり釈迦堂さんは川神院を破門になっていなかったり・・・これはあるキャラが原因となっています。

それではここまで読んで頂きありがとうございました。

夏！！海！！出会い！？（前書き）

ＰＶ数が３００００００を超えました！！本当に読者様には感謝でいっぱいです。
これからも応援よろしくお願いします。

急に話数が減ってびっくりした人もいると思いますが、アンケートの部分を消しただけなので本編には影響していません。

初めにドイツ編は2～3話と言ったのですが全然長くなってしまいました。終盤に向かってきましたがあと少し続きます。

夏!!海!!出会い!?

トラフェミュンデ

バルド海におけるドイツ最大の港であり、ドイツ有数のリゾート地として有名な場所である。
そのため夏場は多くの観光客で賑わい、本来ならば場所を確保するのも難しい筈であった。
とはいえ、恭也達は軍の者が場所を確保していたためすぐに場所を取ることができたのだが。

「海だ～!!見ろ恭也、すごく綺麗だぞ!!」

「ああ、確かに綺麗だ。クリス、あそこで着替えることが出来るようだ。一度着替えてからまたここに集合でいいか?」

「ああ!!それじゃあ済まないがもう少しここで場所の確保をしておいてくれ。」

「わかりました。」

「済まないな。」

恭也の言葉にマルギッテの部下は任務ですので、の一言で済ませた。
しかし真夏の海に軍服で立ち続ける姿は周りからかなり注目されていた。
しかも任務の内容がカップルの場所取りというのだから、この軍人は一部の人間から同情の眼差しで見られていた。

更衣室で着替えた水着に着替えた恭也は、上着に長袖のパーカーを着ていた。
さすがに海とはいえ、自分の傷だらけの体を他の観光客に見せれば注目を浴びると考えたからだ。
やはり男子の方が着替えるのが早いらしく、恭也は先ほどの軍人が取ってくれた場所で待ち続ける。
ちなみに軍人は恭也が来たことを確認すると帰っていった。
しばらくするとクリスの気配を感じた恭也はそちらの方に向く。

「待たせてしまったみたいだな、済まない。」

「いや、それほど待っていない。」

クリスは白色に青色のラインの入ったビキニタイプの水着で現れた。
金髪で白人らしく綺麗な白い肌をしているクリスに良く似合っていた。
以外に大胆な水着を着てきたことで、恭也は少し顔が赤くなってしまった。

「今年買った新しい水着なんだがどうだろうか?」

「ああ、肌がきれいなクリスに良く似合っている。」

「そ、そうか。そう真顔で言われると少し照れるな。というか恭也はなぜパーカーを着ているんだ?」

「前に見たと思うが、俺の体は修行で付いた傷が多数あるからな。あまり観光客に見せる物でもないだろう。」

「ああ、なるほど。でもここならそう気にする必要もないと思うぞ。軍の者達がよく演習で来るから地元民は傷だらけの人間くらい見慣れているからな。」

「そうなのか？」

「ああ、だから普通に服を脱いでも大丈夫だ。ん？・・・前に・・・見た・・・？・・・っ！？」

「脱衣場で見ただろう？」

クリスは前に見た物と言われ、恭也のモノを思い出してしまい顔を真赤にしてしまった。

「見てない、私は何も見てないぞ！！」

「何を言っている？あれだけはっきりと見ただろ？」

「見てないんだ！！」

「そ、そうか？」

「そうだ！！」

クリスの剣幕に恭也も押され、納得してしまう。

その後二人はしばらく準備運動をするなど海に入る準備をしていた。

「なあ恭也、これを背中に塗ってくれないか？」

「こ、これをか？」

「ああ。」

そう言ってクリスが見せてきたのは日焼け止めであった。
さすがの恭也も、女性の肌を直接触れるのは恥ずかしいためなんとか拒否しようとした。

「クリス、ドイツの人はあまり日焼けなどは気にしないと思っていたのだが・・・」

辺りを見渡すと、ほとんどの者が普通に日焼け止めなど塗らず、むしろ日に焼けようとしている者が多かった。
ヨーロッパでは日焼け止めを塗る人は少数派で、小麦色の肌というのはバカンスに行って来た人の証と思われている。
そのため逆に日焼けしなければ、バカンスに行けない可哀そうな人という目ですら見られることもある。
そう言ってクリスを説得しようとしたが無駄に終わった。

「まあそれも確かにある。だが私は父様に日焼けしてはいけないと言われているからな。」

「なん・・・だと・・・！？」

父であり優秀な軍人であるフランクを尊敬しているクリスにとって、彼の言うことは絶対であった。
それを知っていた恭也はこれを覆すことが出来ないと理解してしまい、諦めるしかなかった。

恭也が納得したのを確認したクリスは、シーツの上に寝そべると背中の紐を解いた。
白く美しいクリスの肌は太陽を反射させ、一枚の絵画のように浜辺に合っていた。

やることは朝のマッサージとほとんど変わらないが、今のクリスの身にまとっている者は下半身の水着一枚だけである。
もしここで恭也がクリスの持ち上げでもすれば、その上半身を晒すことになるだろう。
もちろん恭也はそんなことはしないが。
恭也は覚悟を決めて、せめて視覚に惑わされないようにと目を閉じた。

「御神流、心。」

目を頼らず、音と気配によって相手の居場所を知る技である。
もちろん、きちんと気配を捕えているので恭也が間違って下半身に手を出すことはない。
クリスも恭也のことを信頼しているため、だいぶリラックスしている。

「・・・・・終わったぞ。」

「そうか、ありがとう。恭也も塗るか？」

「いや、俺はいい。」

「よし、それじゃあ泳ごう！！」

「ああ・・・いや、少し待ってくれ。」

「ん、どうした？」

恭也は少し離れたところでナンパをしている男を発見した。

「ちょっと行ってくる。」

場所が場所であるため、普通であれば特に気にするものでもないがどうやら相手の女性は嫌がっているように見えた。
そのため注意するために近づいて行った。

「ヘイＹＯＵ、いいじゃん俺と遊ぼうよ～。」

「だから、連れがいるって言ってるでしょ！！」

「じゃあその連れの子も一緒でいいからさ～。」

「もう、しつこいわね。」

「ちょっといいだろうか？」

恭也はドイツ語を簡単にしか話せないが、今の会話くらいはなんとか聞き取れた。
ナンパ男が女性にしつこくしていたのがわかったため、間に入った。
いきなり現れた恭也に、相手は喰ってかかった。
それに対して恭也は慣れないドイツ語を使いなんとか会話を成立させようとした。

「なんだテメェ、いきなり現れてどういうつもりだ！？」

「いきなり・・・現れて・・・なるほど。自分はその人の友達だ。」

「ああ!?嘘つくんじゃねぇよ!!だいたいドイツ語もまともに話せない奴がこんな美人の連れなわけねぇだろうが!!」

「む?まずいな、今のは上手く聞き取れなかった。」

「だいたいなんでビーチ来て長袖のパーカーなんだよ!?ありえないだろうが!!」

「今のは・・・パーカー・・・ありえない・・・パーカーを脱げということか?なぜかわからんがまあいいか。」

意味を上手く翻訳出来なかった恭也は勘違いをしながら、着ていたパーカーを脱いだ。

「いいから邪魔すんってうおぉ!?なんだぁその体!?」

恭也は服の上からでは分からないが無駄な肉を無くした引き締まった体をしており、さらに堅気の人間ではありえないような傷が多数あることからナンパ男もビビった。

「これでいいのか?」

「お、俺が悪かった!!見逃してくれ!!」

「む、なぜ謝る?・・・まあいい、行け。」

恭也がそういうとナンパ男は遠くへ去っていった。

慣れないドイツ語を話し、恭也は少し精神的に疲れてため息を吐い

た。

「ふう・・・」

「あの・・・ありがとうございました。」

「・・・日本語？」

「そうなんですか。」

「あ、私これでも日本人なんです。祖父がドイツ人なので見た目はあまり日本人っぽくないですけど。」

女性が言うように髪も目の色も日本人離れしており、パッと見では日本人と判断出来なかった。
腰まである髪の毛は太陽を反射して艶があり、女性の日本人離れした顔立ちで非常に整っていることからナンパされるのも頷けるものであった。
先ほどまでは普通にドイツ語を話していたため普通に現地人だろうと思ったのだ。

「ええ、それにしてもまさかあんなにしつこい人がいるなんて・・・」

「まあ貴方みたいな美人な方では仕方ないのではないですか？」

「あら、あなたもナンパ？」

「あ、いえ、そういうつもりでは！！」

「慌てちゃって、冗談よ。」

「そういう冗談は苦手です。」

「ふふふ。あら、連れが来たみたい。」

女性が言うように、少し離れたところから新しい女性がこちらに向かってくるのが気配で確認できた。
丁度恭也の背後から向かってきているようで、まだ顔を確認していない。
恭也はどこかで感じたことのある気配だと思ったが、流石に軍人を除いて現地人に知り合いなどおらず、気のせいだと判断した。

「さくら、ナンパされてたみたいだけど大丈夫だった?」

「ええ、こちらの人が助けてくれたから平気よ。」

「へ〜、そうなんだ。さくらを助けてくれてありがとうございま・・・あれ、もしかして不破君?」

唐突に名前を呼ばれ女性の方に振り向くと、そこに居たのはクラスメートの月村忍だった。
流石にこれには普段冷静な恭也も驚く。

「月村か、まさかこんなところで会うとは・・・」

「うわ〜、すごい偶然だ。京からドイツに行ってるってことは聞いてたけどまさか本当に会うなんて思ってもなかったわ。」

「忍、知り合いなの?」

「え?あ、うん。クラスメートの不破君、友達だよ。」

「初めまして、不破恭也です。」

「それで、こっちが私の叔母の綺堂さくら。叔母っていうけどまだ21歳だから私にとっては姉みたいなものなんだけどね。」

「初めまして、忍がいつもお世話になってるわ。」

「なによ~、それじゃあいつも私が迷惑をかけてるみたいじゃない。」

「実際そうでしょ。」

「ぷ~・・・そういえば不破君は一人でこんなリゾート地に来るなんてどうしたの?もしかしてナンパ?」

「違う!!ちょっとドイツにいる知り合いの頼みごとでな・・・」

「へぇ~・・・頼み事ねぇ。」

忍はまるで面白いものを見つけたといわんばかりに笑顔になった。
いくら知り合いの頼みとはいえ外国の、それもこのようなリゾート地に来るなど普通ではありえない。
持ち前の好奇心が刺激されていた。
恭也はその笑顔に悪寒を感じ、一歩後ずさった。

「その頼み事って何なのかなぁ?忍ちゃんすご~く気になるなぁ・・・」

「な・・・内緒だ。」

恭也としてもこれが極秘任務であると認識しているため、こういうしかなかった。

なにより任務の内容が恋人役などと言えば、休み明けの学校で何を言われるかわかったものではない。

しかしそれが余計に忍の好奇心を刺激した。

「ふ～ん、そんなこと言うんだぁ。ならこっちにも考えが・・・」

「恭也!!ナンパを追い払ったのは素晴らしいが、一体いつまでかかっているんだ!?」

忍の声を遮り、クリスがいつの間にか近くまで来ていた。

今まで押されていた恭也はクリスの声がまるで天の助けのように感じられた。

「クリス・・・」

「もしや私を放ってそっちの女性達と話している方が楽しいのか?それならなぜ私と交際などとぉ・・・」

天の助けだと思ったのもつかの間、クリスは盛大に勘違いをしていた。

助けた女性が恭也と話しこんでいることから、恭也自身がナンパをしているのではないかと考えたのだ。

普通に恭也の性格を考えればそんなことはありえないのだが、仮にも自分の彼氏が他の女と仲良く話しているのは気分がよくなかった。

クリスはだんだん声に力がなくなり、最後の方では目に涙すら浮か

んできた。
その光景を見て、恭也は慌てて誤解を解こうとする。
「クリス、それは勘違いだ。たまたま助けた人がクラスメートの知り合いで・・・」
「グス・・・そんな偶然あるものか。私は信じないぞ。」
「ところがそんな偶然があるんだよ～」
「え？」
突然クリスに話しかけたのは、横で話を聞いていた忍であった。
「久しぶりだねクリス。」
「え、え？・・・忍？」
「そうだよ～。世界の美少女忍ちゃんで～す。」
「な、なんで忍がここに？」
「ちゃんとドイツいるから今度遊ぼってメールしたじゃない。」
「そ、それはそうだが・・・」
「それともクリスは私に会いたくなかったの？」
よよよ、と忍は泣き真似をする。

「そ、そんなことはないぞ!!忍は自分の大切な友達だからな、会いたかったに決まっている!!」

「いや～そこまで言ってもらえると嬉しいわ。私も会いたかったよ。」

「そうか!!」

その後も二人で盛り上がっていた。
二人の会話に呆気に取られている恭也とさくら。
まさか偶然助けた人がクラスメートの親戚で、自分の連れがそのクラスメートの友達だなんて想像もしていなかった。
世間はずいぶん狭いんだなと感じた瞬間であった。
二人の話も落ち着いたのか、置いてきぼりであった恭也とさくらのところまで戻ってきた。

「まさか忍と恭也が同じ学校のクラスメートだったとはなぁ。」

「俺もクリスと月村が友だとは思わなかった。」

「私からすればクリスと恭也が知り合いってことの方がビックリだけどね～。ていうかどういう関係?」

その発言は恭也にとって鬼門であった。
1学期間同じクラスで生活してきたのだ。
ここでウソとはいえ付き合っているなどと言えば学校で何を言われるか分かったモノではない。

「クリス、ちょっと待っ・・・」

「ああ、その、なんだ・・・自分達は交際しているんだ。」

なんとかクリスに合図を出そうとする恭也の努力は虚しく、間に合わなかった。

「・・・・・・・・ウソー!!!!!」

顔を赤らめながら発言するクリスの一言を、忍は一瞬理解できなかった。

そして理解した瞬間、自称世界の美少女の声が、白い砂浜に響き渡った。

おまけ

「ぐはっ!!馬鹿な・・・我らはドイツ軍最強の部隊だぞ・・・それが、たった一人の人間に・・・」

「アハハ、群れなきゃなんにも出来ない軍人程度がアタシに勝てるわけ、ねえだろ!!」

クリスと恭也の様子を陰ながら見守っていたマルギッテの部下達が、一人の女性と戦っていた。

否、それはもはや戦いとすら呼べるものではなかった。

なぜなら女性が一方的に軍人達を蹂躙しているだけであったのだから。

女性はまるで狂犬のように眼を充血させていた。

「なんという強さだ・・・なんとか隊長に連絡を・・・」

「誰がさせるか、ほれ。」

部隊の人間が無線を使ってマルギッテに連絡を取ろうとするが、女性によってその無線が破壊された。
連絡手段を無くした以上、少しでも情報を持ち帰らなければと正体を探りにいく。

「クソ！！キサマ、目的は何だ！？」

「あ、誰が教えるかバ～カ。と思ったけど今の雇い主キライだし別にいっか。ほら、お前らの大好きなお譲様いるだろ、あれの誘拐だよ。」

「な・・・に・・・！？」

「なんでもこれ以上お前らの家に力を持たれると困るらしいんだわこれが、だから誘拐して脅すらしいぜ。今回の縁談を取り消せってよ。」

「お譲様を誘拐だと！？そんなこと絶対させるものか！！」

「無理無理、アタシが出張る以上この依頼は達成されたも同然だ。ま、アタシを呼んできた以上雇い主も相当本気ってことだな。」

軍人にもそれはわかった。
戦って分かったが、この女性の強さはもはや次元の違うところにあると感じたからだ。

それこそ、かつて一人で部隊を壊滅させた不破恭也を思い出させる程に。
もはや恭也が傍にいるからといって安心できるレベルの敵ではなかった。

「キサマは・・・危険だ。」

「だから？」

「ここで死んでもらう！！」

軍人は覚悟を決めると一気に女性に走り寄った。
当然、女性もただ見ているだけでなく近づいた瞬間殴り飛ばそうとした。
その一撃を顔面に受け歯が何本も折れたが、軍人は怯まず女性に抱きついた。

「おいおい、お前程度じゃ無理だって・・・っておい！？」

「一緒に・・・地獄に堕ちろ！！」

そのとき敵が初めて焦りを見せた。
軍人が懐に隠していた手榴弾のピンを抜いたからだ。
そして爆発が・・・

「起き・・・ない？いや、手榴弾はどこにいった！？」

「危ねぇ危ねぇ。もう少しでこの辺一帯が吹き飛ぶとこだったぜ。」

「キサマ・・・何をした！？」

「爆弾なら遥か空の上さ。ほら寝てな。」

「ぐが！！隊長・・・恭也殿・・・すみませ・・・お譲様を・・・守・・・」

女性の一撃に軍人は耐えることが出来ず、無念のまま気絶をした。
先ほどの軍人が最後であったようで、他の者は全員気を失っていた。

「まったく、面倒臭い依頼だぜ。」

女性はそう言うとターゲットである双眼鏡でクリスを見る。
友達と話しているのかずいぶん楽しそうだった。
それを見た女性の顔は先ほどまでの狂犬のようなものではなく、何かを思い出して後悔しているような顔であった。

「大人に振り回されるのはいつも子供・・・か。」

そして今度はその視界を恭也の方に移して見る。

「フリードリヒ側は今二つに割れていると聞いたが、あれが英雄フランクの用意した男か。こりゃクラウス伯爵に比べてずいぶんといい男だな・・・っ！？」

そして女性が恭也の方を眺めていると、恭也が女性の方を見た。
それも殺気を籠めた目で睨み、口を動かした。

クリスに手を出せば殺す・・・と

「ウソだろ・・・ここから向こうまで３ｋｍ以上離れてるんだぞ。

しかもアタシだって気配抑えてるのに何者だありゃ・・・」

女性は今回の依頼を受ける際、ターゲットであるクリスの情報しか得ていなかった。
なぜならクリスが誰と結婚しようが女性にとっては関係ない話であるからだ。
だからこそ見逃していた、不破恭也という存在を。

「くくく、まあいい。つまらない依頼だと思ったがとんでもない奴がいたもんだ。アイツとなら全力で死合いが出来そうだ。」

女性はより強い者を求める戦闘狂であり、強い人間が大好きであった。
それは昔、名前も知らないある男と戦い、負けた瞬間に己の純血を捧げたほどだ。

「さて、それじゃあちゃっちゃと済ましますか。家には可愛い子猫ちゃん達がお腹を空かして待ってるだろうしな。」

女性は双眼鏡を捨てると、鼻歌を歌いながらクリス達の方に歩いて行った。

夏！！海！！出会い！？（後書き）

なぜかドイツ編に入ってからクリスがヒロインしていることに対する感想がなくてびっくりです。京のときはそこそこ反応があったのに・・・

この作品の読者にはクリスに人気がないからなのか・・・それとも作者の力量ではクリスを可愛く表現出来ていないのか・・・

前者だったら寂しいですが後者だったら悲しいですね。

と、へこんでも仕方ないのでこれからもっと人気が出るように頑張りたいと思います！！

というわけでこれからも応援してくれると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3078y/

守りたい者ありますか？

2011年12月18日06時46分発行